

Oracle9iAS Discoverer

構成ガイド

リリース 9.0.2

2002 年 11 月

部品番号 : J06450-01

Oracle9iAS Discoverer 構成ガイド, リリース 9.0.2

部品番号 : J06450-01

原本名 : Oracle9iAS Discoverer Configuration Guide, Version 9.0.2

原本部品番号 : A95458-02

Copyright © 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	ix
対象読者	x
表記規則	x
関連文書	xi
Discoverer Plus および Discoverer Viewer を実行するための前提条件	xi

1 Oracle9iAS Discoverer の概要

1.1	Oracle9iAS Discoverer の概要	1-2
1.2	このマニュアルについて	1-2
1.3	Oracle9iAS Discoverer について	1-4
1.4	Oracle9iAS Discoverer および Oracle9i Application Server について	1-7
1.5	Oracle9iAS Discoverer のアーキテクチャ	1-7
1.6	Discoverer クライアント層	1-8
1.6.1	Discoverer クライアント層と Discoverer Plus	1-8
1.6.2	Discoverer クライアント層と Discoverer Viewer	1-8
1.7	Discoverer サービス層	1-9
1.7.1	Discoverer J2EE コンポーネント	1-9
1.7.1.1	Discoverer Servlet とは	1-10
1.7.1.2	Discoverer Plus Servlet とは	1-10
1.7.1.3	Discoverer Portlet Provider Servlet とは	1-10
1.7.2	Discoverer CORBA コンポーネント	1-11
1.7.2.1	Discoverer Session コンポーネントとは	1-11
1.7.2.2	Discoverer Preference コンポーネントとは	1-12
1.7.2.3	OAD (Object Activation Daemon) とは	1-12
1.8	Discoverer データベース層	1-13

1.9	Oracle9iAS Discoverer の動作について.....	1-14
1.9.1	Discoverer Plus の動作.....	1-14
1.9.2	Discoverer Viewer の動作.....	1-15

2 Oracle Enterprise Manager との Discoverer の使用方法

2.1	Oracle Enterprise Manager との Discoverer の使用方法.....	2-2
2.2	Oracle Enterprise Manager について.....	2-2
2.3	Oracle Enterprise Manager の特長.....	2-2
2.4	Oracle Enterprise Manager の起動方法.....	2-3
2.5	パブリック接続の作成方法.....	2-5

3 Oracle9iAS Discoverer の実行

3.1	Oracle9iAS Discoverer の実行.....	3-2
3.2	Oracle9iAS デモ・データベースについて.....	3-2
3.3	クライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合.....	3-3
3.4	クライアント・マシンで Microsoft Internet Explorer を使用して Discoverer Plus を初めて実行する方法.....	3-4
3.5	クライアント・マシンで Netscape Navigator を使用して Discoverer Plus を初めて実行する方法.....	3-8
3.6	Discoverer Viewer の実行方法.....	3-14

4 Oracle9iAS Discoverer のメンテナンス

4.1	Oracle9iAS Discoverer のメンテナンス.....	4-2
4.2	Discoverer の Windows サービスの開始および停止.....	4-2
4.2.1	Discoverer の Windows サービスとは.....	4-2
4.2.2	Discoverer の Windows サービスが開始される時.....	4-3
4.2.3	Discoverer の Windows サービスの手動による開始方法.....	4-3
4.2.4	Discoverer の Windows サービスの手動による停止方法.....	4-4
4.2.5	Discoverer の Windows サービスを手動による開始に変更する方法.....	4-5
4.2.6	Discoverer の Windows サービスのエラーを表示する方法.....	4-5
4.3	Discoverer システムのシャットダウン.....	4-6
4.3.1	Discoverer システムをシャットダウンするとき.....	4-6
4.3.2	個々のサーバーをシャットダウンする方法 (Windows のみ).....	4-6
4.3.2.1	個々のサーバーを段階的に切断する方法 (Windows のみ).....	4-6
4.3.2.2	個々のサーバーをただちに強制終了する方法 (Windows のみ).....	4-7
4.3.3	Discoverer システム全体をシャットダウンする方法 (Windows および UNIX).....	4-7

4.3.3.1	Discoverer システムを段階的に切断する方法	4-7
4.3.3.2	Discoverer システムをただちに切断する方法	4-9
4.4	UNIX でスタンドアロンの Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを停止する方法	4-10

5 Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール

5.1	Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール	5-2
5.2	Oracle9iAS Discoverer を複数のマシンにインストールする理由	5-2
5.3	Oracle9iAS のインストールについて	5-2
5.4	複数のマシンでの Discoverer の構成	5-6
5.5	Discoverer Preference コンポーネントを実行するマシンの指定	5-7
5.5.1	Discoverer Preference サーバー・マシン名の確認方法	5-8
5.5.2	Preference サーバー・マシンを使用するために複数のマシンへのインストールで 他のマシンの登録セッション・スクリプトを変更する方法	5-9
5.6	複数のマシンでの tnsnames.ora ファイルの構成	5-10
5.7	複数の Oracle HTTP Server と OC4J コンポーネントの使用について	5-11
5.7.1	Oracle HTTP Server の単一インスタレーション、および Oracle9iAS Containers for J2EE の複数インスタレーションを行って、Oracle9iAS Discoverer を使用する方 法	5-12
5.7.2	Oracle HTTP Server の複数インスタレーション、および Oracle9iAS Containers for J2EE の複数インスタレーションを行って、Oracle9iAS Discoverer を使用する方 法	5-13

6 Discoverer CORBA コンポーネントの管理

6.1	Discoverer CORBA コンポーネントの管理	6-2
6.2	Discoverer CORBA コンポーネントについて	6-2
6.3	Discoverer CORBA コンポーネントの管理	6-2
6.4	OAD が実行中で応答していることを確認する方法	6-3
6.4.1	UNIX で OAD が実行中で応答していることを確認する方法	6-3
6.4.2	Windows で OAD が実行中で応答していることを確認する方法	6-3
6.5	登録されたコンポーネントを表示する方法	6-4
6.6	OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除する方法	6-5
6.6.1	コマンドラインを使用して OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および 登録解除する方法	6-5
6.6.1.1	コマンドラインから Discoverer Session コンポーネントを登録解除する方法	6-6
6.6.2	Windows の「スタート」メニューを使用して OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除する方法	6-7
6.7	Preference コンポーネントを開始および停止する方法	6-7
6.7.1	UNIX で Preference コンポーネントを開始および停止する方法	6-7

6.7.2	Windows で Preference コンポーネントを開始および停止する方法.....	6-8
-------	---	-----

7 Discoverer 環境設定の編集

7.1	Discoverer 環境設定の編集.....	7-2
7.2	Discoverer 環境設定とは.....	7-2
7.3	Discoverer システム環境設定.....	7-3
7.4	Discoverer ユーザー環境設定.....	7-3
7.5	すべてのユーザーに対するユーザー環境設定を設定する方法.....	7-5
7.6	個々のユーザーのユーザー環境設定を設定する方法.....	7-5
7.7	Discoverer ユーザー環境設定のリスト.....	7-6
7.7.1	EnhancedAggregationStrategy ユーザー環境設定	7-14
7.8	dis51pr コマンドライン・ユーティリティで使用する引数のリスト	7-15
7.9	Discoverer システム環境設定のリスト.....	7-15

8 URL パラメータを使用した Discoverer の起動

8.1	URL パラメータを使用した Discoverer の起動	8-2
8.2	URL とともに Discoverer を使用する理由	8-2
8.3	URL パラメータの構文とは	8-2
8.4	URL パラメータの使用例	8-4
8.4.1	例 1: URL パラメータを使用して Discoverer Viewer を起動する場合	8-4
8.4.2	例 2: URL パラメータを使用して Discoverer Plus を起動する場合.....	8-4
8.4.3	例 3: URL にパスワードを表示しないで Discoverer を起動する場合	8-4
8.5	Discoverer の汎用 URL 引数	8-5
8.6	Discoverer Plus の URL 引数.....	8-7
8.7	Discoverer Viewer の URL 引数.....	8-13

9 Oracle9iAS Web Cache との Discoverer の使用

9.1	Oracle9iAS Web Cache との Discoverer の使用.....	9-2
9.2	Oracle9iAS Web Cache について	9-2
9.3	Oracle9iAS Web Cache の利点	9-4
9.4	Oracle9iAS Web Cache の動作について	9-5
9.5	Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合	9-6
9.6	Oracle9iAS Web Cache との Discoverer Viewer の使用方法.....	9-7
9.7	Discoverer Viewer 用に Oracle9iAS Web Cache を使用可能にする方法.....	9-8
9.8	「問合せの再実行」リンクを表示し、「環境設定」と「表示オプション」リンクを隠す方法....	9-8
9.9	Discoverer Viewer のスティッキーなワークシート動作を使用不可能にする方法.....	9-10

9.10	Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合の注意.....	9-11
9.10.1	キャッシュから Discoverer Viewer ドキュメントを削除する方法.....	9-11
9.10.2	正しい言語がデプロイされているかどうかをチェックする方法.....	9-12
9.10.3	許可のないユーザーによる、キャッシュされたページへのアクセスを防止する方法.....	9-13
9.10.3.1	同じ URL を持つ複数のドキュメントがキャッシュされるように指定する方法	9-13
9.10.3.2	キャッシング・ルールに関連するセッション / パーソナライズド属性を 作成する方法.....	9-14
9.10.4	Discoverer Viewer 用にあらかじめ構成されている Oracle9iAS Web Cache の キャッシュ可用性ルール・リスト.....	9-16
9.10.4.1	キャッシュ 可用性ルール: 問合せを実行するページをキャッシュしない.....	9-16
9.10.4.2	キャッシュ 可用性ルール: スケジュールされたワークブック・ページ (およびそれから導出されるすべてのワークブック) をキャッシュしない.....	9-17
9.10.4.3	キャッシュ 可用性ルール: Discoverer Plus ページをキャッシュしない.....	9-18
9.10.4.4	キャッシュ 可用性ルール: キャッシュされた問合せパラメータに含まれている 問合せページをキャッシュしない.....	9-18
9.10.4.5	キャッシュ 可用性ルール: キャッシュされたドリル指定を含む問合せページを キャッシュしない.....	9-19
9.10.4.6	キャッシュ 可用性ルール: RMI コマンドをキャッシュしない.....	9-19
9.10.4.7	キャッシュ 可用性ルール: Viewer Servlet によって供給されたすべてのページを キャッシュする.....	9-19

10 Discoverer Viewer のカスタマイズ

10.1	Discoverer Viewer のカスタマイズ.....	10-2
10.2	Discoverer Viewer のカスタマイズとは.....	10-2
10.3	Discoverer Viewer をカスタマイズする方法.....	10-3
10.4	Discoverer Viewer CSS ファイルの更新.....	10-4
10.5	Discoverer Viewer の XML ファイルの更新.....	10-5
10.6	表示オプション.....	10-6
10.7	表示テンプレートについて.....	10-7
10.8	ブラウザ外観のサンプル・ファイル (blaf.htm)	10-9
10.9	デフォルトの Discoverer Viewer の外観を変更する方法.....	10-10
10.10	デフォルトの Discoverer Viewer のロゴを変更する方法.....	10-11
10.11	Discoverer Viewer ユーザー・インタフェース・オプションを削除する方法.....	10-13
10.12	表示テンプレートの作成方法.....	10-14
10.13	JavaScript が無効な状態で Discoverer Viewer を実行する方法.....	10-16

11 Oracle9iAS Portal との Discoverer の使用

11.1	Oracle9iAS Portal との Discoverer の使用	11-2
11.2	Oracle9iAS Portal について	11-2
11.3	Oracle9iAS Portal との Oracle9iAS Discoverer の使用方法	11-3
11.4	Oracle9iAS Portal との Discoverer Portlet Provider の登録方法.....	11-4
11.5	Discoverer Portlet Provider の編集方法	11-7
11.6	Oracle9iAS Discoverer のデフォルトのパフォーマンス設定の変更.....	11-9

12 Discoverer のパフォーマンスおよび拡張性の最適化

12.1	Discoverer のパフォーマンスおよび拡張性の最適化.....	12-2
12.2	Discoverer のパフォーマンス.....	12-2
12.3	Discoverer の拡張性.....	12-2
12.4	Discoverer のパフォーマンスを改善する方法.....	12-3
12.4.1	ワークシートおよびページ・アイテムを正しく使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法.....	12-4
12.4.2	ビジネス領域およびフォルダの表示に必要な時間を短縮して、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法.....	12-4
12.4.3	サマリー・フォルダを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法	12-5
12.4.4	DECODE 文を使用しない「select all parameter values」オプションを提供する方法により、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法	12-5
12.4.5	Discoverer Administrator のヒントを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法.....	12-6
12.4.6	Case Storage アイテム・プロパティを正しく設定して、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法.....	12-6
12.4.7	データベースからのフェッチ行で使用される配列のサイズを増やして、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法.....	12-7
12.4.8	個別値を含むテーブルの値のリストに基づいて、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法.....	12-8
12.4.9	システムのキャッシュ設定を変更することにより、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法.....	12-9
12.4.10	ワークシートを夜間に実行するようにスケジュールして、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法.....	12-9
12.4.11	Oracle9iAS Web Cache を使用して、Discoverer パフォーマンスを向上する方法.....	12-10
12.5	Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法	12-10
12.5.1	Oracle9iAS の拡張性機能を使用して、Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法.....	12-10

12.5.2	OC4J のメモリー使用量パラメータを指定して、Discoverer の拡張性を向上する方法	12-11
12.5.3	OC4J 処理の数を指定して、Discoverer の拡張性を向上する方法	12-11
12.5.4	XSL スタイルシートのプーリングを使用して、Discoverer Viewer の拡張性を向上する方法	12-11

13 Discoverer でのデータ・セキュリティ維持

13.1	Discoverer でのデータ・セキュリティ維持	13-2
13.2	Discoverer およびデータ・セキュリティ	13-2
13.3	データベースのセキュリティ	13-3
13.4	End User Layer (EUL) のセキュリティ	13-3
13.4.1	ビジネスエリアについて	13-3
13.4.2	Discoverer の接続について	13-3
13.4.3	Single Sign-On について	13-4
13.4.3.1	Oracle9iAS Single Sign-On とは	13-4
13.4.3.2	Single Sign-On および Discoverer について	13-4
13.4.3.3	Single Sign-on を使用しない環境での認証	13-4
13.4.4	Discoverer および Portal のセキュリティ	13-5
13.5	ネットワークのセキュリティについて	13-5
13.5.1	Discoverer Viewer のセキュリティについて	13-5
13.5.2	Discoverer Plus のセキュリティについて	13-6
13.5.2.1	標準の署名認可レベル以外を使用している環境で Discoverer Plus を構成する場合	13-8
13.5.2.2	Discoverer Plus 通信プロトコルの指定	13-8
13.5.2.3	OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示する方法	13-9
13.5.2.4	デフォルトの通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus を セットアップする方法	13-12
13.5.2.5	トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus を セットアップする方法	13-14
13.5.2.6	セキュア・トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus を セットアップする方法	13-15
13.5.3	Oracle9iAS Discoverer Plus リリース 9.0.2 と 4.1 の相違点	13-16
13.5.4	セキュリティの脆弱性	13-16
13.6	セキュリティについてよくある質問	13-16
13.6.1	ファイアウォールとは	13-16
13.6.2	非武装地帯 (DMZ) とは	13-17
13.6.3	HTTPS の概要と HTTPS を使用する理由	13-18
13.6.4	イントラネットでの Discoverer の構成方法	13-19
13.6.5	ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法	13-19

13.6.6	複数のファイアウォールを通して動作する Discoverer の構成	13-20
13.6.7	イントラネット内で暗号化を使用して Discoverer を構成する方法	13-20
13.6.8	ファイアウォールを通して暗号化を使用する Discoverer の構成方法	13-20
13.6.9	Discoverer による通信の暗号化を確認する方法.....	13-21
13.6.10	Discoverer を SSL および SSL を使用しない通信用に構成する方法	13-21
13.6.11	イントラネット用およびファイアウォールを通してユーザーが Discoverer に アクセスするように Discoverer を構成する方法.....	13-21
13.6.12	NAT デバイスと Discoverer の使用.....	13-22

14 Oracle9iAS Discoverer および Oracle Applications

14.1	Oracle9iAS Discoverer および Oracle Applications	14-2
14.2	Discoverer 接続および Oracle Applications	14-2
14.3	Oracle Applications 用に Discoverer 構成を設定する方法	14-3
14.4	Oracle Applications のみの環境で Discoverer を構成する方法	14-4
14.5	複合アプリケーション環境で Discoverer を構成する方法	14-5

A Discoverer の構成ファイル

A.1	Discoverer の構成ファイル.....	A-2
A.2	Discoverer ファイルの場所のリスト.....	A-2
A.3	ui_config.xml の構成設定のリスト	A-5
A.4	configuration.xml の構成設定のリスト	A-8
A.5	plus_config.xml の構成設定のリスト	A-10

B Discoverer でトレース情報を生成する方法

B.1	Discoverer でトレース情報を生成する方法.....	B-2
B.2	トレース情報について	B-2
B.3	トレース情報の生成方法.....	B-2

C よくある質問

C.1	よくある質問.....	C-2
-----	-------------	-----

索引

はじめに

このマニュアルは、Discoverer Plus および Discoverer Viewer を Oracle9i Application Server の一部としてインストールした後の、構成およびカスタマイズする方法について説明します。

Oracle9iAS Discoverer のインストール方法は説明していません。インストールの詳細は、『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

このマニュアルを読む前に、HTTP サーバーおよびデータベースについて理解しておくことをお勧めします。

最新情報については、このマニュアルの他に Oracle9iAS Discoverer のリリース・ノートを参照してください。

対象読者

このマニュアルは、Discoverer サービス層（または Discoverer 中間層）のマネージャおよびアプリケーション・サーバーの管理者を対象としています。

表記規則

このマニュアルで使用している用語の意味は、次のとおりです。

- EUL（End User Layer）とは、データベースと Discoverer 間のメタデータ・インタフェースを表します。
- ORACLE_HOME は、Oracle HTTP Server と OC4J サブレット・エンジン・ソフトウェアが Oracle RDBMS とともにインストールされているディレクトリを表します。

次の表に、このマニュアルで使用しているその他の表記規則を示します。

表記	意味
. . . .	垂直の省略記号は、例示する必要のない情報の省略を示します。
太字	太字で表記されたテキストは、Discoverer のグラフィック・ユーザー・インタフェースまたはインターネットのページにあるフィールド・ラベルを表わします。
< >	ユーザーが指定する名前は、山カッコで囲んで示します。
[]	ユーザーが選択可能な（または選択しなくてもよい）オプション句は、大カッコで囲んで表します。
「メニュー名」→「コマンド」	一連の選択を表します。たとえば、メニューを選択し、そのメニューのコマンドを実行します。
固定幅フォント	この書体のテキストはタイプ入力するコマンドラインを示します。

Oracle9iAS Discoverer は、Windows NT、Windows 2000、および UNIX（Solaris、4P、AIX、Linux）でサポートされることに注意してください。このマニュアルでの Windows プラットフォームに関する記述は、特に記載のない限り、Windows NT を使用していることを前提としています。Windows 2000 を使用している場合は、Windows NT の「スタートメニュー」オプションを、Windows 2000 の相当する「スタートメニュー」オプションに置き換えてください。たとえば、Windows NT で「サービス」ダイアログ・ボックスを表示するには、次のようにします。

- Windows NT では、「スタート」メニューから「設定」→「コントロールパネル」の順に選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
- Windows 2000 では、「スタート」メニューから「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」の順に選択します。

関連文書

詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』
- 『Oracle9i Application Server セキュリティ・ガイド』
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

Discoverer Plus および Discoverer Viewer を実行するための前提条件

Discoverer Plus および Discoverer Viewer を実行するには、データベースに Discoverer End User Layer (EUL) バージョン 5.1 をインストールする必要があります。Discoverer マネージャは、Oracle9i Developer Suite リリース 2 (9.0.2) のコンポーネントとして出荷されている Oracle9i Discoverer Administrator を使用して、End User Layer を作成するか、アップグレードする必要があります。

Oracle9iAS Discoverer の概要

1.1 Oracle9iAS Discoverer の概要

この章では、Oracle9iAS Discoverer の概要について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 1.2 項「このマニュアルについて」
- 1.3 項「Oracle9iAS Discoverer について」
- 1.4 項「Oracle9iAS Discoverer および Oracle9i Application Server について」
- 1.5 項「Oracle9iAS Discoverer のアーキテクチャ」
- 1.6 項「Discoverer クライアント層」
- 1.7 項「Discoverer サービス層」
- 1.8 項「Discoverer データベース層」
- 1.9 項「Oracle9iAS Discoverer の動作について」

1.2 このマニュアルについて

ここでは、Discoverer の管理および構成に必要な情報がどの章に記載されているかを説明します。必要な情報例は、次のとおりです。

- Oracle9iAS のインストール後、Discoverer Viewer および Discoverer Plus をただちに実行する場合
- Oracle9iAS のインストール後、複数のマシン構成でセットアップし、パフォーマンスを向上させるために Web Cache を使用する場合
- Discoverer のアーキテクチャについてより詳しい情報を得る場合

次の表に、各構成作業とそれぞれの作業に関する情報が記載されている章を示します。

構成作業	参照する章
ユーザー作業環境の変更（問い合わせの動作、データ形式、デフォルトの EUL など）	7.1 項「Discoverer 環境設定の編集」
ファイアウォールおよび非武装地帯（DMZ）が動作する Discoverer の構成	13.1 項「Discoverer でのデータ・セキュリティ維持」
Oracle Enterprise Manager を使用した Discoverer の構成（パブリック接続の管理、Discoverer Plus の通信プロトコルの指定など）	2.1 項「Oracle Enterprise Manager との Discoverer の使用方法」

構成作業	参照する章
Discoverer Viewer ユーザー・インタフェースのカスタマイズ（フォントやスタイルなど）	10.1 項「Discoverer Viewer のカスタマイズ」
複数のマシン環境での Oracle9iAS Discoverer のデプロイ	5.1 項「Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール」
Oracle Applications との Oracle9iAS Discoverer のデプロイ	14.2 項「Discoverer 接続および Oracle Applications」
Oracle9iAS Portal との Oracle9iAS Discoverer のデプロイ	11.1 項「Oracle9iAS Portal との Discoverer の使用」
パフォーマンスの向上を目的とした Oracle Web Cache との Oracle9iAS Discoverer のデプロイ	9.1 項「Oracle9iAS Web Cache との Discoverer の使用」
Oracle9iAS Discoverer での一般的な問題の診断	B.1 項「Discoverer でトレース情報を生成する方法」
Oracle9iAS Discoverer のパフォーマンスの最適化（スタイルシートのプーリング、問合せの最適化など）	12.1 項「Discoverer のパフォーマンスおよび拡張性の最適化」
インストール完了を確認するための Discoverer Plus または Discoverer Viewer の実行	3.1 項「Oracle9iAS Discoverer の実行」
Discoverer での Oracle9iAS デモの実行	3.2 項「Oracle9iAS デモ・データベースについて」
Web URL から Oracle9iAS Discoverer を自動的に起動、または特定のワークブックを開く	8.1 項「URL パラメータを使用した Discoverer の起動」

次の表は、参照情報が記載されている章を示します。

詳細情報	参照する章
Oracle9iAS Discoverer の構成ファイル（configuration.xml や blaf.css など）	A.1 項「Discoverer の構成ファイル」
Oracle9iAS Discoverer のメンテナンス（コンポーネントの手動停止および開始など）	4.1 項「Oracle9iAS Discoverer のメンテナンス」

詳細情報	参照する章
Oracle9iAS Discoverer のアーキテクチャ (Discoverer の複数層構造など)	1.1 項「Oracle9iAS Discoverer の概要」
Oracle9iAS Discoverer についてよくある質問	C.1 項「よくある質問」
Oracle9iAS の CORBA コンポーネント (セッションおよびプリファレンス・コンポーネントなど)	6.1 項「Discoverer CORBA コンポーネントの管理」

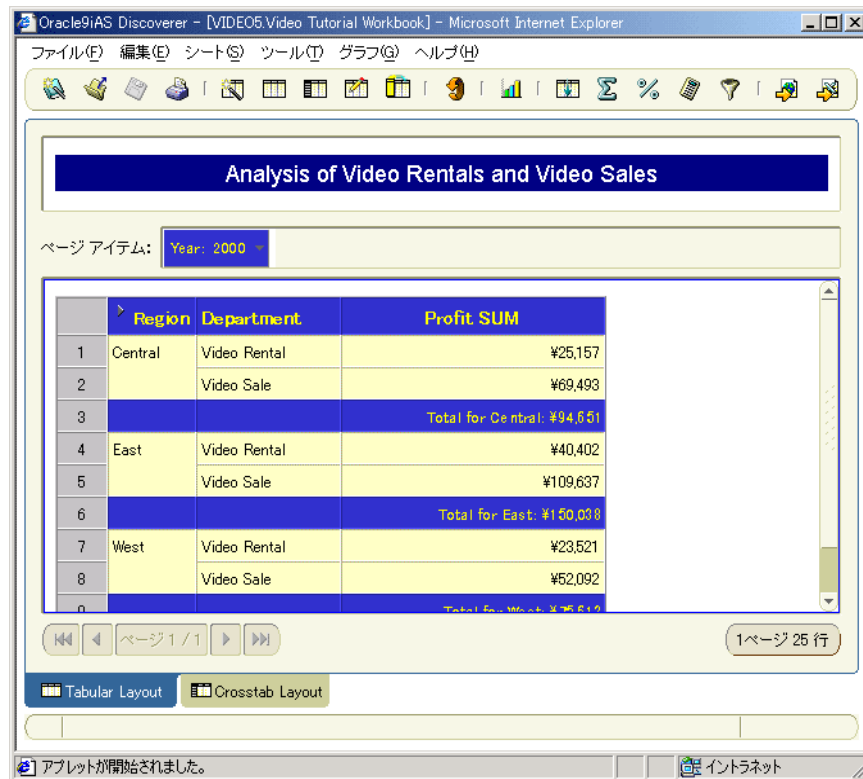
1.3 Oracle9iAS Discoverer について

データ分析のためのビジネス・インテリジェンス・ツールである Oracle9iAS Discoverer は、Oracle9i Application Server (Oracle9iAS) の主要コンポーネントです。Discoverer は、直観的な非定型問合せ、レポート機能、分析、Web 公開ツールなどを統合したビジネス・インテリジェンス・ソリューションを提供します。これらのツールを使用すると、データ・マート、データ・ウェアハウス、オンライン・トランザクション処理システムからの情報にすばやくアクセスでき、高度な技術的知識を必要としません。Oracle9iAS Discoverer は Oracle9iAS Portal とシームレスに統合し、ワークブックやワークシートの Web ポータルへのデプロイをすばやく行うことができます。

Oracle9iAS Discoverer ビジネス分析ツールには、2 つの製品があります。

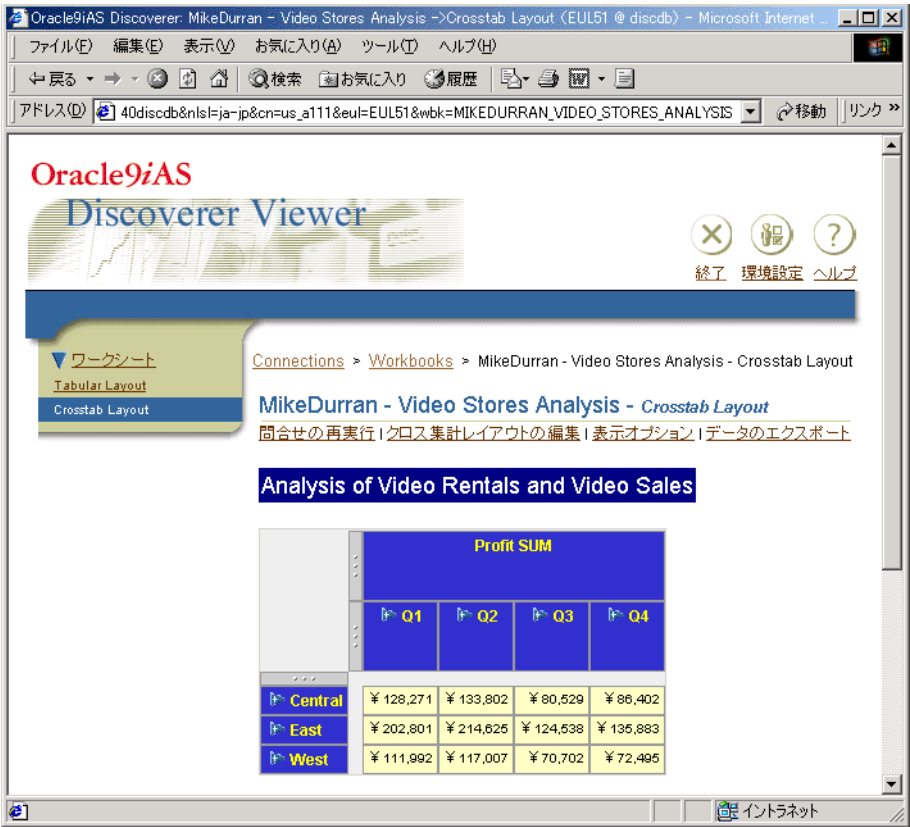
- Discoverer Plus は、データベースの複雑な概念を理解しなくても、データの分析やレポートの作成を行うことができる Web ツールです。ウィザード形式のダイアログ・ボックスやメニューの手順に従うだけで、高度なレポートやグラフを作成することができます。レポートやグラフには、Discoverer Plus または Discoverer Viewer を使用してアクセスします。

図 1-1 Oracle9iAS Discoverer Plus



- Discoverer Viewer は、Discoverer Plus を使用して作成したインタラクティブなレポートやグラフにアクセスするための Web ツールです。Discoverer Viewer は HTML に実装されるので、インターネット・ブラウザがあれば Discoverer Viewer を実行できます。また、Discoverer Viewer を使用してポータルにレポートを公開することもでき、Web サイト特有の外観や用途に合わせたカスタマイズを容易に行うことができます。Discoverer Viewer は、パフォーマンスの最適化が行われており、ネットワークの通信量を最小限に抑えるように設計されています。

図 1-2 Oracle9iAS Discoverer Viewer



Discoverer での典型的なワークフローは次のとおりです。

- Discoverer Plus ユーザー（パワー・ユーザー）がインタラクティブなレポートおよびグラフを作成します。通常、レポートには、エンド・ユーザーによるデータ分析のための強力なビジネス・インテリジェンス・コンポーネント（パラメータ、ドリル、条件、総計など）が含まれます。
- Discoverer Viewer ユーザーが、作成されたインタラクティブなレポートに読取り専用モードでアクセスします。ただし、ユーザーがレポートをカスタマイズする際に、いくつかの制限があります（ユーザーが要求した日付にドリルを行ったり、パラメータや条件を適用するなど）。

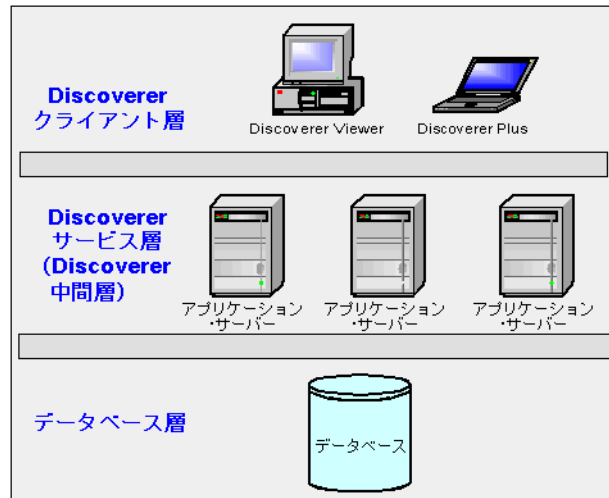
1.4 Oracle9iAS Discoverer および Oracle9i Application Server について

Oracle9iAS Discoverer は、Oracle9i Application Server の一部としてインストールされます。デフォルトでは、1 台のマシンに Discoverer のコンポーネントがすべてインストールされます。ただし、コンポーネントを複数のマシンに分けてインストールして、パフォーマンスと信頼性を向上することもできます。詳細は、[第 5.1 章「Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール」](#)を参照してください。

1.5 Oracle9iAS Discoverer のアーキテクチャ

Oracle9iAS Discoverer は、複数層アーキテクチャを採用しています。このアーキテクチャは、Web 環境の分散化特性を活用しています。1 台のマシンに Oracle9iAS Discoverer アーキテクチャのすべての層をインストールすることも可能ですが、パフォーマンスと信頼性を最大限に活用するため、各層を複数のマシンに分散してインストールすることをお勧めします。

図 1-3 Discoverer の複数層アーキテクチャ



注意: 複数のアプリケーション・サーバーを 1 台のマシンにインストールできます。

Discoverer の複数層アーキテクチャは次の層で構成されます。

- Web ブラウザからアクセスする Discoverer クライアント層（詳細は、[1.6 項「Discoverer クライアント層」](#)を参照してください）。

- Discoverer サービス層 (Discoverer 中間層とも呼ばれます)。詳細は、[1.7 項「Discoverer サービス層」](#)を参照してください。
- データおよびメタデータを含む Discoverer データベース層 (詳細は、[1.8 項「Discoverer データベース層」](#)を参照してください)。

注意：

- 複数のマシンに Discoverer を構成する方法の詳細は、[5.1 項「Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール」](#)を参照してください。

1.6 Discoverer クライアント層

Discoverer のクライアント層は、Discoverer Plus または Discoverer Viewer にアクセスするインターネット・ブラウザです。Discoverer Plus および Discoverer Viewer を実行するには、エンド・ユーザーに適切な URL を提供する必要があります (詳細は、[3.1 項「Oracle9iAS Discoverer の実行」](#)を参照してください)。

1.6.1 Discoverer クライアント層と Discoverer Plus

Discoverer Plus の場合、クライアント・マシンで Oracle JInitiator 付属の Java 対応 Web ブラウザ (Microsoft Internet Explorer バージョン 5 以降、または Netscape Navigator バージョン 4.7 以降) を実行することが必要です。

マシンを初めて Discoverer に接続すると、Discoverer Plus アプレットが Discoverer サービス層からダウンロードされ、クライアントのマシンにキャッシュされます。Discoverer Plus アプレットには、ビジネス・インテリジェンス・データを分析する Discoverer Plus ユーザー・インタフェースおよび機能が含まれています。それ以降にユーザーがログインした場合は、Discoverer Plus アプレットはローカル・キャッシュから実行されるため、ダウンロードは行われません。

注意： Discoverer をアップグレードすると、ユーザーによる Discoverer Plus アプレットの Discoverer クライアント・マシンへのダウンロードが再度必要となる場合があります (詳細は、[3.1 項「Oracle9iAS Discoverer の実行」](#)を参照してください)。

1.6.2 Discoverer クライアント層と Discoverer Viewer

Discoverer Viewer の場合、クライアント・マシンで HTML を実行できる Web ブラウザ (Microsoft Internet Explorer バージョン 5 以降、または Netscape Navigator バージョン 4.7 以降) を作動させる必要があります。ドラッグ・アンド・ドロップなどの、JavaScript 拡張ユーザー・インタフェースを使用するには、ブラウザで JavaScript と Cookie の両方を有効にする必要があります。

1.7 Discoverer サービス層

Discoverer サービス層は、Discoverer 中間層マネージャによりインストールおよびメンテナンスされる Discoverer アーキテクチャの一部です。

図 1-4 Discoverer サービス層



Discoverer サービス層は、次のコンポーネントで構成されます。

- Discoverer J2EE コンポーネント（詳細は、[1.7.1 項「Discoverer J2EE コンポーネント」](#)を参照してください）。
- Discoverer CORBA コンポーネント（詳細は、[1.7.2 項「Discoverer CORBA コンポーネント」](#)を参照してください）。

注意：

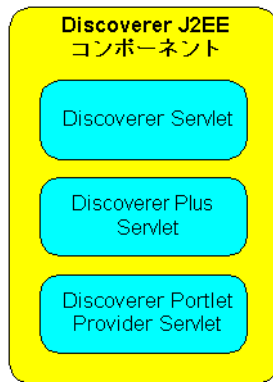
- Discoverer サービス層は、クライアント・マシンにダウンロードされる Discoverer Plus アプレットも格納します。
- Discoverer Middle-tier コンポーネントを実行しているすべてのマシンは、同じサブネットにある必要があります。

1.7.1 Discoverer J2EE コンポーネント

Discoverer J2EE は、次のコンポーネントで構成されます。

- Discoverer Servlet（詳細は、[1.7.1.1 項「Discoverer Servlet とは」](#)を参照してください）。
- Discoverer Plus Servlet（詳細は、[1.7.1.2 項「Discoverer Plus Servlet とは」](#)を参照してください）。
- Discoverer Portlet Provider Servlet（詳細は、[1.7.1.3 項「Discoverer Portlet Provider Servlet とは」](#)を参照してください）。

図 1-5 Discoverer J2EE コンポーネント



サーブレットは、サーバー・マシンで動作する Java コードのモジュールで構成されており、クライアント・マシンからのリクエストに応答します。サーブレットを使用することにより、クライアント側の処理を最小限に抑えられます。

Discoverer Servlet は、サーブレットを実行するためのサーブレット・エンジンを含む OC4J (Oracle9iAS Container for J2EE) 環境にデプロイされます。

1.7.1.1 Discoverer Servlet とは

Discoverer Servlet は、XML/XSL プロセッサを使用して HTTP リクエストから HTML ページを生成します。

1.7.1.2 Discoverer Plus Servlet とは

Discoverer Plus Servlet は、Discoverer Plus および Discoverer Viewer の接続ページを提供します。

Discoverer Plus Servlet により、Discoverer Plus アプレットから Discoverer Servlet にリクエストが転送されます。Discoverer Plus Servlet により、Discoverer Plus アプレットがリクエストの発行元であることを示す URL パラメータがリクエストに追加されます。

1.7.1.3 Discoverer Portlet Provider Servlet とは

Discoverer Portlet Provider Servlet は、Discoverer ワークシートを公開するユーザー・インタフェース、および Oracle9iAS Portal ページの Discoverer ワークブックへのリンクを提供します。Discoverer Portlet Provider の詳細は、[11.1 項「Oracle9iAS Portal との Discoverer の使用」](#)を参照してください。

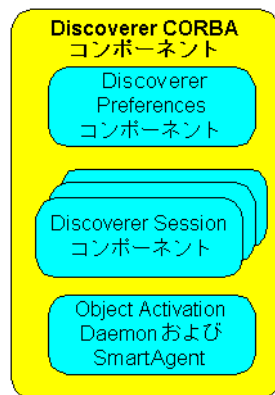
1.7.2 Discoverer CORBA コンポーネント

CORBA (Common Object Request Broker Architecture) コンポーネントは、エンド・ユーザーが Discoverer セッションを開始したとき (ユーザーが Discoverer Plus または Discoverer Viewer に接続したとき) に、Discoverer をアクティブ化します。

Discoverer CORBA は、次のコンポーネントで構成されます。

- Discoverer Session コンポーネント (詳細は、[1.7.2.1 項「Discoverer Session コンポーネントとは」](#)を参照してください)。
- Discoverer Preference コンポーネント (詳細は、[1.7.2.2 項「Discoverer Preference コンポーネントとは」](#)を参照してください)。
- OAD (Object Activation Daemon) および SmartAgent。これらは、Inprise 社により提供されるサード・パーティの Visibroker CORBA コンポーネントで、Discoverer とともにインストールされます (詳細は、[1.7.2.3 項「OAD \(Object Activation Daemon\) とは」](#)を参照してください)。

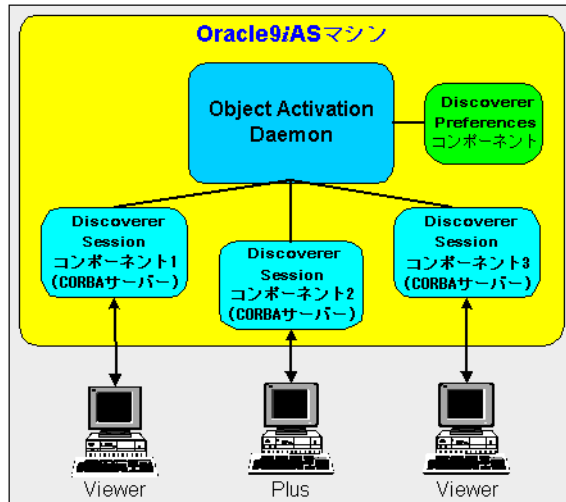
図 1-6 Discoverer CORBA コンポーネント



1.7.2.1 Discoverer Session コンポーネントとは

Discoverer Session コンポーネント (CORBA サーバーとも呼ばれます) は、データベースへの接続やワークブックを開くなど、Discoverer の操作を実行します。Discoverer Session コンポーネントにより、Discoverer Servlet またはアプレットとデータベース間のリンクが提供されます。アクティブなユーザー・ログイン・セッション 1 件につき、1 つの Discoverer Session コンポーネントがあります。

図 1-7 1 台の Oracle9iAS マシンにインストールされる OAD、Preference コンポーネント、および Session コンポーネント



1.7.2.2 Discoverer Preference コンポーネントとは

Discoverer Preference コンポーネントにより、すべての Oracle9iAS Discoverer ユーザー（Discoverer Plus および Discoverer Viewer 両方のユーザー）の環境設定が 1 箇所に保存されます。Discoverer サービス層は、保存された環境設定に従って、デフォルトの Discoverer 動作を指定します。

注意：異なるマシンでそれぞれ別の Discoverer Session コンポーネントを実行する複数のマシン環境では、Discoverer は 1 台のマシンにつき 1 つの Preference コンポーネントを使用します。

1.7.2.3 OAD（Object Activation Daemon）とは

OAD（Object Activation Daemon）とは、Discoverer Session コンポーネントを実行および管理するバックグラウンド処理です。

OAD は、各 Oracle9iAS マシンにインストールされます。OAD コンポーネントがインストールされたマシンでは、一度に複数の Discoverer Session コンポーネントを実行できます。それぞれのコンポーネントにより、1 件のユーザー・ログイン・セッションがサポートされます。

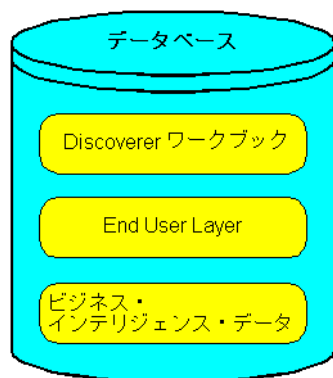
複数のマシン環境（複数のアプリケーション・サーバー・マシンに Oracle9iAS をインストールした環境）では、1 つの OAD が各マシンで実行されます。各マシンでは、複数の同時ユーザー・ログイン・セッションおよび複数の Discoverer Session コンポーネントがサ

ポートされます。このように構成すると、通常、Discoverer のパフォーマンスと信頼性が向上します。

1.8 Discoverer データベース層

Discoverer アーキテクチャのデータベース層には、データおよびメタデータが含まれます。

図 1-8 Discoverer データベース層



Discoverer データベース層は、次のコンポーネントで構成されます。

- レポートおよびグラフの保存に使用する Discoverer ワークブック
- データをわかりやすく表示する EUL (End User Layer)
- ユーザーが分析するビジネス・インテリジェンス・データ

EUL を作成および管理するには、Discoverer Administrator を使用します。詳細は、Oracle9iDS に含まれている『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

注意：

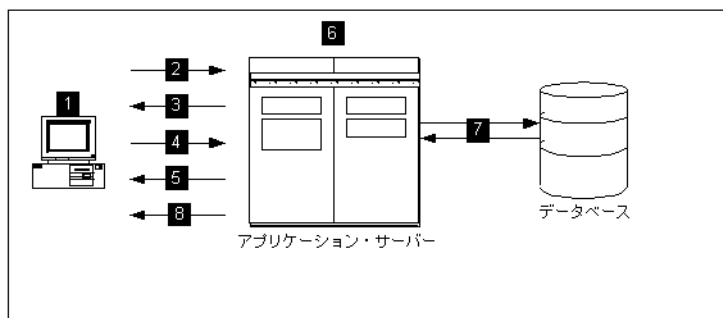
- ユーザーが Discoverer を使用してデータを分析する前に、データベースには Discoverer EUL バージョン 5 が含まれている必要があります。Oracle9i Developer Suite の一部として出荷されている Oracle9i Discoverer Administrator リリース 9.0.2 以上を使用して、EUL を作成またはアップデートする必要があります。

1.9 Oracle9iAS Discoverer の動作について

ここでは、Discoverer Plus および Discoverer Viewer の動作について説明します。

1.9.1 Discoverer Plus の動作

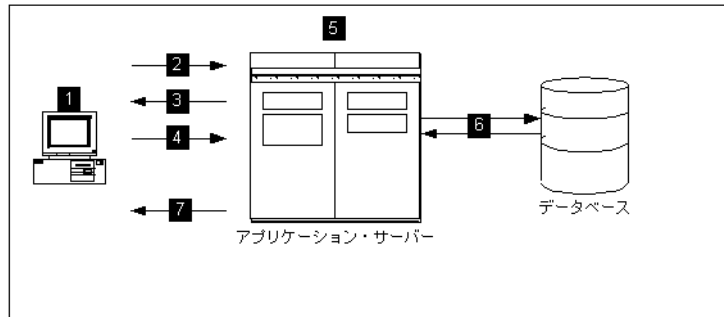
図 1-9 Discoverer Plus のプロセス



1. クライアント・コンピュータ上の Web ブラウザを起動し、Discoverer Plus Servlet の URL を入力します。
2. Web ブラウザからアプリケーション・サーバー上の Discoverer Plus Servlet にアクセスし、アプリケーション・サーバーがこのリクエストを Discoverer Servlet に転送します。
3. Discoverer Servlet が接続 HTML ページを取得して Discoverer Plus Servlet に返し、Discoverer Plus Servlet がこのページをクライアントに返します。
4. ユーザーが接続を選択します。この要求はアプリケーション・サーバーに返され、Discoverer Plus Servlet によって Discoverer Servlet に転送されます。
5. Discoverer アプレットがクライアント・コンピュータに転送されます（まだ転送されていない場合）。
6. この間に、Discoverer Servlet が OAD を使用してアプリケーション・サーバー・マシンの Session コンポーネントにアクセスし、Discoverer セッションを開始します。
7. Discoverer セッションがリクエストを送信し、データベースからデータを取得します。
8. Discoverer セッションがデータを Discoverer Servlet に転送します。Discoverer Servlet により、Discoverer Plus Servlet にデータが転送され、そこからクライアント・マシンに転送されます。

1.9.2 Discoverer Viewer の動作

図 1-10 Discoverer Viewer のプロセス



1. クライアント・コンピュータ上の Web ブラウザを起動し、Discoverer Servlet の URL を入力します。
2. Web ブラウザがアプリケーション・サーバー上の Discoverer Servlet にアクセスします。
3. Discoverer Servlet が接続 HTML ページを取得して、クライアントに返します。
4. ユーザーが接続を選択すると、このリクエストがアプリケーション・サーバー上の Discoverer Servlet に返されます。
5. Discoverer Servlet が OAD を使用してアプリケーション・サーバー・マシンの Session コンポーネントにアクセスし、Discoverer セッションが開始されます。
6. Discoverer セッションがリクエストを送信し、データベースからデータを取得します。
7. Discoverer セッションがデータを Discoverer Servlet に転送します。Discoverer Servlet は HTML ページを生成し、そのページをクライアント・マシンに転送します。

Oracle Enterprise Manager との Discoverer の使用方法

2.1 Oracle Enterprise Manager との Discoverer の使用方法

この章では、Oracle Enterprise Manager とともに Oracle9iAS Discoverer をデプロイする方法について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 2.2 項「Oracle Enterprise Manager について」
- 2.3 項「Oracle Enterprise Manager の特長」
- 2.4 項「Oracle Enterprise Manager の起動方法」
- 2.5 項「パブリック接続の作成方法」

2.2 Oracle Enterprise Manager について

Oracle Enterprise Manager (OEM) は、Oracle9iAS Discoverer の中間層を構成するための 1 つのエントリ・ポイントを提供します。これにより、Oracle9iAS Discoverer 管理者が Discoverer サーバーを管理する際に、サーバーのオペレーティング・システムにアクセスして作業を実行する必要がなくなります。

Oracle Enterprise Manager との Oracle9iAS Discoverer の使用の詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプおよび『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

注意：OEM の起動方法の詳細は、[13.5.2.3 項「OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示する方法](#)」を参照してください。

2.3 Oracle Enterprise Manager の特長

Oracle Enterprise Manager を使用して、次の構成作業を行います。

- パブリック接続用のロケールを選択する。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください。
- Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider でグラフを使用可または使用不可にする。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください。
- Discoverer Plus および Discoverer Viewer のパブリック接続を管理する。詳細は、[2.5 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください。
- データベース・パスワードを変更する。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください。
- Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider 用にプールする、キャッシュ内のスタイルシートの最大数を指定する。詳細は、[12.5.4 項「XSL スタイルシートのプーリングを使用して、Discoverer Viewer の拡張性を向上する方法」](#)を参照してください。
- Discoverer Viewer での問合せの進行状況ページの遅延値を指定する。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください。

- Discoverer Plus 中間層用の通信プロトコルを指定する。詳細は、[13.5.2.3 項「OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示する方法](#)」を参照してください。
- プールする Discoverer Portlet Provider セッションの最大数を指定する。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください。

注意：

- Oracle Enterprise Manager を使用して Discoverer を構成した場合、変更内容を適用するには次の手順で Discoverer を再起動する必要があります。
 - UNIX の場合、Oracle Enterprise Manager を使用して Discoverer を再起動します（詳細は、[4.4 項「UNIX でスタンドアロンの Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを停止する方法](#)」を参照してください）。
 - Windows の場合、startall.bat コマンドを使用します（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト](#)」を参照してください）。

2.4 Oracle Enterprise Manager の起動方法

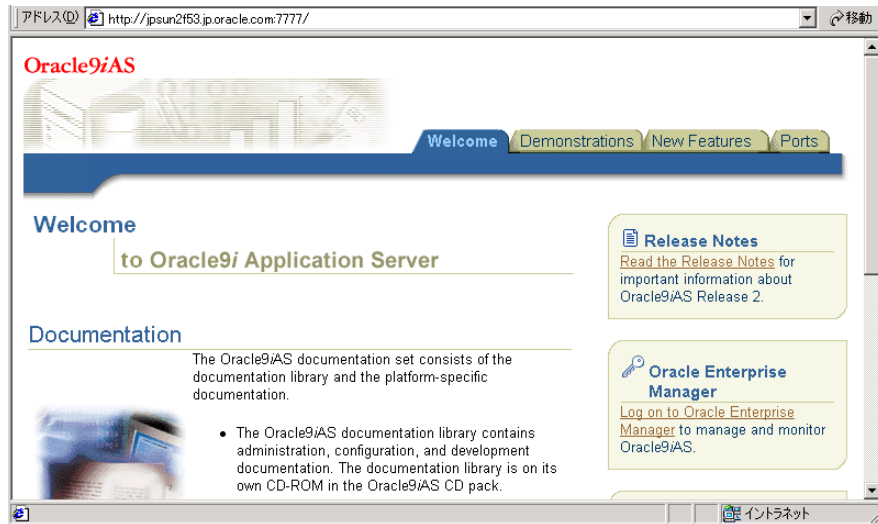
Oracle9iAS Discoverer を構成するには、Oracle Enterprise Manager Web Site を使用します。たとえば、Discoverer Plus データを暗号化する場合は、Discoverer Plus で HTTPS 通信プロトコルを使用するように構成します。

OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示するには、次の操作を行います。

1. Web ブラウザを起動して Oracle9iAS Application Server のメイン・ページを表示します。

ローカルで Oracle HTTP Server に接続している場合は、URL が次のようになります。

`http://hostname:7777`



2. 「Log on to Oracle Enterprise Manager」リンクを選択します。

ヒント: 1810 ポートを使用して、Oracle Enterprise Manager ページを直接表示することもできます。この場合、URL は次のようになります。

`http://hostname:1810`

注意: OEM の起動の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

3. プロンプトが表示されたら、ユーザー名とパスワードを入力します。

注意: OEM ユーザー名とパスワードが必要な場合は、Oracle9iAS システム管理者にお問い合わせください。

4. 「OK」をクリックして Oracle Enterprise Manager Web Site のメイン・ページを表示します。



これで、Oracle9iAS を監視して、Oracle9iAS Discoverer および Oracle9iAS Web Cache など、ネットワーク上でマシンを管理できます。

注意：

- Oracle Enterprise Manager の使用の詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプおよび『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

2.5 パブリック接続の作成方法

Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーへの定義済みのログインを提供するには、パブリック接続を作成します。たとえば、「Start tutorial」というパブリック接続を作成し、チュートリアル・ユーザーとしてチュートリアル・データベースに接続します。または、Oracle9iAS デモ・データベースに接続するパブリック接続を作成します。

パブリック接続を作成するには Oracle Enterprise Manager を使用します。Oracle Enterprise Manager の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

パブリック接続を作成するには、次の手順を行います。

1. Oracle Enterprise Manager を起動します。

Oracle Enterprise Manager の起動の詳細は、[2.4 項「Oracle Enterprise Manager の起動方法」](#)を参照してください。

2. 「名前」列で、マシン上のコンポーネントのリストを表示するために更新するインスタンス（iasdb.host1.uk.companyname.com など）を選択します。

マシン上の Oracle9iAS コンポーネントのリスト（HTTP Server、OC4J_BI_Forms、Web Cache、OC4J_Portal など）が表示されます。

3. 「名前」列で、「<Instance_Name>_Discoverer」リンクを選択して「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」ページを表示します。

Oracle9iAS Discoverer サービス構成の表には、構成できる Discoverer 各部分の行が含まれています。

4. 「Discoverer 一般」行内の「更新」アイコンをクリックし、「Discoverer 一般構成」ページを表示します。
5. 「接続の作成」をクリックし、「Discoverer パブリック接続の作成」ページを表示します。
6. 接続の詳細を入力し、「適用」をクリックして保存します。

「Discoverer 一般構成」ページの Discoverer パブリック接続リストに、新しく作成した接続が表示されます。

Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer Plus または Discoverer Viewer に接続するとき、作成した接続を選択できます。

注意：

- パブリック接続の管理の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

Oracle9iAS Discoverer の実行

3.1 Oracle9iAS Discoverer の実行

この章では、Oracle9iAS のインストールを完了した後、Oracle9iAS Discoverer を実行する方法について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 3.2 項「Oracle9iAS デモ・データベースについて」
- 3.3 項「クライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合」
- 3.4 項「クライアント・マシンで Microsoft Internet Explorer を使用して Discoverer Plus を初めて実行する方法」
- 3.5 項「クライアント・マシンで Netscape Navigator を使用して Discoverer Plus を初めて実行する方法」
- 3.6 項「Discoverer Viewer の実行方法」

Oracle9i Application Server のインストールの詳細は、オペレーティング・システム固有の『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

注意： Oracle9iAS デモ・データベースを使用している場合を除き、ユーザーが Discoverer を使用してデータを分析する前に、データベースに EUL バージョン 5 が含まれている必要があります。Oracle9i Discoverer Administrator バージョン 9.0.2 以上（Oracle9i Developer Suite に付属）を使用して、EUL を作成または更新する必要があります。

3.2 Oracle9iAS デモ・データベースについて

Oracle9iAS をインストールする際、インテリジェンス・データのサンプル・セットを使用してレポートを実行するために必要なすべてのデータを含む、デモ・データベースがインストールされます。

Oracle9i Discoverer Administrator を使用して EUL を作成しなくても、デモ・データベースおよびワークブックを使用して Oracle9iAS Discoverer が正しくインストールされたかを確認できます。これは、デモ・データベースの EUL はすでに作成されているからです。

Discoverer Viewer および Discoverer Plus を初めて使用するユーザーは、デモ・データベースおよびワークブックを利用して、Discoverer ワークブックおよびレポートについて学習できます。

注意：

- Oracle9iAS デモ・データベースにアクセスするには、次のように設定して Discoverer パブリック接続を作成します。
 - ユーザー名 : scott
 - パスワード : tiger
 - データベース : discodemo
 - EUL: SCOTT

- 作成した接続を使用して Discoverer を実行するとき、ワークブックを開きます。Discoverer パブリック接続の作成方法の詳細は、[2.5 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください。
- Oracle9iAS をインストールするとき、tnsnames.ora ファイルにデモ・データベースの TNS エントリが自動的に追加されます（構成ファイルの詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。

3.3 クライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合

クライアント・マシンで Discoverer Plus を初めて実行する場合、一回限りのセットアップ処理を実行し、Oracle JInitiator のインストール（必要な場合）と Discoverer Plus ソフトウェアの初期化を行います。この処理は、一般に次のような場合に実行されます。

- Oracle9iAS のインストール後、Discoverer の動作を確認する場合
- Discoverer エンド・ユーザーがクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合

Discoverer Plus ソフトウェアがいったん初期化されると、Discoverer Plus の実行時にセットアップは必要ありません。

Discoverer をアップグレードする際は、場合によって、セットアップ処理を繰り返す必要があります。たとえば、Oracle JInitiator の新しいバージョンが必要な Discoverer Plus の新しいバージョンをインストールする場合や、アプレットの新しいバージョンをインストールする場合に、セットアップ処理を再実行する必要があります。

注意：

- Microsoft Internet Explorer と Netscape Navigator では、Discoverer Plus の初期化処理が異なります。次のうち、適切な手順を行います。
 - Microsoft Internet Explorer の場合は、[3.4 項「クライアント・マシンで Microsoft Internet Explorer を使用して Discoverer Plus を初めて実行する方法」](#)を参照してください。
 - Netscape Navigator の場合は、[3.5 項「クライアント・マシンで Netscape Navigator を使用して Discoverer Plus を初めて実行する方法」](#)を参照してください。
- Microsoft Internet Explorer で Discoverer Plus を実行するには、セキュリティ・レベルを「中」以下に設定するか、Microsoft Internet Explorer の「セキュリティ」ダイアログ・ボックスを使用してそれに相当するカスタム設定を適用します。
- Discoverer の実行時に「セキュリティの警告」ダイアログ・ボックスが表示された場合は、「はい」をクリックして Oracle JInitiator をインストールし、実行してください。オラクル社からのコンテンツを常に信頼するようにマシンが構成されている場合は、このダイアログ・ボックスは表示されません。

図 3-1 「セキュリティの警告」 ダイアログ・ボックス



- Discoverer Viewer を実行するには、クライアント・マシンにその他のソフトウェアをインストールする必要はありません。
- 56K のダイヤルアップ接続を介して Discoverer にアクセスしているときなど、Discoverer の初期化に時間がかかりセッションが時間切れになることがあります。このような場合は、中間層の pref.txt にある Timeout 値を長く変更し、ファイルを保存してからその環境設定を適用します。詳細は、7.7 項「Discoverer ユーザー環境設定のリスト」および 6.7 項「Preference コンポーネントを開始および停止する方法」を参照してください。

3.4 クライアント・マシンで Microsoft Internet Explorer を使用して Discoverer Plus を初めて実行する方法

クライアント・マシンで Microsoft Internet Explorer を使用して Discoverer Plus を最初に実行するには、次の操作を行います。

1. Web ブラウザを起動して、インストレーションで使った完全修飾ホスト名（必要な場合はポート番号を含む）を含む Discoverer Plus URL を入力します。

例

`http://machinename.myorganization.com:7777/discoverer/plus`

この URL の変数は、次のとおりです。

- machinename.myorganization は、Oracle HTTP Server がインストールされているホスト名およびドメインです。
- デフォルト・ポート番号（ポート 80 など）が変更されている場合、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号は 7777（オプション）となります。

- /discoverer/plus は、Discoverer Plus を起動する URL コマンドです。
「Discoverer Plus に接続」 ページが表示されます。

図 3-2 「Discoverer Plus に接続」 ページ



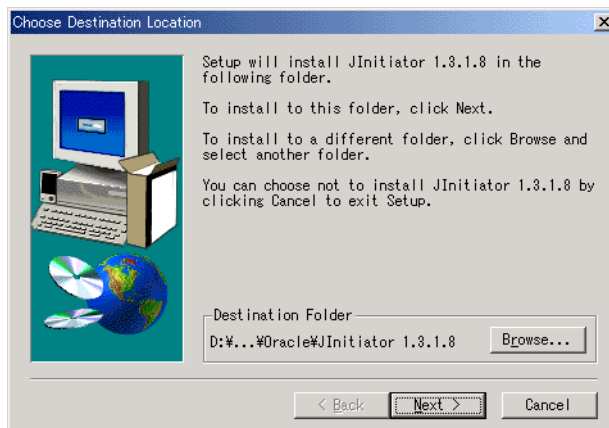
2. 「接続」列で接続を選択します。

ヒント: 「接続」列に接続が表示されない場合は、操作を続ける前に新しい接続を作成する必要があります。プライベート接続の作成の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。Discoverer Administrator によって作成されたパブリック接続を使用することもできます（詳細は、2.5 項「パブリック接続の作成方法」および『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください）。

クライアント・マシンにすでにインストールされているソフトウェアによっては、Oracle JInitiator のダウンロードとインストールが必要となる場合があります。Oracle JInitiator のダウンロードおよびインストールがプロンプトされない場合には、手順 5 に進んでください。

Oracle JInitiator のダウンロードとインストールを必要とする場合は、Oracle JInitiator の「インストール先の選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

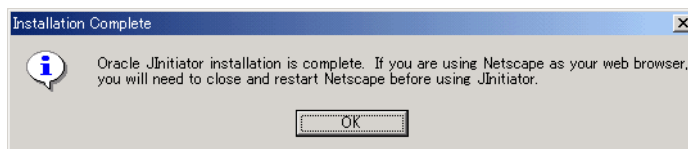
図 3-3 「インストール先の選択」ダイアログ・ボックス



3. 「Next」をクリックして、デフォルトの「インストール先フォルダ」を受け入れます（または、デフォルトの「インストール先フォルダ」を変更して「Next」をクリックします）。

インストール・プログラムにより、指定した場所に **Oracle JInitiator** がインストールされます。**Oracle JInitiator** のインストールが完了したら、「インストールの完了」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3-4 「インストールの完了」ダイアログ・ボックス



4. 「OK」をクリックして、「インストールの完了」ダイアログ・ボックスを閉じます。

これで、**Oracle JInitiator** がクライアント・マシンにインストールされました。

5. Discoverer Plus アプレットによって初期化されるのを待ちます。

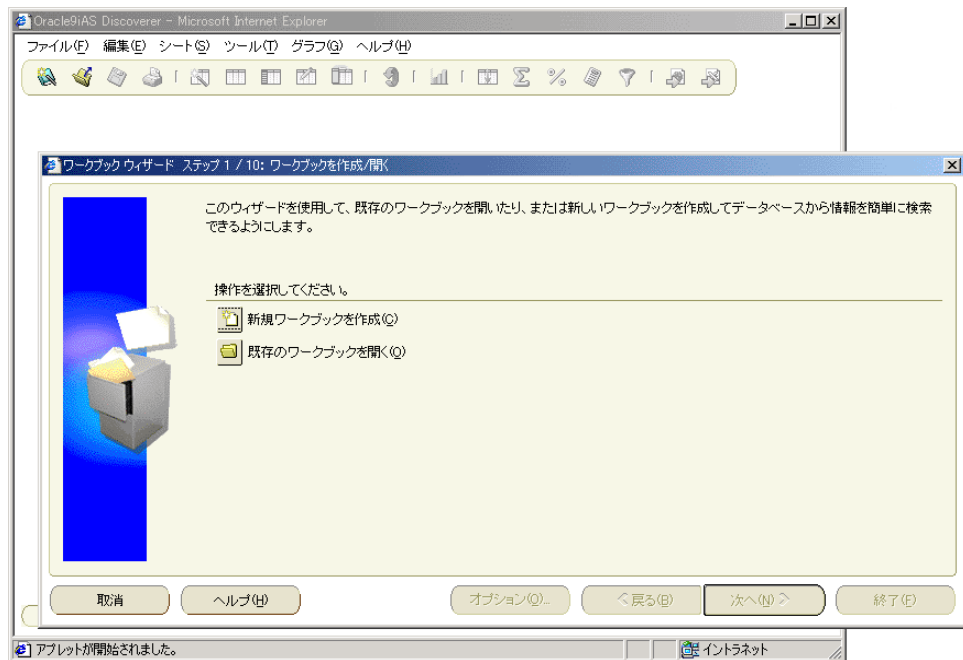
Discoverer Plus アプレットが初期化を実行している間に、「製品の起動中：Discoverer Plus」ページが表示されます。

図 3-5 「製品の起動中 : Discoverer Plus」 ページ



Discoverer Plus アプレットの初期化が終わるとキャッシュが行われ、「ワークブック・ウィザード」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3-6 Discoverer Plus の「ワークブック ウィザード : ワークブックを作成 / 開く」ダイアログ・ボックス



これで、Discoverer Plus が実行されます。

3.5 クライアント・マシンで Netscape Navigator を使用して Discoverer Plus を初めて実行する方法

クライアント・マシンで Netscape Navigator を使用して Discoverer Plus を初めて実行するには、次の操作を行います。

1. Web ブラウザを起動して、インストレーションで使った完全修飾ホスト名（必要な場合はポート番号を含む）を含む Discoverer Plus URL を入力します。

例

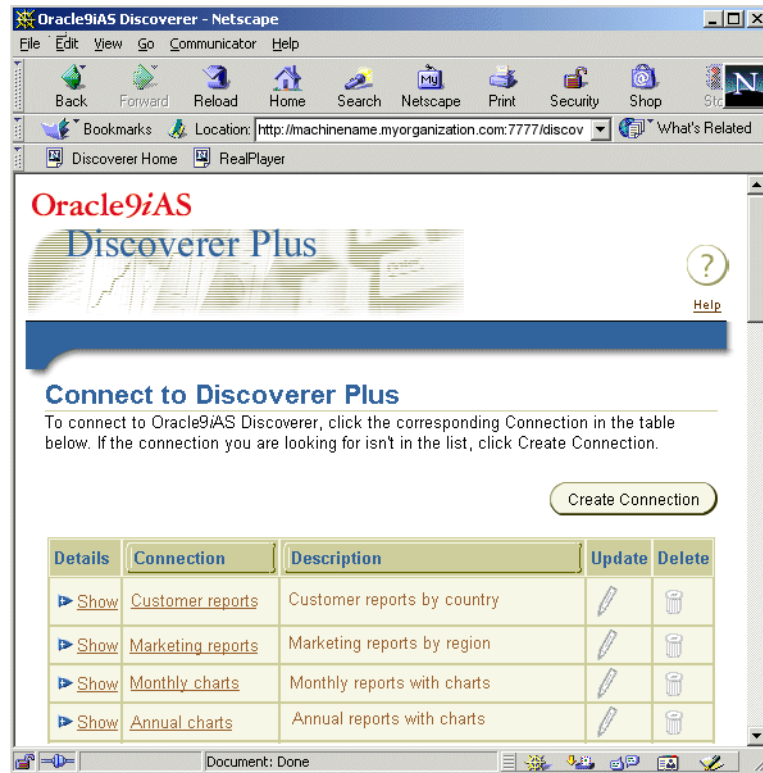
`http://machinename.myorganization.com:7777/discoverer/plus`

この URL の変数は、次のとおりです。

- `machinename.myorganization` は、Oracle HTTP Server がインストールされているホスト名およびドメインです。

- デフォルト・ポート番号（ポート 80 など）が変更されている場合、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号は 7777（オプション）となります。
- /discoverer/plus は、Discoverer Plus を起動する URL コマンドです。
「Discoverer Plus に接続」ページが表示されます。

図 3-7 「Discoverer Plus に接続」ページ



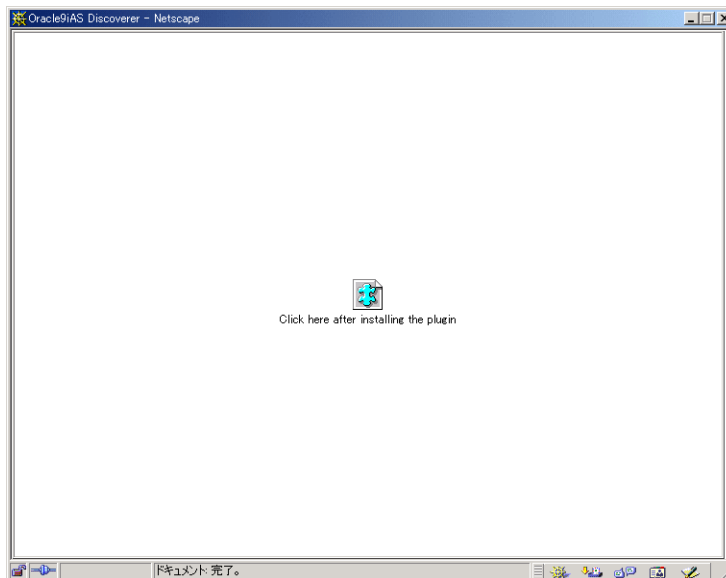
2. 「接続」列で接続を選択します。

ヒント：「接続」列に接続が表示されない場合は、操作を続ける前に新しい接続を作成する必要があります。プライベート接続の作成の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。Discoverer Administrator によって作成されたパブリック接続を使用することもできます（詳細は、2.5 項「パブリック接続の作成方法」および『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください）。

クライアント・マシンにすでにインストールされているソフトウェアによっては、Oracle JInitiator のダウンロードとインストールが必要となる場合があります。Oracle JInitiator のダウンロードおよびインストールがプロンプトされない場合には、手順 10 に進んでください。

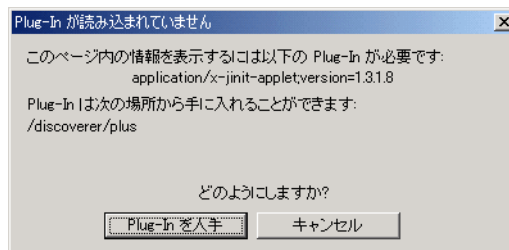
Netscape Navigator を使用していて、Oracle JInitiator のダウンロードとインストールが必要な場合には、「Oracle9iAS Discoverer - Netscape」ページが表示されます。

図 3-8 「Oracle9iAS Discoverer - Netscape」 ページ



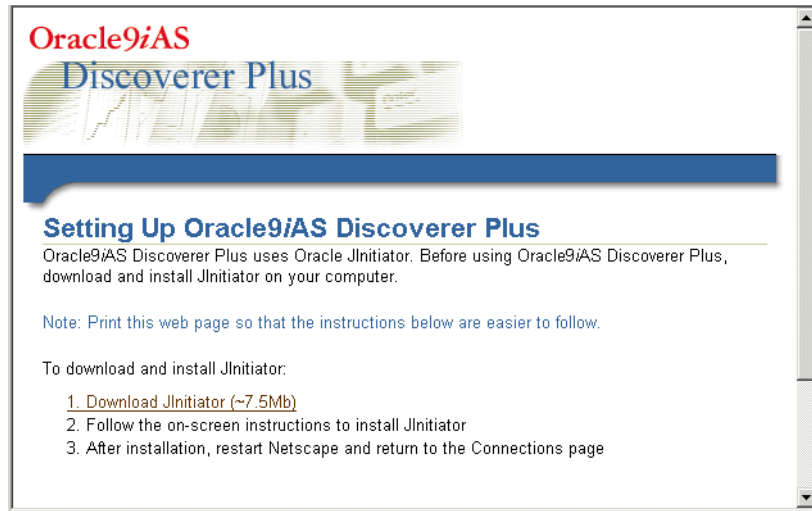
3. 「Oracle9iAS Discoverer - Netscape」ページの任意の場所をクリックして、「プラグインがロードされていません」ダイアログ・ボックスを表示します。

図 3-9 「プラグインがロードされていません」ダイアログ・ボックス



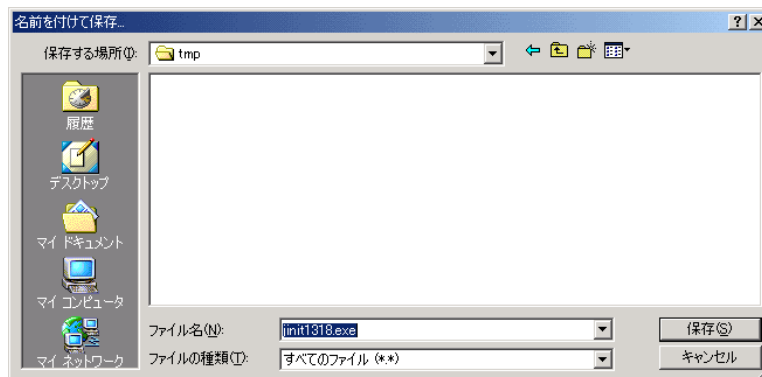
4. 「プラグインの取得」をクリックして、「Oracle9iAS Discoverer Plus の設定」ページを表示します。

図 3-10 「Oracle9iAS Discoverer Plus の設定」ページ



5. 「JInitiator のダウンロード (<サイズ> Mb)」リンクを選択して、「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスを表示します。

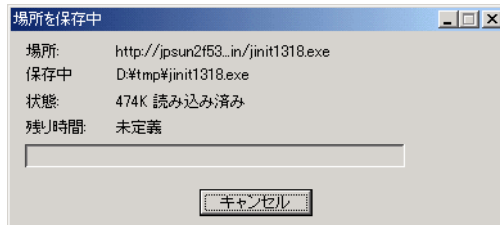
図 3-11 Oracle JInitiator の「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックス



6. 「保存」をクリックして Oracle JInitiator のインストール・ファイルをデフォルトの保存場所に保存します（または、デフォルトの保存場所を変更してから、「保存」をクリックします）。

Oracle JInitiator のインストール・ファイルが保存されている間に、「保存場所」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3-12 「保存場所」ダイアログ・ボックス



7. Oracle JInitiator のインストール・ファイルが保存されたら、ファイルを開いて次の操作を行います。
 - a. ファイル・ブラウザを開き、前の手順で保存した Oracle JInitiator のインストール・ファイルを探します。
 - b. Oracle JInitiator のインストール・ファイルをダブルクリックして、「インストール先の選択」ダイアログ・ボックスを表示します。
 - c. 「Next」をクリックして、デフォルトの「インストール先フォルダ」を受け入れます（または、デフォルトの「インストール先フォルダ」を変更して「Next」をクリックします）。

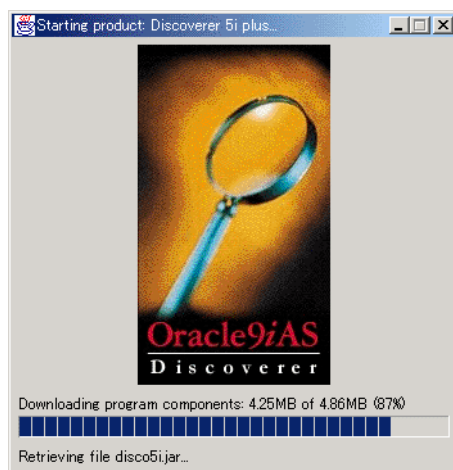
インストール・プログラムにより、指定した場所に Oracle JInitiator がインストールされます。Oracle JInitiator のインストールが完了したら、「インストールの完了」ダイアログ・ボックスが表示されます。

 - d. 「OK」をクリックして、「インストールの完了」ダイアログ・ボックスを閉じます。

これで、Oracle JInitiator がクライアント・マシンにインストールされました。
8. マシンをシャットダウンして、再起動します。
9. Netscape を起動し、完全修飾ホスト名を含む Discoverer Plus の URL を入力します。
10. 「接続」列で接続を選択します。
11. Discoverer Plus アプレットによって初期化されるのを待ちます。

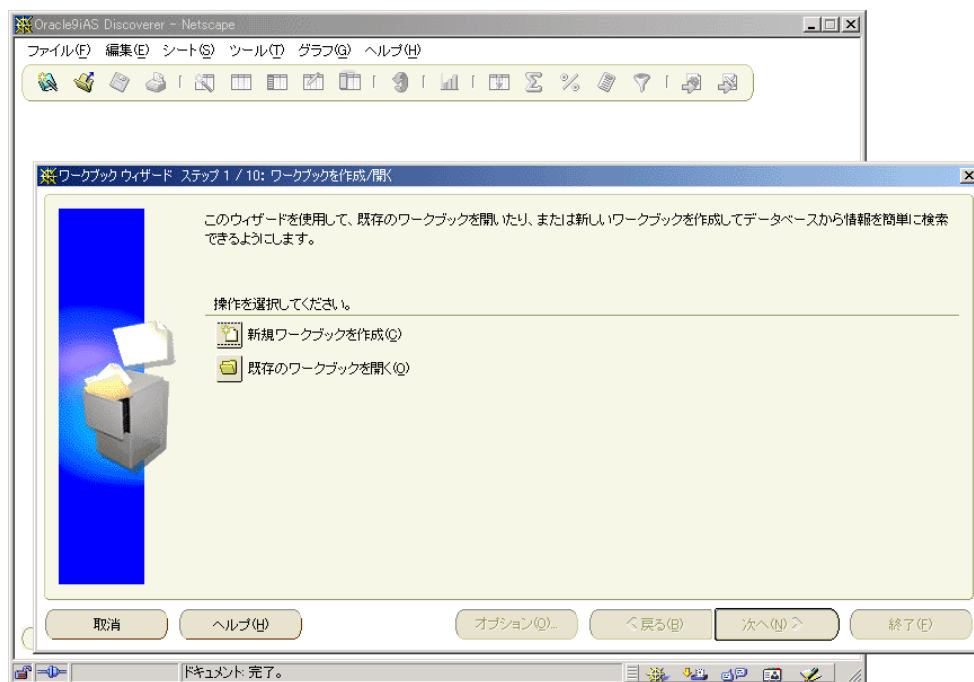
Discoverer Plus アプレットが初期化を実行している間に、「製品の起動中：Discoverer 5i Plus」ページが表示されます。

図 3-13 「製品の起動中 : Discoverer 5i Plus」 ページ



Discoverer Plus アプレットの初期化が終わるとキャッシュが行われ、「ワークブック ウィザード」ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3-14 Discoverer Plus の「ワークブック ウィザード：ワークブックを作成 / 開く」ダイアログ・ボックス



これで、Discoverer Plus が実行されます。

3.6 Discoverer Viewer の実行方法

Discoverer Viewer を実行するには、次の操作を行います。

1. Web ブラウザを起動して、インストレーションで使用した完全修飾ホスト名（必要な場合はポート番号を含む）を含む Discoverer Viewer URL を入力します。

例

`http://machinename.myorganization.com:7777/discoverer/viewer`

この URL の変数は、次のとおりです。

- `machinename.myorganization` は、Oracle HTTP Server がインストールされているホスト名およびドメインです。
- デフォルト・ポート番号（ポート 80 など）が変更されている場合、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号は 7777（オプション）となります。

- /discoverer/ viewer は、Discoverer Viewer を起動する URL コマンドです。
「Discoverer Viewer に接続」 ページが表示されます。

図 3-15 「Discoverer Viewer に接続」 ページ



2. 「接続」列で接続を選択します。

ヒント: 「接続」列に接続が表示されない場合は、操作を続ける前に新しい接続を作成する必要があります。プライベート接続の作成の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。Discoverer Administrator によって作成されたパブリック接続を使用することもできます (詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください)。

「ワークブックのリスト」 ページが表示されます。

図 3-16 「ワークブックのリスト」 ページ



これで、Discoverer Viewer が実行されます。「ワークブックのリスト」からワークブックを選択し、Discoverer Viewer でワークブックを表示します。

図 3-17 Discoverer Viewer で開いたワークブック

**注意：**

- UNIX 環境で Oracle9iAS をインストールした場合は、Discoverer Viewer のグラフおよびチャート作成機能をサポートするために、Discoverer Viewer Servlet で XWindow ディスプレイを使用可能にする必要があります。X Server を参照する DISPLAY 環境変数の設定の詳細は、『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

Oracle9iAS Discoverer のメンテナンス

4.1 Oracle9iAS Discoverer のメンテナンス

この章では、Oracle9iAS Discoverer のメンテナンス方法について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 4.2 項「Discoverer の Windows サービスの開始および停止」
- 4.3 項「Discoverer システムのシャットダウン」
- 4.4 項「UNIX でスタンドアロンの Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを停止する方法」

4.2 Discoverer の Windows サービスの開始および停止

Windows で Discoverer を実行している場合は、Discoverer 用に Windows サービスが作成されます。Windows で Discoverer のメンテナンスを行うには、次の項で説明するように、Discoverer の Windows サービスを開始および停止する必要があります。

- 4.2.1 項「Discoverer の Windows サービスとは」
- 4.2.2 項「Discoverer の Windows サービスが開始されるとき」
- 4.2.3 項「Discoverer の Windows サービスの手動による開始方法」
- 4.2.5 項「Discoverer の Windows サービスを手動による開始に変更する方法」
- 4.2.6 項「Discoverer の Windows サービスのエラーを表示する方法」

4.2.1 Discoverer の Windows サービスとは

Discoverer の Windows サービスは、マシンが起動されたときに Windows が自動的に開始する Oracle9iAS Discoverer のプロセスです。Windows のその他のサービスには、ネットワークワーキング、リモート・アクセス・プロシージャ、サーバー・オペレーション、テレフォニ・プロセスを開始するものがあります。

Discoverer をインストールすると、Discoverer の Windows サービスが「Oracle<Oracle_Install_Name>Discoverer」と呼ばれる自動 Windows サービスとして作成されます。

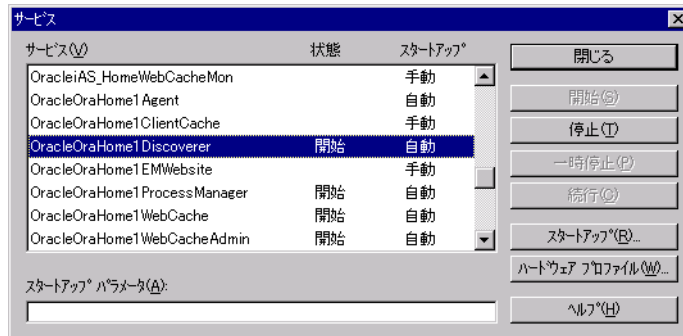
たとえば、Oracle ホームの名前が「OraHome1」の場合、Discoverer の Windows サービスは「OracleOraHome1Discoverer」となります。

Discoverer の Windows サービスは、Windows マシンが起動されるたびに Discoverer CORBA コンポーネントを自動的に起動します。Discoverer の Windows サービスを使用すると、サービスの実行を停止してこれらのコンポーネントをすべて停止することもできます。

Discoverer CORBA コンポーネントを 1 つの Windows サービスとして起動する主な利点は、サービス（CORBA コンポーネント）の実行を続けている間、マシンにログインしている必要はないということです。それぞれのコンポーネントを個々に起動した場合は、管理者とし

で各マシンにログインしている必要があります。ログオフすると、コンポーネントは自動的に停止されます。

「サービス」ダイアログ・ボックスには、Discoverer の Windows サービスの状態が表示されます。



「状態」列には、サービスが開始されているかが示されます。サービスが開始されていない場合は、「状態」列は空白になります。

「スタートアップ」列には、サービスがどのように開始されるか（手動または自動）が示されます。

4.2.2 Discoverer の Windows サービスが開始されるとき

Discoverer をインストールすると、Discoverer の Windows サービスの「スタートアップ」プロパティが「自動」に設定されます。この設定では、マシンが起動されるたびにサービスが自動的に開始します。ただし、サービスが自動的に開始された後は、いつでも手動で停止および再開できます。

コンピュータの起動時に Discoverer の Windows サービスを自動的に開始しない場合は、サービスの「スタートアップ」プロパティを「手動」に設定します。たとえば、特定の順序での開始と停止を必要とする特別なサービスがネットワークで必要な場合に、これを行います。

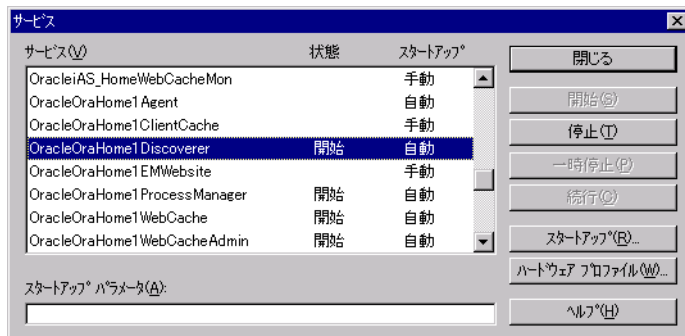
4.2.3 Discoverer の Windows サービスの手動による開始方法

Discoverer Windows の「スタートアップ」プロパティが「手動」に設定されている場合、マシンの起動時に Windows サービスは自動的に開始されません。そのため、Windows サービスを手動で開始する必要があります。

Discoverer の Windows サービスを手動で開始するには、次の操作を行います。

1. Windows の「スタート」メニューから「設定」→「コントロール パネル」の順に選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックし、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。

「サービス」ダイアログ・ボックスに「Oracle<Oracle_Install_Name>Discoverer」が表示されます。



2. 「Oracle<Oracle_Install_Name>Discoverer」 サービスを選択します。
3. 「開始」をクリックしてサービスを開始します。
4. 「閉じる」をクリックして「サービス」ダイアログ・ボックスを閉じます。

注意：

- Discoverer の「スタートアップ」プロパティの詳細は、[4.2.5 項「Discoverer の Windows サービスを手動による開始に変更する方法」](#)を参照してください。

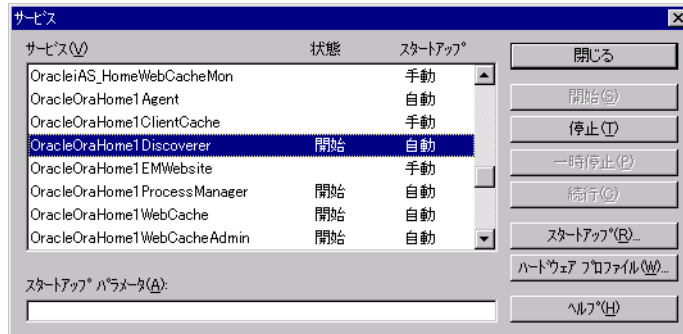
4.2.4 Discoverer の Windows サービスの手動による停止方法

Discoverer の Windows サービスが実行中であるときに、このサービスを停止して Discoverer を停止しなければならない場合があります。たとえば、手動でマシンを再起動するときなどです。

Discoverer の Windows サービスを手動で停止するには、次の操作を行います。

1. Windows の「スタート」メニューから「設定」→「コントロール パネル」の順に選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックし、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。

「サービス」ダイアログ・ボックスには、「Oracle<Oracle_Install_Name>Discoverer」が表示されます。



2. 「Oracle<Oracle_Install_Name>Discoverer」 サービスを選択します。
3. 「停止」 をクリックしてサービスを停止します。
4. 「閉じる」 をクリックして「サービス」 ダイアログ・ボックスを閉じます。

4.2.5 Discoverer の Windows サービスを手動による開始に変更する方法

Discoverer の Windows サービスを手動による開始に変更するには、次の操作を行います。

1. Windows の「スタート」メニューから「設定」→「コントロール パネル」の順に選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
「サービス」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「Oracle<Oracle_Install_Name>Discoverer」 サービスを選択します。
3. 「スタートアップ」をクリックして「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。
4. 「サービス」ダイアログ・ボックスの「スタートアップの種類」セクションで「手動」を選択します。
5. 「OK」をクリックして「サービス」ダイアログ・ボックスを閉じます。
6. 「閉じる」をクリックして「サービス」ダイアログ・ボックスを閉じます。

4.2.6 Discoverer の Windows サービスのエラーを表示する方法

Discoverer の Windows サービスの実行時にエラーが発生した場合は、これらのエラーがログ・ファイルに書き込まれます。

ログ・ファイルを表示するには、次の操作を行います。

1. 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール (共通)」→「イベント ビューア」を選択します。

4.3 Discoverer システムのシャットダウン

この項では、Discoverer をどのような理由でいつシャットダウンするかを説明します。

4.3.1 Discoverer システムをシャットダウンするとき

メンテナンスの実行やハードウェア設定の変更などを行うとき、サーバー・マシンをオフラインにする必要があります。これにより、メンテナンス作業中に、ユーザーがそのサーバーでセッションを開始してしまうことを防ぐことができます。Discoverer サーバーをシャットダウンする方法には、次の 2 通りがあります。

- 個々のサーバー・マシンをシャットダウンする（Windows のみ）
- Discoverer システム全体をシャットダウンする（Windows および UNIX）

注意：Discoverer のユーザー設定項目を編集するために、Discoverer システムをシャットダウンする必要はありません。ただし、メンテナンス用にシャットダウンするマシンが Preference コンポーネントを実行しているマシンである場合は、Discoverer システムをシャットダウンする必要があります。Preference コンポーネントを実行しているマシンをシャットダウンすると、セッションを作成するときに Preference コンポーネントが使用されるため、Discoverer システム全体に影響します。

4.3.2 個々のサーバーをシャットダウンする方法（Windows のみ）

Windows で Discoverer を実行している場合は、次の 2 通りの方法で、個々の Discoverer サーバーをシャットダウンできます。

- 準備ができた現行ユーザーから段階的に切断していく方法
- 現行ユーザーの Discoverer セッションをただちに強制終了させる方法

4.3.2.1 個々のサーバーを段階的に切断する方法（Windows のみ）

Windows で Discoverer を実行している場合は、個々の Discoverer サーバーを段階的に切断できます。

サーバーを段階的にシャットダウンすると、現行ユーザーはセッションを完了できますが、新規セッションを開始できなくなります。

1. シャットダウンするマシンで、Discoverer の Windows サービスを停止します（詳細は、[4.2.4 項「Discoverer の Windows サービスの手動による停止方法」](#)を参照してください）。

Discoverer の Windows サービスを停止すると、Discoverer CORBA コンポーネントが停止され、このマシン上で新規セッションを開始できなくなります。Discoverer の Windows サービスをシャットダウンしても、進行中のセッションには影響ありません。したがって、作業中のユーザーが作業を中断されることはありません。

現行ユーザー全員がセッションから切断されると、メンテナンス作業が可能になります。コンポーネントの登録または登録の解除を行う場合は、まず、Discoverer の Windows サービスを再開する必要があります。

ユーザー全員が切断したかチェックするには、Windows NT のタスク・マネージャを開き、Session 実行可能ファイル (dis51ws.exe) のインスタンスがいずれも実行中でないことを確かめます。

4.3.2.2 個々のサーバーをただちに強制終了する方法 (Windows のみ)

Windows で Discoverer を実行している場合は、個々の Discoverer サーバーをただちに強制終了できます。

強制終了すると、新規ユーザー・セッションが開始できなくなる他、現行のセッションも停止されます。強制終了するには、マシンの Discoverer の Windows サービスを停止した後 (これにより新規セッションが開始されなくなります)、現在実行中のセッションを停止します。

1. シャットダウンするマシンで、Discoverer の Windows サービスを停止します (詳細は、[4.2.4 項「Discoverer の Windows サービスの手動による停止方法」](#)を参照してください)。
2. [Ctrl]+[Alt]+[Del] キーを押して「Windows NT のセキュリティ」ダイアログ・ボックスを開き、「タスク マネージャ」をクリックします。
3. 「プロセス」タブを選択します。
4. 「dis51ws.exe」を選択します。
5. 「プロセスの終了」をクリックします。
6. タスク・マネージャで実行されている各セッション (dis51ws.exe) に対し、手順 4 および 5 を繰り返します。

4.3.3 Discoverer システム全体をシャットダウンする方法 (Windows および UNIX)

Discoverer システム全体をシャットダウンする場合は、個々のマシンを特定の順序でシャットダウンしていきます。

Discoverer システム全体のシャットダウン方法には次の 2 通りがあります。

- 準備ができた現行ユーザーから段階的に切断していく方法
- 現行ユーザーの Discoverer セッションをただちに強制終了させる方法

4.3.3.1 Discoverer システムを段階的に切断する方法

Windows または UNIX で Discoverer を実行している場合は、いずれの場合も Discoverer を段階的にシャットダウンできます。

Discoverer システムを段階的にシャットダウンすると、現行ユーザーはセッションを完了できますが、新規セッションを開始できなくなります。

Discoverer を段階的にシャットダウンするには、CORBA コンポーネントを順番に停止させます。

Windows では、次のようにします。

1. 個々のマシンで、Discoverer の Windows サービスを停止します（詳細は、[4.2.4 項「Discoverer の Windows サービスの手動による停止方法」](#)を参照してください）。

Discoverer の Windows サービスを停止すると、Discoverer CORBA コンポーネントが停止され、このマシン上で新規セッションを開始できなくなります。Discoverer の Windows サービスをシャットダウンしても、進行中のセッションには影響ありません。したがって、作業中のユーザーが作業を中断されることはありません。

これで、Preference コンポーネントをシャットダウンしました。

注意：すべてのセッションが停止するまで、Preference コンポーネントはシャットダウンしないでください。セッションがアクティブである間に Preference コンポーネントをシャットダウンすると、アクティブなセッションに問題が発生する可能性があります。

2. [Ctrl]+[Alt]+[Del] キーを押して「Windows NT のセキュリティ」ダイアログ・ボックスを開き、「タスク マネージャ」をクリックします。
3. 「dis51pr.exe」を選択して「プロセスの終了」をクリックし、Preference コンポーネントをシャットダウンします。

UNIX では、次のようにします。

注意：UNIX の場合、OEM を使用して Discoverer の開始と停止を行うこともできます（詳細は、[4.4 項「UNIX でスタンドアロンの Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを停止する方法」](#)を参照してください）。

1. コマンド・プロンプトで、stopoad.sh および stoposagent.sh ファイルを含んでいるディレクトリを探します。

構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

2. プロンプトで次のコマンドを入力し、OAD を停止させます。

```
> stopoad.sh
```

3. プロンプトで次のコマンドを入力し、SmartAgent を停止させます。

```
> stoposagent.sh
```

4. プロンプトで次のコマンドを入力し、Discoverer Preference コンポーネントを停止させます。

```
> stoppreference.sh
```

5. プロンプトで次のコマンドを入力し、現在実行中の **dis51pr** Discoverer プロセスの数値識別子をリスト表示します。

```
> ps -Algrep dis51pr
```

出力例は次のとおりです。

```
18064 pts/3 0:01 dis51pr
18072 pts/4 0:08 dis51pr
```

6. プロンプトで次のコマンドを入力し、最初の **dis51pr** プロセスを停止します。

```
> kill -9 <process id>
```

<process id> は、最初の **dis51pr** プロセスの数値識別子です。

たとえば、次のように入力できます。

```
> kill -9 18064
```

7. 前述の手順を繰り返し、すべての **dis51pr** プロセスを停止します。

現行のユーザー全員のセッションが完了すると、Discoverer サーバーがシャットダウンされます。

アクティブな Discoverer セッションがないことを確認するには、プロンプトで次のコマンドを入力し、現在実行中の **dis51ws** Discoverer プロセスの数値識別子をリスト表示します。

```
> ps -Algrep dis51ws
```

アクティブな **dis51ws** Discoverer プロセスを停止するには、プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
> kill -9 <process id>
```

<process id> は **dis51ws** プロセスの数値識別子です。

4.3.3.2 Discoverer システムをただちに切断する方法

即時シャットダウンでは、新規ユーザー・セッションが開始できなくなる他、現行のセッションも停止されます。即時シャットダウンを実行するには、次の操作を行います。

- すべてのマシンにおいて Discoverer の Windows サービスを停止し、新規セッションを開始できないようにします。
- 現在実行中のセッションを停止します。
- Preference コンポーネントを停止します。

Windows では、次のようにします。

1. 個々のマシンで、Discoverer の Windows サービスを停止します（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. 各マシンでは：
 - a. [Ctrl]+[Alt]+[Del] キーを押して「Windows NT のセキュリティ」ダイアログ・ボックスを開き、「タスク マネージャ」をクリックします。
 - b. 「dis51ws.exe」を選択します。
 - c. 「タスクの終了」をクリックして、Session コンポーネントを停止します。
 - d. 「dis51pr.exe」を選択します。
 - e. 「タスクの終了」をクリックして、Preference コンポーネントを停止します。
 - f. タスク マネージャで実行されている Session（dis51ws.exe）および Preference コンポーネント（dis51pr.exe）に対して、手順 4 および 5 を繰り返します。

UNIX では、次のようにします。

1. プrompt で次のコマンドを入力し、OAD、OSAGENT、および Discoverer Preference コンポーネントを停止させます。

```
> stopall.sh
```

注意：UNIX の場合、OEM を使用して Discoverer の開始と停止を行うこともできます（詳細は、[4.4 項「UNIX でスタンドアロンの Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを停止する方法」](#)を参照してください）。

4.4 UNIX でスタンドアロンの Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを停止する方法

Oracle Enterprise Manager を使用して、コンポーネント・ファーム内の任意のマシンから、コンポーネント・ファーム内のスタンドアロン・マシンで実行されている Oracle9iAS Discoverer を停止します。たとえば、マシン上でメンテナンス作業を行うために Oracle9iAS Discoverer を停止しなければならない場合があります。

スタンドアロンの Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを停止するには、次の操作を行います。

1. クラスタ内の任意のマシン上の Oracle Enterprise Manager を起動します（Oracle Enterprise Manager の起動の詳細は、[2.4 項「Oracle Enterprise Manager の起動方法」](#)を参照してください）。
2. 「スタンドアロン・インスタンス」の「名前」列で、停止する Oracle9iAS Discoverer を選択し、そのマシンの「システム・コンポーネント」ページを表示します。
3. 「選択」列で「OC4J_BI_Forms」ラジオ・ボタンを選択します。

注意：または、「OC4J_BI_Forms」リンクを選択して「OC4J_BI_Forms」ページを表示し、「停止」をクリックします。

4. 次のいずれかを行います。

- 「停止」をクリックしてコンポーネントを停止します。
- 「開始」をクリックしてコンポーネントを開始します。

注意：コンポーネントをいったん停止してから開始する場合には、「再起動」ボタンを使用できます。

Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへの インストール

5.1 Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール

この章では、Oracle9iAS Discoverer を複数のマシン環境に構成する方法を説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 5.2 項「Oracle9iAS Discoverer を複数のマシンにインストールする理由」
- 5.3 項「Oracle9iAS のインストールについて」
- 5.4 項「複数のマシンでの Discoverer の構成」
- 5.5 項「Discoverer Preference コンポーネントを実行するマシンの指定」
- 5.6 項「複数のマシンでの tnsnames.ora ファイルの構成」
- 5.7 項「複数の Oracle HTTP Server と OC4J コンポーネントの使用について」

5.2 Oracle9iAS Discoverer を複数のマシンにインストールする理由

Oracle9iAS Discoverer を複数のマシンにインストールすることには、次の利点があります。

- 容量とパフォーマンスの拡張
- 高可用性
- ロード・バランシング（負荷均衡）機能

5.3 Oracle9iAS のインストールについて

Oracle9iAS Discoverer を複数のマシンに構成する前に、Oracle9iAS Discoverer のインストールについての知識が必要です（Oracle9iAS Discoverer のインストールについてすでにご存知の方は、5.4 項「複数のマシンでの Discoverer の構成」に進んでください）。

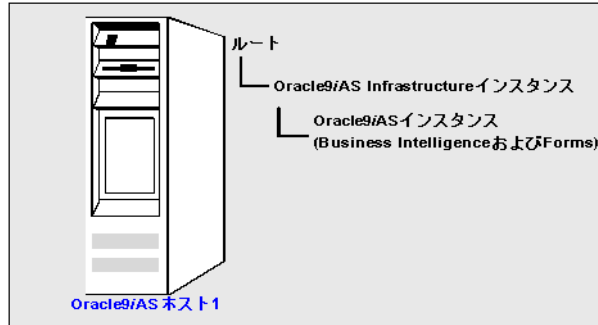
Oracle9iAS Discoverer の標準インストールには、次のものが含まれています。

- Oracle9iAS Middle-tier コンポーネントに必要な基本データベース、ディレクトリ・サーバー、および管理サーバーを含む、1 つの Oracle9iAS Infrastructure インストレーション。
- 1 台または複数のマシンへの、1 つ以上の「Business Intelligence および Forms」インストレーション。
- （オプション）1 台のマシンへの、1 つの「J2EE および Web Cache」インストレーション。これにより、Oracle9iAS Web Cache がプロキシとして動作できるようになります。

注意：「Business Intelligence および Forms」と、「J2EE および Web Cache」は、両方とも Oracle9iAS インストレーション・タイプです。詳細は、オペレーティング・システム固有の『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

1 台のマシンにインストールする場合、Oracle9iAS Infrastructure と、Oracle9iAS の「Business Intelligence および Forms」は同じマシン上の異なる Oracle ホームにインストールされます（下図を参照）。

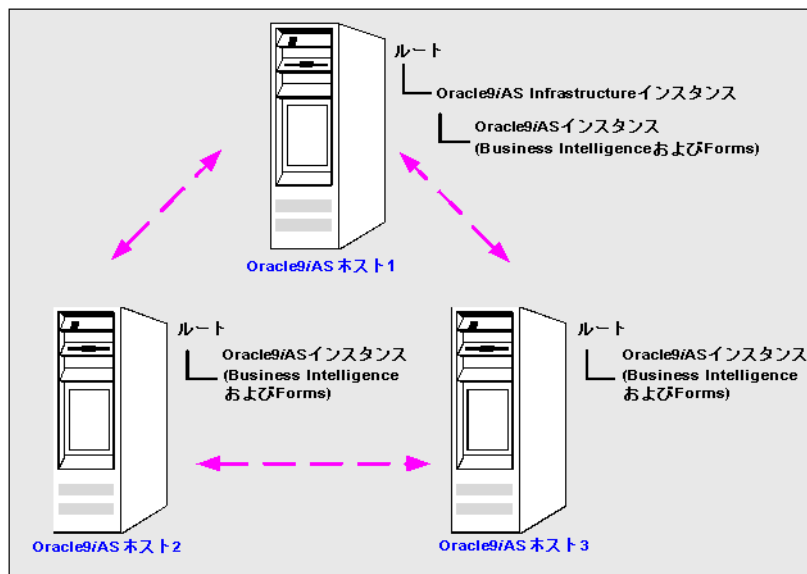
図 5-1 Oracle9iAS Discoverer を 1 台のマシンにインストールする場合



複数のマシンにインストールする場合、通常、Oracle9iAS Infrastructure と 1 つの Oracle9iAS 「Business Intelligence および Forms」は同じマシンにインストールされ、その他の Oracle9iAS 「Business Intelligence および Forms」が別のマシンにインストールされます（下図を参照）。これらのスタンドアロン Oracle9iAS コンポーネントは、1 つの Oracle9iAS ファームにリンクされています。

注意：Oracle9iAS ファームとは、1 つのメタデータ・リポジトリ内のインスタンスの集まりです。

図 5-2 Oracle9iAS Discoverer を複数のマシンにインストールする場合



Oracle9iAS のインストール中に「Business Intelligence および Forms」を選択すると、Discoverer サービス層がマシンにインストールされます。

「Business Intelligence および Forms」を別のマシンに続けてインストールし、それぞれのスタンドアロン・マシンをまとめて 1 つの Oracle9iAS ファームにリンクすることができます。

たとえば、次のようにインストールしたとします。

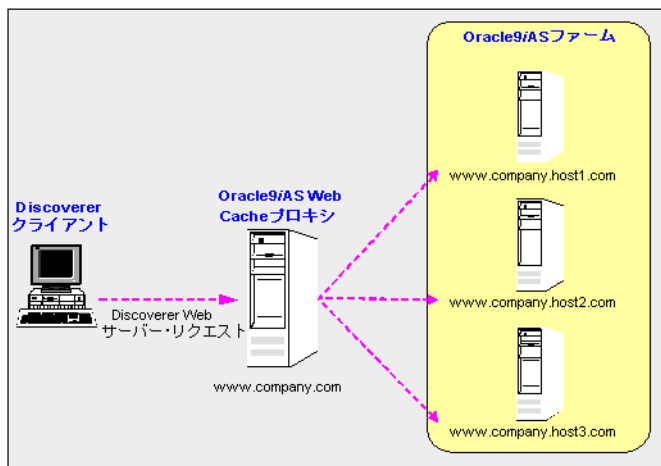
- 1 つの Oracle9iAS Infrastructure をホスト 1 (D:\ora9ias) にインストール。
- 1 つの Oracle9iAS の「Business Intelligence および Forms」インストール・タイプをホスト 1 (D:\ora9ias_BI) にインストール。
- 1 つの Oracle9iAS の「Business Intelligence および Forms」インストール・タイプをホスト 2 (G:\ora9ias) にインストール。

この場合、Oracle Enterprise Manager で次のように表示されます。



通常、1つのURLでOracle9iAS Web Cacheプロキシを使用して、ファーム内の別のDiscovererマシンにDiscoverer Webサーバー・リクエストを配布します（下図を参照）。

図 5-3 Oracle9iAS ファームでの Web Cache プロキシの使用



注意：

- Oracle Enterprise Manager を使用して Oracle9iAS ファームを作成できます（詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください）。
- 複数のマシンにインストールする場合：
 - 各マシンに Discoverer サービス層がインストールされます。
 - 各マシンに Discoverer Preference コンポーネントがインストールされます。ただし、使用されるのは 1 つの Preference コンポーネントだけです（詳細は、[1.7.2.2 項「Discoverer Preference コンポーネントとは」](#) および [5.5 項「Discoverer Preference コンポーネントを実行するマシンの指定」](#) を参照してください）。
- また、OC4J または Oracle9iAS Web Cache を使用して、複数のマシンに Oracle9iAS Discoverer の処理負荷を均等に割り当てることもできます。これをロード・バランシングと呼びます。OC4J の詳細は、『Oracle9i Application Server 概要』および『Oracle9iAS Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください。Web Cache の詳細は、『Oracle9iAS Web Cache 管理および配置ガイド』を参照してください。

5.4 複数のマシンでの Discoverer の構成

複数のマシンで Oracle9iAS Discoverer を構成する前に、次のインストールが完了している必要があります。

- 1 つの Oracle9iAS Infrastructure コンポーネント

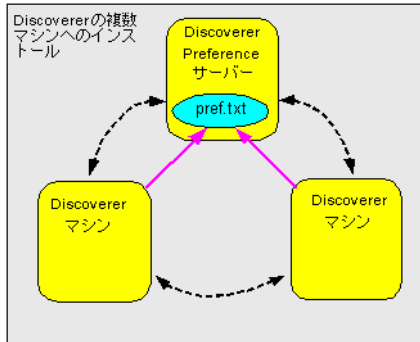
- 1 台または複数のマシンへの、1 つ以上の Oracle9iAS コンポーネント（例：Business Intelligence および Forms インストール・タイプ）
- 1 台のマシンへの、1 つの Oracle9iAS コンポーネント（例：J2EE および Web Cache インストール・タイプ）

複数のマシンで Discoverer を構成するには、次の操作を行います。

- ファームが作成されていない場合は、Oracle Enterprise Manager を使用して新しいファームを作成します（詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください）。
- Oracle Enterprise Manager を使用して、ファームに Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを追加します（詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください）。
- Oracle9iAS Web Cache がプロキシとして動作するように構成します（詳細は、『Oracle9iAS Web Cache 管理および配置ガイド』を参照してください）。
- どのマシンで Discoverer Preference コンポーネントを実行するかを指定します（詳細は、[5.5 項「Discoverer Preference コンポーネントを実行するマシンの指定」](#)を参照してください）。
- 各マシンが同じデータベース名とエイリアス情報を持っていることを確認します（詳細は、[5.6 項「複数のマシンでの tnsnames.ora ファイルの構成」](#)を参照してください）。

5.5 Discoverer Preference コンポーネントを実行するマシンの指定

複数のマシンへのインストールでは、Discoverer Preference コンポーネントが実行されるマシンは 1 台のみです。このマシンを Preference サーバー・マシンと呼びます。複数のマシンへのインストールでは、他のマシンが独自の Preference コンポーネントを実行するのではなく、Preference サーバー・マシンで実行されている Preference コンポーネントを使用していることを確認してください。次の図は、他の Discoverer マシンが、pref.txt ファイルに格納されている Preference サーバー・マシンの環境設定をどのようにして参照するかを示します（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。



複数のマシンへのインストールで、他のマシンが Discoverer Preference サーバー・マシンで実行されている Preference コンポーネントを使用するように指定するには、次の操作を行います。

- Discoverer Preference サーバー・マシン名を見つけてます（詳細は、[5.5.1 項「Discoverer Preference サーバー・マシン名の確認方法」](#)を参照してください）。
- Discoverer Preference サーバー・マシンを使用するように、複数のマシンへのインストールで他のマシンの登録セッション・スクリプトを変更します（詳細は、[5.5.2 項「Preference サーバー・マシンを使用するために複数のマシンへのインストールで他のマシンの登録セッション・スクリプトを変更する方法」](#)を参照してください）。

5.5.1 Discoverer Preference サーバー・マシン名の確認方法

Preference コンポーネントを実行しているマシン（Discoverer Preference サーバー・マシン）の名前を見つけるには、次の操作を行います。

1. Discoverer Preference サーバー・マシンとして指定するマシンで、テキスト・エディタを使用して次の登録セッション・ファイルを開きます。

- UNIX では、`registersession.sh` ファイルを開きます。
- Windows では、`registersession.bat` ファイルを開きます。

ファイルの場所を見つけるには、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

2. 登録セッション・スクリプトで次のような「`-preference`」コマンドを見つけてます。

```
... -a -preference -a <current_machine_name>OracleDiscovererPreference902 ...
```

ここでの `<current_machine_name>` は現行のマシン名です。

3. `<current_machine_name>` 値（現行のマシン名）を書き留めておきます。

<current_machine_name> は、Discoverer Preference サーバー・マシンとして現行のマシンを指定するために使用する名前になります。この名前を複数マシン・インストールにある他のマシンの登録セッション・スクリプトで使います。

4. テキスト・エディタを閉じます。

5.5.2 Preference サーバー・マシンを使用するために複数のマシンへのインストールで他のマシンの登録セッション・スクリプトを変更する方法

Preference コンポーネントを実行するマシン（Preference サーバー・マシン）の名前を指定したら、ここで他のマシンが独自の Preference コンポーネントを実行しないことを確認する必要があります。

複数のマシンへのインストールの場合、他のマシンが Discoverer Preference サーバー・マシンを使用することを確認するには、サーバー以外のすべてのマシンで次の操作を実行します。

1. Discoverer Preference コンポーネントを停止します（詳細は、[6.7 項「Preference コンポーネントを開始および停止する方法」](#)を参照してください）。
2. Discoverer Session コンポーネントの登録を解除します（詳細は、[6.6 項「OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除する方法」](#)を参照してください）。
3. テキスト・エディタで次の登録セッション・ファイルを開きます。
 - UNIX では、registersession.sh ファイルを開きます。
 - Windows では、registersession.bat ファイルを開きます。

ファイルの場所を見つけるには、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

4. 登録セッション・スクリプトで次のような「-preference」コマンドを見つけます。

```
... -a -preference -a <current_machine_name>OracleDiscovererPreference902
```

ここでの <current_machine_name> は現行のマシン名です。

5. <current_machine_name> 値を削除して、OracleDiscovererPreference902 の前に Discoverer Preference サーバー・マシンの名前を入力します。

たとえば、Preference サーバー・マシンの名前が「mc_1234」の場合、登録セッション・スクリプトを次のように変更します。

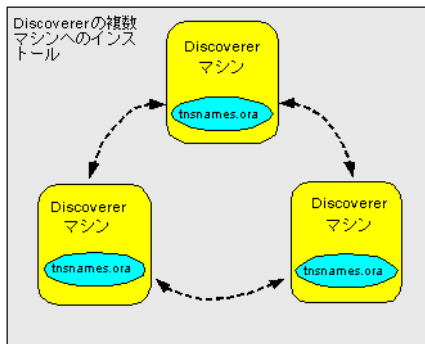
```
... -a -preference -a mc_1234OracleDiscovererPreference902 ...
```

6. Session コンポーネントを登録します（Session コンポーネントの登録の詳細は、[6.6 項「OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除する方法」](#)を参照してください）。

5.6 複数のマシンでの tnsnames.ora ファイルの構成

tnsnames.ora ファイルには、Oracle9iAS Discoverer を使用してアクセスできるすべてのデータベースの名前およびエイリアスが含まれています。

Discoverer の複数のマシンへのインストールを行った場合、各サーバー・マシンは同じ tnsnames.ora ファイルを持つ必要があります。



Discoverer サーバー・マシンを追加インストールする場合は、次のいずれかの操作を行って、各マシンの tnsnames.ora ファイルが同じであることを確認する必要があります。

- 既存の Discoverer サーバー・マシンにある tnsnames.ora ファイルを、デプロイする追加 Discoverer サーバー・マシンの同じ場所にコピーし、既存のファイルと置換します (tnsnames.ora ファイルの場所は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。
- それぞれの追加 Discoverer サーバーのデータベース名とエイリアスが、Discoverer サーバー・マシンと同じになるように、次の手順で tnsnames.ora ファイルを編集します。
 - a. テキスト・エディタを使用して、デプロイする個々の追加 Discoverer サーバー・マシンの tnsnames.ora ファイルを開きます (構成ファイルの場所は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。
 - b. 既存の Discoverer サーバー・マシンにある tnsnames.ora ファイルのデータベース名およびエイリアスと一致するように、データベース名およびエイリアスを編集します。
 - c. tnsnames.ora ファイルを保存します。

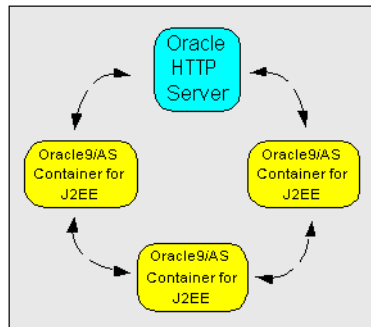
これで、すべての Discoverer サーバーが、同じデータベース名とエイリアスにアクセスできます。

ヒント: マシンには、tnsnames.ora ファイルの複数のバージョンが存在する場合があります。必ず、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)にリストされている tnsnames.ora ファイルを使用してください。

5.7 複数の Oracle HTTP Server と OC4J コンポーネントの使用について

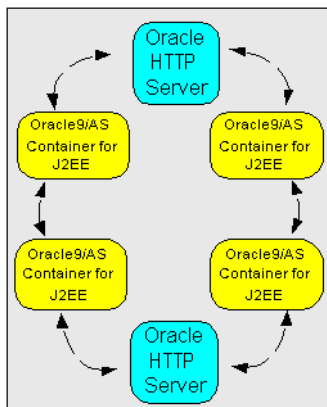
複数のマシンへのインストールを行う他に、Oracle HTTP Server および Oracle9iAS Container for J2EE (OC4J) コンポーネントの数を増やすことによって、Oracle9iAS Discoverer のパフォーマンスを向上できます。通常使用される構成には、次の 2 つがあります。

- Oracle HTTP Server (および MOD_OC4J) の単一インスタレーションおよび Oracle9iAS Container for J2EE の複数インスタレーション (詳細は、[5.7.1 項「Oracle HTTP Server の単一インスタレーション、および Oracle9iAS Containers for J2EE の複数インスタレーションを行って、Oracle9iAS Discoverer を使用する方法」](#)を参照してください)。



この構成を行うと、Oracle HTTP Server のパフォーマンスの向上と高可用性が実現します。

- Oracle HTTP Server (および MOD_OC4J) の複数インスタレーション、および Oracle9iAS Container for J2EE の複数インスタレーション (詳細は、[5.7.2 項「Oracle HTTP Server の複数インスタレーション、および Oracle9iAS Containers for J2EE の複数インスタレーションを行って、Oracle9iAS Discoverer を使用する方法」](#)を参照してください)。



この構成を行うと、Oracle HTTP Server および Discoverer サーバーのパフォーマンスの向上と高可用性が実現します。

5.7.1 Oracle HTTP Server の単一インスタレーション、および Oracle9iAS Containers for J2EE の複数インスタレーションを行って、Oracle9iAS Discoverer を使用する方法

この場合、次の操作を行います。

- Oracle HTTP Server コンポーネントを 1 台のマシンにインストールします（詳細は、オペレーティング・システム固有の『Oracle9i Application Server インスタレーション・ガイド』を参照してください）。
- Oracle9iAS Container for J2EE コンポーネントを複数のマシンにインストールします（詳細は、『Oracle9i Application Server 概要』および『Oracle9iAS Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。
- すべての Oracle9iAS Container for J2EE マシンの存在が確認されるように、mod_oc4j を構成します（詳細は、『Oracle9i Application Server 概要』および『Oracle9iAS Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。

5.7.2 Oracle HTTP Server の複数インストール、および Oracle9iAS Containers for J2EE の複数インストールを行って、Oracle9iAS Discoverer を使用する方法

この場合、次の操作を行います。

- Oracle HTTP Server コンポーネントを複数のマシンにインストールします（詳細は、オペレーティング・システム固有の『Oracle9i Application Server インストール・ガイド』を参照してください）。
- Oracle9iAS Container for J2EE コンポーネントを複数のマシンにインストールします（詳細は、『Oracle9i Application Server 概要』および『Oracle9iAS Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。
- mod_oc4j の各インスタンスによって、すべての Oracle9iAS Container for J2EE マシンの存在が確認されるように、各インスタンスを構成します（詳細は、『Oracle9i Application Server 概要』および『Oracle9iAS Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。

Discoverer CORBA コンポーネントの管理

6.1 Discoverer CORBA コンポーネントの管理

この章では、Discoverer CORBA コンポーネントの管理方法について説明します。たとえば、複数のマシン環境に Oracle9iAS Discoverer をインストールする場合、CORBA コンポーネントを手動で登録または登録解除するようなときに CORBA の管理が必要となります。この節で説明する項目は、次のとおりです。

- 6.2 項「Discoverer CORBA コンポーネントについて」
- 6.3 項「Discoverer CORBA コンポーネントの管理」
- 6.4 項「OAD が実行中で応答していることを確認する方法」
- 6.5 項「登録されたコンポーネントを表示する方法」
- 6.6 項「OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除する方法」
- 6.7 項「Preference コンポーネントを開始および停止する方法」

6.2 Discoverer CORBA コンポーネントについて

Discoverer Session および Discoverer Preference コンポーネントは、1 つまたは複数のアプリケーション・サーバーにインストールされます。Discoverer Session および Discoverer Preference コンポーネントの詳細は、1.7.2 項「Discoverer CORBA コンポーネント」を参照してください。

注意：

- Discoverer Session コンポーネントの登録および登録解除は、Windows の「スタート」メニューまたは UNIX のコマンドラインを使用して行います。
- 1 つのマシンまたはネットワーク全体の登録済みコンポーネントを表示できます。
- Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除したり、登録済みコンポーネントを表示するには、VisiBroker OAD (Object Activation Daemon) が実行中で応答している必要があります。OAD の実行を確認する操作は、6.4 項「OAD が実行中で応答していることを確認する方法」を参照してください。

6.3 Discoverer CORBA コンポーネントの管理

Discoverer CORBA コンポーネントを管理するには、通常次の操作を行います。

- OAD が実行中で応答していることを確認します（詳細は、6.4 項「OAD が実行中で応答していることを確認する方法」を参照してください）。
- どのコンポーネントが登録済みであるかを確認します（詳細は、6.5 項「登録されたコンポーネントを表示する方法」を参照してください）。

- Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除します（詳細は、[6.6 項「OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除する方法」](#)を参照してください）。

6.4 OAD が実行中で応答していることを確認する方法

Discoverer サーバーを実行しているオペレーティング・システムによって、次のいずれかの方法で OAD が実行中で応答していることを確認します。

- UNIX の場合は、[6.4.1 項「UNIX で OAD が実行中で応答していることを確認する方法」](#)を参照してください。
- Windows の場合は、[6.4.2 項「Windows で OAD が実行中で応答していることを確認する方法」](#)を参照してください。

6.4.1 UNIX で OAD が実行中で応答していることを確認する方法

UNIX で OAD が実行中であるかどうか分からない場合は、次の操作を行います。

1. プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
> oadutil list
```

OAD プロセスまたは OSAGENT が実行中でない場合は、次のメッセージが表示されます。

Unable to bind to OAD

OAD プロセスが実行中でない場合は、次の操作を行って OAD を起動します。

1. stopall.sh および startall.sh ファイルを含むディレクトリに移動し、コマンド・プロンプトで次の 2 つのコマンドを入力します。

```
> stopall.sh  
> startall.sh
```

ファイルの場所を見つけるには、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

6.4.2 Windows で OAD が実行中で応答していることを確認する方法

Windows で OAD が実行中であるかどうか分からない場合は、次の操作を行います。

1. [Ctrl]+[Alt]+[Del] キーを押して「Windows NT のセキュリティ」ダイアログ・ボックスを開き、「タスク マネージャ」をクリックします。

2. 「プロセス」タブを表示します。

プロセス・リストには、OC4J 用と OAD 用に、2 つの java.exe プロセスが含まれています。これらの java.exe プロセスの両方が実行中の場合は、OAD が実行中であると考えられます。OAD が実行中であるが応答しない場合は、Discoverer を停止してから再度起動します（詳細は、「**OAD が実行中であるが応答しない場合**」を参照してください）。

注意：プロセス・リストに、3 つ以上の java プロセスが含まれている場合があります。

OAD が実行中でない場合は、次の操作を行って OAD を起動します。

1. Windows の「スタート」メニューから「設定」→「コントロール パネル」の順に選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックし、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。
2. 「Oracle<Oracle_Install_Name>Discoverer」サービスを選択して、「開始」をクリックします。
3. OAD が開始された場合は、「閉じる」をクリックして「サービス」ダイアログ・ボックスを閉じます。

OAD は実行中であるが応答しない場合は、次の操作を行います。

1. Windows の「スタート」メニューから「設定」→「コントロール パネル」の順に選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックし、「サービス」ダイアログ・ボックスを表示します。
2. 「Oracle<Oracle_Install_Name>Discoverer」サービスを選択します。
3. 「停止」をクリックしてから、「開始」をクリックします。
4. OAD が開始された場合は、「閉じる」をクリックして「サービス」ダイアログ・ボックスを閉じます。

6.5 登録されたコンポーネントを表示する方法

登録されたコンポーネントを表示するには、次の操作を行います。

1. OAD が実行中であることを確認します（詳細は、[6.4 項「OAD が実行中で応答していることを確認する方法」](#)を参照してください）。
2. Visibroker のルート・ディレクトリに移動します。たとえば、¥VBROKER4¥BIN¥になります。
3. コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力して、osagent によって検索する必要のあるドメインを指定します。

```
> oadutil list -VBJprop vbroker.agent.port=<port number>
```

注意：ポート番号を見つけるには、次の操作を行います。

- Windows の場合は、Windows のレジストリ・キー HKLM/Software/Oracle/<Oracle Home>/DC902_OSAGENT_PORT の値を探します。
- UNIX の場合は、テキスト・エディタで startoad.sh スクリプトを開くか、OAD を開始するコメントを探します（スクリプト・ファイルの場所は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。

ヒント：コマンドには、-VBJprop vbroker.agent.port=<ポート番号> が含まれます。

4. プロンプトで次のコマンドを入力し、登録されているコンポーネントを表示します。

```
> osfind -VBJprop vbroker.agent.port=<port number>
```

ネットワークで実行中のコンポーネントのリストが表示されます。

6.6 OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除する方法

Discoverer サーバーを実行しているオペレーティング・システムによって、次のいずれかの方法で OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除します。

- UNIX の場合は、コマンドラインを使用して OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録します（詳細は、[6.6.1 項「コマンドラインを使用して OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除する方法」](#)を参照してください）。
- Windows の場合は、次のいずれかを使用して OAD に Discoverer サーバーコンポーネントを登録します。
 - コマンドライン（詳細は、[6.6.1 項「コマンドラインを使用して OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除する方法」](#)を参照してください）。
 - Windows の「スタート」メニュー（詳細は、[6.6.2 項「Windows の「スタート」メニューを使用して OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除する方法」](#)を参照してください）。

6.6.1 コマンドラインを使用して OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除する方法

Discoverer Session コンポーネントの登録にコマンドラインを使用する場合は、ファイルに含まれているスクリプトを実行します。Discoverer サーバーを実行しているオペレーティング・システムによって、ファイル名は次のようになります。

オペレーティング・システム	セッションの登録スクリプト
UNIX	registersession.sh
Windows	registersession.bat

コマンドラインから Discoverer Session コンポーネントを登録するには、次の操作を行います。

コマンド・プロンプトで、Session コンポーネントの登録スクリプトを含むディレクトリに移動します（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。

1. コマンド・プロンプトで、次のようにスクリプトを実行します。

- UNIX の場合、次のコマンドを入力します。
 > registersession.sh
- Windows の場合、次のコマンドを入力します。
 > registersession.bat

6.6.1.1 コマンドラインから Discoverer Session コンポーネントを登録解除する方法

コマンドラインを使用して Discoverer Session コンポーネントの登録解除を行う場合は、ファイルに含まれているスクリプトを実行します。Discoverer サーバーを実行しているオペレーティング・システムによって、ファイル名は次のようになります。

オペレーティング・システム	セッションの登録解除スクリプト
UNIX	unregistersession.sh
Windows	unregistersession.bat

コマンドラインから Session コンポーネントを登録解除するには、次の操作を行います。

1. コマンド・プロンプトで、Session コンポーネントの登録解除スクリプトを含むディレクトリに移動します（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。

2. コマンド・プロンプトで、次のようにスクリプトを実行します。

- UNIX では、次のコマンドを入力します。

```
> unregistersession.sh
```

- Windows では、次のコマンドを入力します。

```
> unregistersession.bat
```

6.6.2 Windows の「スタート」メニューを使用して OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除する方法

Windows で Discoverer サーバーを実行している場合は、Windows の「スタート」メニューにあるオプションを使用して、OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録および登録解除できます。

Discoverer Session コンポーネントの登録または登録解除を行うマシン上で、次の操作を行います。

1. Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle9i Application Server - <HOME_NAME>」→「Discoverer」の順に選択します。

複数の登録および登録解除のオプションが表示されます。

2. 登録または登録解除するコンポーネントを選択します。

確認画面が表示されます。

6.7 Preference コンポーネントを開始および停止する方法

Discoverer サーバーを実行しているオペレーティング・システムによって、次のいずれかの方法で Discoverer Preference コンポーネントを開始および停止します。

- UNIX の場合は、[6.7.1 項「UNIX で Preference コンポーネントを開始および停止する方法」](#)を参照してください。
- Windows の場合は、[6.7.2 項「Windows で Preference コンポーネントを開始および停止する方法」](#)を参照してください。

6.7.1 UNIX で Preference コンポーネントを開始および停止する方法

UNIX で Discoverer Preference コンポーネントを停止するには、次の操作を行います。

1. stoppreference.sh ファイルを含むディレクトリに移動して、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
> stoppreference.sh
```

構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

UNIX で Discoverer Preference コンポーネントを開始するには、次の操作を行います。

1. `startpreference.sh` ファイルを含むディレクトリに移動して、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
> startpreference.sh
```

構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

6.7.2 Windows で Preference コンポーネントを開始および停止する方法

Windows で Discoverer Preference コンポーネントを停止するには、次の操作を行います。

1. Discoverer の Windows サービスを停止します（詳細は、[4.2.4 項「Discoverer の Windows サービスの手動による停止方法」](#)を参照してください）。
2. Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
3. 「ファイル名を指定して実行」ウィンドウに `regedit` と入力し、[Enter] キーを押します。
4. レジストリ・エディタで、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE` キーを開きます。
5. `DC902_START_PREFERENCES` の値を 1 から 0 に変更します。
6. Discoverer の Windows サービスを開始します（詳細は、[4.2.3 項「Discoverer の Windows サービスの手動による開始方法」](#)を参照してください）。

Windows で Discoverer Preference コンポーネントを開始するには、次の操作を行います。

1. Discoverer の Windows サービスを停止します（詳細は、[4.2.4 項「Discoverer の Windows サービスの手動による停止方法」](#)を参照してください）。
2. Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
3. 「ファイル名を指定して実行」ウィンドウに `regedit` と入力し、[Enter] キーを押します。
4. レジストリ・エディタで、`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE` キーを開きます。
5. `DC902_START_PREFERENCES` の値を 0 から 1 に変更します。
6. Discoverer Windows サービスを開始します（詳細は、[4.2.3 項「Discoverer の Windows サービスの手動による開始方法」](#)を参照してください）。

Discoverer 環境設定の編集

7.1 Discoverer 環境設定の編集

この章では、Oracle9iAS Discoverer 環境設定の管理方法について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 7.2 項「Discoverer 環境設定とは」
- 7.3 項「Discoverer システム環境設定」
- 7.4 項「Discoverer ユーザー環境設定」
- 7.5 項「すべてのユーザーに対するユーザー環境設定を設定する 方法」
- 7.6 項「個々のユーザーのユーザー環境設定を設定する方法」
- 7.7 項「Discoverer ユーザー環境設定のリスト」
- 7.8 項「dis51pr コマンドライン・ユーティリティで使用する引数のリスト」
- 7.9 項「Discoverer システム環境設定のリスト」

7.2 Discoverer 環境設定とは

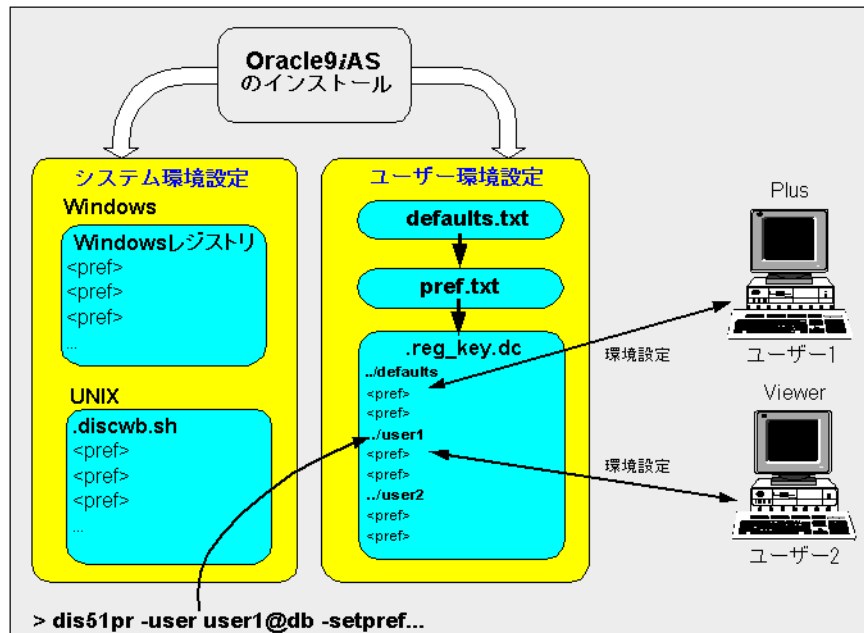
Discoverer 環境設定によって、Discoverer 環境の定義や、Discoverer Plus および Discoverer Viewer の動作の制御を行います。

Discoverer 環境設定には、次の 2 種類があります。

- Discoverer システム環境設定（詳細は、7.9 項「Discoverer システム環境設定のリスト」を参照してください）。
- Discoverer ユーザー環境設定（詳細は、7.7 項「Discoverer ユーザー環境設定のリスト」を参照してください）。

次の図に、Discoverer システム環境設定と Discoverer ユーザー環境設定間の関係を示します。

図 7-1 Discoverer ユーザー環境設定



7.3 Discoverer システム環境設定

Discoverer システム環境設定は、インストール中に作成および設定されます。通常、Discoverer システム環境設定を変更する必要はありません。UNIX システムでは、Discoverer システム環境設定は `discwb.sh` ファイルに保存されます。Windows システムでは、Discoverer システム環境設定は Windows のレジストリに保存されます。

Discoverer システム環境設定の詳細は、7.9 項「[Discoverer システム環境設定のリスト](#)」を参照してください。

7.4 Discoverer ユーザー環境設定

Oracle9iAS のインストール中、工場出荷時に設定された `defaults.txt` に保存されているデフォルト値を使用して、すべての Discoverer ユーザーに対してユーザー環境設定が作成されます。この設定は `pref.txt` に保存されます。

新しいユーザーが Oracle9iAS Discoverer セッションを初めて開始するとき、`pref.txt` ファイルに保存されている設定が、そのユーザーのデフォルト設定として使用されます。

インストールが完了した後も、ユーザー環境設定は次の方法で変更できます。

- Discoverer エンドユーザーは、Discoverer Plus または Discoverer Viewer 内のオプションを使用して各自ユーザー環境設定を変更できます。たとえば、Discoverer Viewer のエンドユーザーは、「環境設定」をクリックして自分の環境設定を変更できます。これらの変更は、Discoverer サーバーにある .reg_key.dc ファイルに保存されます。

個々のユーザーが環境設定を変更した場合、そのユーザーの環境設定は .reg_key.dc ファイルに保存されます。個々の環境設定は、データベースおよびユーザー ID の一意の組合せとして各ユーザーごとに .reg_key.dc ファイルに保存され、ユーザーが新しいセッションを開始するたびに読み込まれます。したがって、ユーザーが別のクライアント・マシンからログインした場合でも、個々の設定は有効です。

たとえば、Discoverer Plus のエンドユーザーが「ツール」→「オプション」を選択して「オプション」ダイアログ・ボックスを表示し、「1 ページあたりの行数」値を 15 に変更したとします。そのユーザーの .reg_key.dc には、次のようなエントリが保存されます。

```
"RowsPerHTML"=D4:4:00,00,00,0F
```

ここで「0F」は 15 の 16 進データ値です。

注意：ユーザーが環境設定値を変更しない限り、その環境設定の値は、pref.txt ファイルで指定されたものとなります。

- すべての Discoverer ユーザーに対するユーザー環境設定のデフォルト値を変更するには、pref.txt ファイルの値を変更します。この場合、変更した設定を有効にするには、変更を適用する必要があります (applypreferences スクリプトの詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。変更を適用すると、新しいデフォルト値が .reg_key.dc ファイルに書き込まれます (詳細は、[7.5 項「すべてのユーザーに対するユーザー環境設定を設定する方法」](#)を参照してください)。

注意：新しいデフォルト値よりも、ユーザーによって指定された環境設定の値が優先されます。

- dis51pr コマンドライン・ユーティリティを使用して、個人の環境設定を変更できます。加えた変更は、.reg_key.dc ファイルに保存されます (詳細は、[7.6 項「個々のユーザーのユーザー環境設定を設定する方法」](#)を参照してください)。

注意：

- pref.txt の工場出荷時のデフォルト値は、defaults.txt ファイルに含まれています (このファイルの場所は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。pref.txt ファイルの編集に誤りがある場合 (またはこのファイルが消失または破損した場合)、defaults.txt を参照して pref.txt の内容を元の値に戻してください。
- Preference コンポーネントをシャットダウンせずに、pref.txt ファイルを編集できます。つまり、管理者が pref.txt ファイルを編集している間に、ユーザーが操作を続行できます。
- UNIX 実装では、.reg_key.dc は隠しファイルです (ファイル名が '.' で始まります)。コマンド 'ls -al' を使用して隠しファイルのリストを表示します。

7.5 すべてのユーザーに対するユーザー環境設定を設定する方法

すべてのユーザーに対するユーザー環境設定を設定するには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタで `pref.txt` ファイルを開きます（ファイルの場所は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。

ヒント：Windows を使用している場合は、Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle9i Application Server - <HOME_NAME>」→「Discoverer」→「Edit Preferences」を選択して、メモ帳で `pref.txt` を開くことができます。

2. 必要に応じて `pref.txt` ファイル内の項目を編集します。
3. ファイルを保存し、テキスト・エディタを閉じます。

`pref.txt` の変更内容を有効にするには、環境設定を適用する必要があります。

4. 環境設定に加えた変更を適用するには、次の操作を行います。

- UNIX では、`applypreferences.sh` ファイルを含むディレクトリに移動して、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
applypreferences.sh
```

ファイルの場所は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

- Windows では、Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle9i Application Server - <HOME_NAME>」→「Discoverer」→「Apply Preferences」の順に選択します。または、コマンドラインで次のコマンドを入力します。

```
dis51pr -apply
```

ヒント：`pref.txt` ファイルにエラーがあると考えられる場合は、現行のディレクトリの `error.txt` ファイルをチェックします。

7.6 個々のユーザーのユーザー環境設定を設定する方法

個々のユーザーのユーザー環境設定を設定するには、次の操作を行います。

1. コマンド・プロンプトから、`dis51pr` 実行可能ファイルを含むディレクトリに移動します。

ファイルの場所は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

2. 次の構文を使用して、コマンドラインにコマンドを入力します。

```
dis51pr -user <user> -setpref "<pref category>" "<pref name>" <pref value>
-apply
```

このコマンドラインの変数は、次のとおりです。

- <user> は、環境設定値を設定するユーザーの名前です。その後に @ 記号およびデータベースの名前が続きます。
- <pref category> は、変更する環境設定のカテゴリです。
- <pref name> は、変更する環境設定の名前です。
- <pref value> は、環境設定に設定する値です。

例：

- ユーザー jchan のデフォルト EUL を設定する場合は、次のように入力します。

```
dis51pr -user jchan@salesdb -setpref "Database" "DefaultEUL" "¥sales"¥  
-apply
```
- ユーザー jchan に対して、512000 までのデータ・キャッシュに使用できるヒープ・メモリの最大量を設定する場合は、次のように入力します。

```
dis51pr -user jchan@salesdb -setpref "Application" "MaxVirtualHeapMem"  
512000 -apply
```

注意：

- dis51pr のオンライン・ヘルプを表示するには、コマンドラインで次のコマンドを入力します。

```
dis51pr -help
```
- 環境設定名とその値は、大文字と小文字を区別して指定します。
- dis51pr コマンドライン・ユーティリティを使用して設定できる Discoverer 環境設定のリストは、7.7 項「Discoverer ユーザー環境設定のリスト」を参照してください。
- dis51pr コマンドライン・ユーティリティを使用して設定できるその他の引数のリストは、7.8 項「dis51pr コマンドライン・ユーティリティで使用する引数のリスト」を参照してください。

7.7 Discoverer ユーザー環境設定のリスト

この表は、Discoverer ユーザー環境設定のカテゴリ、説明、デフォルト値、および有効な値を示します。

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
AppsFNDNAM	Database	Oracle Applications のデータを格納する際のスキーマを指定します。	APPS	有効な Apps Foundation Name

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
AppsGWYUID	Database	AOL セキュリティ DLL のパブリック・ユーザー名およびパブリック・パスワードを指定します。	APPLSYSPUB/PUB	有効な Apps ユーザー名およびパスワード
AvoidServerWildcardBug	Database	NLS_LANG を Japanese_Japan.JA16SJIS に設定した RDBMS 7.3.2 の場合、特定のリスト・ボックスが空白で表示されないようにするには、この値を 1 に設定します。	0	0 = NLS_LANG が Japanese_Japan に設定されている RDBMS 7.3.2 に対して実行されない。 1 = NLS_LANG が Japanese_Japan に設定されている RDBMS 7.3.2 に対して実行される。
Axis Style	Crosstab	クロス集計の軸の位置。	2	1 = インライン 2 = アウトライン
BusinessAreaFastFetchLevel	Database	ビジネスエリアを取り出す際にキャッシュするコンポーネントやアイテムの量をレベルで指定します。	1	1
CacheFlushPercentage	Application	キャッシュがいっぱいになった場合に、消去されるキャッシュの割合 (パーセント)。	25	ユーザー指定
Cell X Gridline	Crosstab	水平罫線を表示します。	0	0 = いいえ 1 = はい
Cell X Gridline	Table	水平罫線を表示します。	0	0 = いいえ 1 = はい
Cell Y Gridline	Crosstab	垂直罫線を表示します。	0	0 = いいえ 1 = はい
Cell Y Gridline	Table	垂直罫線を表示します。	0	0 = いいえ 1 = はい

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
DataFormat	Application	ワークシート内のデータ・セルに適用される HTML 書式設定。	"<fontFormat fontName="Dialog" pitch="10" bold="false" italic="false" underline="false" strikethrough="false" foreground="0,0,0" background="255,255,255" halign="right" valign="top"></fontFormat>"	ユーザー指定
DefaultEUL	Database	すべてのユーザーが接続する EUL を設定します。各ユーザーは、Discoverer Plus の「オプション」ダイアログ・ボックスからこのデフォルトを変更できます。	作成した任意の EUL	任意の有効な EUL
DefaultUserTypeIsA pps	Administrator	<p>Discoverer Plus および Discoverer Viewer ユーザーのデフォルトを Oracle Applications に設定するかどうかを指定します。</p> <p>「接続の作成」ページに「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスが表示される場合は、この設定を使用して、デフォルトでチェック・ボックスを選択しない (0) か選択する (1) かを指定します。</p> <p>「接続の作成」ページに「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスが表示されない場合は、この設定を使用して、デフォルトのログイン・タイプを非 Oracle Apps (0) にするか Oracle Apps (1) にするかを設定します。</p> <p>詳細は、14.3 項「Oracle Applications 用に Discoverer 構成を設定する方法」を参照してください。</p>	0	0 = いいえ 1 = はい

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
DisableAutoOuterJoinsOnFilters	Database	この設定は、適用される条件との外部結合を含む問合せを実行している場合に、Discoverer の動作を切り替えます。 この設定による影響の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。	0	0 = フィルタで外部結合を無効にしない。 1 = フィルタで外部結合を無効にする。
DisableAutoQuery	Database	0 に設定した場合、ワークシートが開かれたときに問合せは自動的に実行されません。	0	0 = オン 1 = オフ
DisableFanTrapDetection	Database	ユーザー問合せのファントラップ検出を無効にします。	0	0 = オン 1 = オフ
DisableMultiJoinDetection	Database	この設定は、Discoverer Plus でワークシートを作成する場合に、複数の結合パスの検出を切り替えます。 この設定が = 1 の場合は、ワークシートを作成するときにデスクトップがすべての結合オプションを選択します。 値が 0（ゼロ）で複数結合が存在する場合は、Discoverer Plus でワークシートに使用する結合を選択した場所に「フォルダの結合」ダイアログ・ボックスが表示されます。 注意： Discoverer が正確な結果データを表示できるように、Discoverer Plus ユーザーは使用可能なすべての結合を選択してください。	0	1 = 複数結合検出を無効にする。 0 = 複数結合検出を無効にしない。
EnhancedAggregationStrategy	Database	拡張データ集計操作をオンにするかどうかを決定します。オンの場合は、どの作成方針を使用するかを決定します。 値の詳細は、 「EnhancedAggregationStrategy ユーザー環境設定」 を参照してください。	4	0 = オフ 1 = 厳格なグルーピング・セット 2 = 最適化 3 = キューブ 4 = 自動判別

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
ExcelVersion	Application	<p>エクスポートする Excel のバージョンを指定します。</p> <p>異なる Excel バージョンでは、次のようにシートごとの行数に制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Excel95 は、シートにつき 16384 行の制限があります。 ■ Excel97 は、シートにつき 65536 行の制限があります。 ■ Excel2000 は、シートにつき 65536 行の制限があります。 <p>制限を越えた場合は、Discoverer により追加の Excel シートに余分な行が配置されます。</p>	Excel95	<p>Excel95</p> <p>Excel97</p> <p>Excel2000</p>
HeadingFormat	Application	ワークシート内のヘディング・セルに適用される HTML 書式設定。	<pre><fontFormat fontName="Dialog" pitch="10" bold="false" italic="false" underline="false" strikethrough="false" foreground="0,0,0" background="204,204,204" halign="left" valign="top"></fontFormat></pre>	ユーザー指定
ItemClassDelay	Database	値リストを取り出す時間の上限値。	15 (秒)	ユーザー指定
MaterializedViewRe directionBehavior	Database	マテリアライズド・ビューのリダイレクション。	0	<p>0 = 利用できる場合は常に使用する。</p> <p>1 = サマリー・データが失効していない場合は常に使用する。</p> <p>2 = 使用しない。</p>
MaxVirtualDiskMem	Application	データ・キャッシュに使用できるディスクの最大量。	1024000000	ユーザー指定

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
MaxVirtualHeapMem	Application	データ・キャッシュに使用できるヒープ・メモリの最大量。	5120000	ユーザー指定
NullValue	Application	ワークシートに NULL 値を表示する方法を、たとえば NULL、N/A、0 などと指定します。	NULL	ユーザー指定
ObjectsAlwaysAccessible	Database	ビジネスエリア上のオブジェクトおよびアイテムが、データベースに存在するかどうかを検証します。	0	0 = 検証する。 1 = オブジェクトおよびアイテムが存在するものと想定し、検証を行わない。
PredictionThresholdSeconds	Database	問合せ予測時間が設定された秒数を超過する場合、ユーザーに警告します。	60 (秒)	ユーザー指定
PredictionThresholdSecondsEnabled	Database	問合せ予測しきい値を無効 (0) または有効 (1) にします。	1	0 = 無効 1 = 有効
QPPAvgCostTimeAlgorithm	Database		2	
QPPCBOEnforced	Database	1 に設定すると、コスト・ベース・オブティマイザが使用されます。0 に設定すると、デフォルトのオブティマイザが使用されます。	1	0 = デフォルトのオブティマイザを使用する。 1 = コスト・ベース・オブティマイザを使用する。
QPPCreateNewStats	Database	1 に設定すると、新規の統計が記録されます。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
QPPEnable	Database	1 に設定した場合、問合せ予測 / パフォーマンス (QPP) を使用します。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
QPPLoadStatsByObjectUseKey	Database	1 に設定すると、同じオブジェクトの統計が最初に記録されます。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
QPPMaxObjectUseKey	Database	問合せ予測用にメモリーにキャッシュする統計量を決定します。	30	ユーザー指定
QPPMaxStats	Database	設定値の数のみ、以前の統計がロードされます。	500	ユーザー指定

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
QPPMinActCpuTime	Database	この値より大きい CPU 時間の統計のみが記録または使用されます。	0	ユーザー指定
QPPMinActElapsedTime	Database	この値より大きい実行時間の統計のみが記録または使用されます。	0	ユーザー指定
QPPMinCost	Database	この値より大きいコストの統計のみが記録または使用されます。	0	ユーザー指定
QPPMinEstElapsedTime	Database	この値より大きい予想経過時間の統計のみが記録または使用されます。	0	ユーザー指定
QPPObtainCostMethod	Database		1	
QPPUseCpuTime	Database	アルゴリズム内で CPU 時間を使用して問合せ予測します。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
QueryBehavior	Application	ワークブックを開いた後で取るアクション。	0	0 = 問合せを自動で実行する。 1 = 問合せを実行しない。 2 = 問合せを実行するかどうか尋ねる。
QuerySQLFastFetchLevel	Database		1	
QueryTimeLimit	Database	問合せ時間の上限を秒で示します。	1800 (秒)	ユーザー指定
QueryTimeLimitEnabled	Database	問合せ時間の制限を無効 (0) または有効 (1) にします。	1	0 = 無効 1 = 有効
RdbFastSQLOff	Database		0	
Row Headings	Table	テーブル形式のワークシート上に行数を表示します。	0	0 = いいえ 1 = はい
RowFetchLimit	Database	取り出す行数の最大値。	10000 (行)	ユーザー指定
RowFetchLimitEnabled	Database	RowFetchLimit パラメータを無効 (0) または有効 (1) にします。	1	0 = 無効 1 = 有効
RowsPerFetch	Database	一度に取り出す行数。	250 (行)	ユーザー指定
RowsPerHTML	Session Manager	HTML の 1 ページに表示される行数。	25	ユーザー指定

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
ShowDialogBitmaps	Application	エンド・ユーザーの「Discoverer Plus」ダイアログ・ボックスに、ビットマップ・グラフィックを表示します。	1	0 = オフ 1 = オン
ShowUserTypeChoice	Administrator	Discoverer Plus を Oracle Application に対して実行するかどうかを指定するエンド・ユーザー・チェック・ボックスをアクティブにします。	0	0 = チェック・ボックスを表示しない。 1 = チェック・ボックスを表示する。
SQLTrace	Database	FALSE (オフ)。	0	0 = FALSE 1 = TRUE
SummaryObjectsUseCachedAccessibility	Database	キャッシュ内のサマリー導出オブジェクトにアクセスするかどうかを指定します。	0	
SummaryThreshold	Database	サマリー表がこの日数以内に更新されている場合にのみ、サマリー表を使用します。	60 (日)	ユーザー指定 または 0 = サマリーを使用しない。
SummaryThresholdEnabled	Database	有効 (1) にすると、SummaryThreshold で指定した値が使用されます。そうでない場合、Discoverer は使用できる限りサマリー表を使用します。	1	0 = 無効 1 = 有効
Timeout	Session Manager	Discoverer が、アイドル・セッションをデータベースから切断するまでの時間。最小時間は 180 秒です。	1800	ユーザー指定
Title	Crosstab	Discoverer 3.1 のワークシートで作成されたタイトルを表示します。	1	0 = いいえ 1 = はい
Title	Table	Discoverer 3.1 のワークシートで作成されたタイトルを表示します。	1	0 = いいえ 1 = はい

ユーザー環境設定名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
TotalsFormat	Application	ワークシート内の総計セルに適用される HTML 書式設定。	"<fontFormat fontName="Dialog" pitch="10" bold="false" italic="false" underline="false" strikethrough="false" foreground="0,0,0" background="255,255,255" halign="left" valign="top"></fontFormat>"	ユーザー指定
UseOptimizerHints	Database	1 に設定された場合、オブティマイザ・ヒントが SQL に追加されます。	0	0 = オフ 1 = オン

7.7.1 EnhancedAggregationStrategy ユーザー環境設定

EnhancedAggregationStrategy ユーザー環境設定によって、Discoverer Plus および Discoverer Viewer が Oracle9i データベースの拡張集計操作機能をどのように使用するかを指定します。

設定は、問合せ用に生成される SQL に影響します。この設定により、Discoverer サーバーからのクライアント要求と、取り出される集計操作が正確に一致するべきかどうかを指定します。または、Discoverer サーバーからクライアントによって要求された集計操作レベルより多くのレベルをデータベースから取得するかどうかを指定します。

次の表は、EnhancedAggregationStrategy ユーザー環境設定の詳細を示します。

値	説明
0	オフ 生成された SQL は、標準の GROUP BY 句を含みます。
1	厳格なグルーピング・セット 生成された SQL は、Discoverer サーバーによって行われた GROUPING SET 要求と正確に一致する GROUPING SET 要求を含みます。Discoverer サーバーが行う要求は、エンドユーザーがワークシートをどのように作成したかによって決定されます。 たとえば、生成された GROUP BY 句は次のようになります。 GROUP BY GROUPING SETS((Department, Region, Year),(Department),())

値	説明
2	<p>最適化</p> <p>生成された SQL は、追加の ROLLUP 関数を持つ GROUPING SET 要求を含みます。ROLLUP 関数を使用すると、SQL が Discoverer サーバーによって要求されたレベルより多くの集計操作レベルをフェッチできます。これにより、エンド・ユーザーがデータベースを再度問い合わせることなく総計を集計したり、ピボットすることができます。</p> <p>たとえば、生成された GROUP BY 句は次のようになります。</p> <p>GROUP BY GROUPING SETS(ROLLUP(Department, Region, Year), ROLLUP(Region, Year))</p>
3	<p>キューブ</p> <p>生成された SQL は、要求されたアイテムの CUBE 用グルーピング・セット・要求を含みます。これは、データベースから取り出す集計操作レベルの最高のプリフェッチ方針です。問合せ時間とリソースの利用が拡大し、パフォーマンス・オーバーヘッドの重大な問題が発生する可能性があるため、注意して使用する必要があります。</p> <p>たとえば、生成された GROUP BY 句は次のようになります。</p> <p>GROUP BY GROUPING SETS(CUBE(Department, Region, Year))</p>
4	<p>自動判別</p> <p>Discoverer が使用する方針を上記の 1、2、3 の中から自動的に判別します。</p>

7.8 dis51pr コマンドライン・ユーティリティで使用する引数のリスト

dis51pr コマンドライン・ユーティリティで次のコマンドを使用できます。

注意：dis51pr.exe ユーティリティでオンライン・ヘルプを表示するには、コマンドラインで次のコマンドを入力します。

```
dis51pr -help
```

7.9 Discoverer システム環境設定のリスト

この表は、Discoverer システム環境設定の説明、デフォルト値を示します。システム環境設定の値は、Windows システムでは Windows のレジストリ、UNIX システムでは discwb.sh ファイルに保存されます。

システム環境設定名	説明	デフォルト値
DC902_ADM_PATH	インストール中に設定します。	%ORACLE_HOME%\discoverer902\bin\adm
DC902_INSTANCE_NAME	インストール中に設定します。 Discoverer サーバー・マシンの名前。	マシン名
DC902_OAD_LOG	インストール中に設定します。	1
DC902_OSAGENT_PORT	インストール中に設定します。	16001
DC902_SERVER_HOME	インストール中に設定します。	%ORACLE_HOME%\discoverer902\bin
DC902_START_OAD	インストール中に設定します。	1
DC902_START_OSAGENT	インストール中に設定します。	1
DC902_START_PREFERENCES	インストール中に設定します。	1
DC902_VBROKER_HOME	インストール中に設定します。	%ORACLE_HOME%\vbroker4
DC902_VBROKER_JVM	インストール中に設定します。	java 実行可能ファイルの場所
DISCWB902	インストール中に設定します。	Discoverer のインストール・ディレクトリ %ORACLE_HOME%\...

URL パラメータを使用した Discoverer の 起動

8.1 URL パラメータを使用した Discoverer の起動

この章では、URL 引数とともに Oracle9iAS Discoverer を使用方法を説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 8.2 項「URL とともに Discoverer を使用する理由」
- 8.3 項「URL パラメータの構文とは」
- 8.4 項「URL パラメータの使用例」
- 8.5 項「Discoverer の汎用 URL 引数」
- 8.6 項「Discoverer Plus の URL 引数」
- 8.7 項「Discoverer Viewer の URL 引数」

8.2 URL とともに Discoverer を使用する理由

通常、Discoverer のエンド・ユーザーが Oracle9iAS Discoverer を起動する際、Discoverer 接続を選択してワークブックを開き、オプションでパラメータ値を選択します。この手順を短縮するには、特定の設定（たとえば、開くワークブックや使用するパラメータ値の設定）を行なった状態で Oracle9iAS Discoverer を起動するための URL を作成します。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーに、Discoverer に自動的にログインして特定のワークブックを開く URL を用意できます。

URL を使用して Discoverer を自動的に開始することにより、エンド・ユーザーは短時間でログインし問合せを実行できます。また、URL へのリンクを Web ページに埋め込んで、Web ページから Discoverer ワークブックに直接アクセスできるようにすることも可能です。

必要条件に合った URL を作成しておくと、次のことが行えます。

- エンド・ユーザーが Web ブラウザの「アドレス」ボックスに入力する URL を提供できます。
- 企業のイントラネット・サイトにリンクする URL を追加し、エンド・ユーザーがリンクをクリックすると Discoverer を起動できます。

8.3 URL パラメータの構文とは

URL パラメータは、次の構文に従う必要があります。

```
http://hostname.domain[port number]/application  
name?arg1=value1...&argN=valueN
```

変数

- hostname.domain は、Oracle HTTP Server がインストールされているホスト名およびドメインです。

- port number は、デフォルトのポート番号（ポート 80）を変更した場合は、Oracle HTTP Server をインストールしたポート番号となります。
- application name は、Discoverer Plus または Discoverer Viewer のいずれを起動するかによって、次のようになります。
 - discoverer/plus
 - discoverer/viewer
- ? - 疑問符の後に続くテキストは、URL パラメータです。
- arg1=value1 は、最初の引数とその引数に指定する値です。これに続く URL パラメータは、アンパサンド文字（&）で始まっていることに注意してください。

注意：

- URL パラメータには、大文字と小文字の区別がありません。たとえば、Locale= と locale= は同じ URL となります。
- 一方、URL パラメータの値には、大文字と小文字の区別があります。たとえば、workbooksource=Database と workbooksource=DataBase は、異なる URL パラメータ値です。
- URL 引数の順序は重要ではありません。
- 次の必須引数が URL に指定されていないと、エンド・ユーザーはそれを入力するようにプロンプトされます。
 - ユーザー名
 - パスワード
 - データベース
 - ワークブック名
 - ワークシート名
 - パラメータ
- 名前が複数の単語で構成される場合、単語間のスペースはプラス記号（+）で置き換えられます。たとえば、「January Analysis 2003」という名前のワークブックの URL パラメータは、「&wb=January+Analysis+2003」となります。
- URL にその他の特殊文字を挿入する場合には、それに相当する ASCII（または UNICODE）コードで置換します。この処理は、URL エンコーディングと呼ばれます。たとえば、垂直バー（|）を使用するには、~7c に置き換えます。次のリストに含まれない文字は、URL エンコーディングが必要です。
 - 大文字（例：ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ）
 - 小文字（例：abcdefghijklmnopqrstuvwxyz）

- 数字（例：0123456789）
- 一部の特殊文字（例：_!~()*'）

URL エンコーディングの詳細は、標準の HTML ガイドを参照してください。

- URL に入力できる文字の最大数は、使用するインターネット・ブラウザによって次のように決まります。
 - Internet Explorer 4 以上 - 2048 文字
 - Netscape Navigator 4 以上 - 制限なし

注意：Apache Web サーバーでは 8192 文字に制限されます。

8.4 URL パラメータの使用例

この節では、Discoverer での URL パラメータの使用例を示します。

8.4.1 例 1: URL パラメータを使用して Discoverer Viewer を起動する場合

Discoverer Viewer を起動し、*jchan* として自動的に接続し、「Monthly Analysis」ワークブック内の「January Analysis」ワークシートを開く場合、次の URL を使用します。

```
http://hostname.domain/discoverer/viewer?us=jchan&pw=3829382&db=sales&wb=Monthly+Analysis&ws=January+Analysis
```

8.4.2 例 2: URL パラメータを使用して Discoverer Plus を起動する場合

Discoverer Plus を起動し、*jchan* として「Sales」EUL に自動的に接続し、「Monthly Analysis」ワークブック内の「January Analysis」ワークシートを開いてパラメータ値「East」を入力する場合、次の URL を使用します。

```
http://hostname.domain/discoverer/plus?us=jchan&pw=3829382&db=sales&eul=Sales&wb=Monthly+Analysis&ws=January+Analysis&param_regionparam=East
```

8.4.3 例 3: URL にパスワードを表示しないで Discoverer を起動する場合

エンド・ユーザーに提供した URL にパスワードを表示しないで、Discoverer を起動することができます。通常、パブリック接続ではパスワードを表示しません。

URL にパスワードを表示しないで Discoverer を起動するには、次の操作を行います。

1. 次の操作を行って、パブリック接続の接続キーを見つけます。
 - a. Web ブラウザを起動します。
 - b. 接続キーを探す接続を含む Discoverer 接続ページに移動します。

- c. Discoverer 接続ページの下部にある「XML を表示」リンクを選択します。
接続リストにある各 Discoverer 接続に対して、XML タグのリストが表示されます。
 - d. 接続キーを探す接続を見つけます。
 - e. 接続の key タグの値を確認します。
たとえば、key="cf_m2" の場合、キーの値は cf_m2 です。
2. 次の例を使用して、URL を作成します。

http://myserver.com/discoverer/viewer?cn=<connection key>

ここで、<connection key> は前の手順で見つけた接続キーです（接続キーの詳細は、[8.5 項「Discoverer の汎用 URL 引数」](#)の cn= parameter を参照してください）。

注意：

- Oracle9iAS Configuration Manager を使用してパブリック接続を作成できます（パブリック接続の作成の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Administrator 管理者用ガイド』を参照してください）。

8.5 Discoverer の汎用 URL 引数

この表は、Discoverer Plus および Discoverer Viewer で使用できる URL の汎用引数の定義を示しています。

引数と値	説明	例
con_name=< 接続名 >	追加または更新する接続の名前を指定します。空白でも構いません。	con_name=Weekly+Report
con_desc=< 接続の説明 >	追加または更新する接続の説明を指定します。空白でも構いません。	con_desc=Weekly+performance+reports+by+region
con_db=< データベース >	追加または更新する接続の接続先データベースを指定します。	con_db=Sales
con_us=< ユーザー名 >	追加 / 更新された接続がデータベースに接続するときに使用する、データベースのユーザー名を指定します。	con_us=jchan
con_pw=< パスワード >	追加 / 更新された接続がデータベースに接続するときに使用する、データベースのパスワードを指定します。	con_pw=382939382

引数と値	説明	例
con_eul=<EUL>	追加 / 更新された接続がデータベースに接続するときに使用する、データベースの EUL を指定します。	con_eul=VIDEO
con_lm=<discoverer または applications>	データベースに接続するときに使用するログイン方法を指定します。「discoverer」または「applications」となります。	con_lm=discoverer
con_rs=< 職責 >	追加 / 更新された接続がデータベースに接続するときに使用する、Oracle Applications の職責を指定します (Oracle Applications ログインを行う場合にのみ有効です)。	con_rs=Power+User
con_sg=< セキュリティ・グループ >	追加 / 更新された接続がデータベースに接続するときに使用する、Oracle Applications のセキュリティ・グループを指定します (Oracle Applications ログインを行う場合にのみ有効です)。	con_sg=Marketing
con_nlsl=< ロケール >	追加 / 更新された接続と関連付けるデフォルトのロケールを指定します。	con_nlsl=es_ES 言語はスペイン語で、国はスペインになります。
condel=< 接続キー >	< 接続キー > によって指定された接続を削除します。 接続キーの詳細は、次の「注意 :」を参照してください。	condel=cf_m2
con_key=< 接続キー >	更新する接続を指定します。 接続キーの詳細は、次の「注意 :」を参照してください。	con_key=cf_m2
cn=< 接続キー >	開く接続を指定します (詳細は、「注意 :」を参照してください)。	cn=cf_m2

引数と値	説明	例
newpw1=<新しいパスワード>	変更するデータベースのパスワードを指定します。 注意 ：change-password 操作が実行されると、関連する接続が変更に従って更新されます。「cn」または「con_key」の URL パラメータを使用して、パスワードを変更するデータベースのアカウントを指定できます。	newpw1=3837282
newpw2=<新しいパスワード>	変更するデータベースのパスワードを再度指定します。パスワードの変更操作を行う前に、このパスワードが newpw1 で指定したものと一致している必要があります。	newpw2=25363523

注意：

- 接続キーは、Discoverer 接続を識別するために使用される一意のコードで、Discoverer によって自動的に生成されます。Discoverer 接続キーを確認するには、次の操作を行います。
 - a. Web ブラウザを起動します。
 - b. 接続キーを探す接続を含む Discoverer 接続ページに移動します。
 - c. Discoverer 接続ページの下部にある「XML を表示」リンクを選択します。

接続リストにある各 Discoverer 接続に対して、XML タグのリストが表示されます。

注意：「XML を表示」リンクが表示されない場合は、Discoverer 管理者または Discoverer サービス・マネージャに連絡してください。
 - d. 接続キーを探す接続を見つけます。
 - e. 接続キーを確認するには、key タグの値を探します。

たとえば、key="cf_m2" が key タグの値を示します。

8.6 Discoverer Plus の URL 引数

この表は、Discoverer Plus で使用できる URL 引数の定義を示しています。

引数と値	説明	例
connect=[APPS_SECURE] <hostname_instancename>	Oracle Applications のエンド・ユーザーの場合、保護モードで接続されるように指定できます。ホスト名_インスタンス名には、データベースのホスト名とアプリケーション・サーバーのインスタンスを指定します。	connect=[APPS_SECURE]genledger_payables
connect=<connection string>	提供された接続の詳細を使用して、Discoverer に接続するためのログイン詳細を指定します。この引数を使用すると、エンド・ユーザーに対して「接続情報」ダイアログ・ボックスは省略されます。	ODBC 接続の場合は connect=username/password@demodb または connect=username/password@ODBC:demodb
database=<database name or alias>	Discoverer の起動時に接続するデータベースを指定します。 または、connect= 引数を使用して、データベース、ユーザー名、およびパスワードを 1 つの引数として指定することもできます。	ODBC 接続の場合は database=demodb または database=ODBC:demodb
framedisplaystyle=<separate>	Discoverer のメイン・ウィンドウを、別のフレームとしてブラウザから（たとえば、Discoverer 接続リストから）起動するように指定します。ブラウザ・ウィンドウには Discoverer の画像が含まれているため、Discoverer の使用中は、ブラウザ・ウィンドウを開いたままにしておく必要があります。 注意： スクリーン・リーダーとともに Discoverer Plus をデプロイするには、値を「separate」に設定します。	framedisplaystyle=separate
lookandfeelname=<system or oracle or browser>	ブラウザの外観を指定します。たとえば、ユーザーが Windows の外観を使用して Discoverer Plus を実行できるように指定できます。	lookandfeelname=system

引数と値	説明	例
password=<string>	Discoverer への接続に使用されるユーザー名の認証を行うためのデータベース・パスワードを指定します。 または、connect= 引数を使用して、データベース、ユーザー名、およびパスワードを1つの引数として指定することもできます。	password=37282732
username=<database username>	Discoverer への接続に使用するデータベース・ユーザー名を指定します。 または、connect= 引数を使用して、データベース、ユーザー名、およびパスワードを1つの引数として指定することもできます。	username=video_user
eul=<schema name>	エンド・ユーザーがデフォルトで接続する EUL が含まれているデータベース・スキーマの名前を指定します。この引数を使用しない場合、Discoverer は他の方法を使用してデフォルトの EUL を検出します（たとえば、エンド・ユーザー・オプション設定から）。 注意： EUL 名には、大文字と小文字の区別があります。	eul=VIDEOEUL Discoverer は、VIDEOEUL スキーマで検索した EUL のメタデータを使用します。
locale=<language[_country][_variant]>	エンド・ユーザーが Discoverer を使用するときに表示される言語（オプションとして、国およびバリエーション・コード）を選択します。この引数により、エンド・ユーザーのクライアント・マシンのロケール設定が変更されます。 言語、国およびバリエーション・コードを指定するための Java ネーミング規則。	locale=es_ES 言語はスペイン語で、国はスペインになります。
nlsdateformat=<date format>	特定の地域に対する日付の書式を指定します。値としては、DD-Mon-YY などの SQL 日付書式マスクを入力します。	NLSDateFormat=DD-Mon-YY
nlsdatelanguage=<date language>	エンド・ユーザーが Discoverer を使用するときに表示される曜日と月に対する言語を選択します。	nlsdatelanguage=Spanish

引数と値	説明	例
nlslang=<language>	エンド・ユーザーが Discoverer を使用する ときに表示される言語、地域および キャラクタ・セットを選択します。 言語、地域およびキャラクタ・セットを 指定するための Oracle ネーミング規則 を使用します。	nlslang=Spanish
nlsnumeric_characters= <separator characters>	数値に対する小数点文字およびグルー プ・セパレータ文字を選択します。	nlsnumeric_characters=.,
nlssort=<sort type>	文字ソート・シーケンスを指定します。 nlssort コマンドの詳細は、『Oracle9i Application Server グローバリゼーショ ン・サポート・ガイド』を参照してくだ さい。	nlssort=XSpanish
opendb=<workbook name>	開くワークブックが（スケジュールされ ているものではなく）データベースに保 存されていることを前提として、その名 前を Discoverer に提供します。URL で opendb 引数を 2 度以上使用すると、 Discoverer は最後の引数を使用します。 このコマンドは逆互換性のために含まれ ています。 注意： 「opendb=Video+Sales+Workbook」は 「workbookname=Video+Sales+Workbo ok&workbooksource=Database」と等価 です。 workbookname および workbooksource も参照してください。	opendb=Video+Sales+Workbook Discoverer はワークブックがデータベー スに保存されていると想定して、自動的 にそれを開きます。
opendbid=<unique ID>	開くワークブックの一意な ID を指定す るには、opendb= の代わりに opendbid= を使用します。 ワークブックの一意な ID を探す方法の 詳細は、「 注意： 」を参照してください。	opendbid=JanuarySales

引数と値	説明	例
param_<parameter_name>= <parameter_value>	パラメータが含まれるワークブックに対して、この引数を使用して値を選択します。ワークブックにその名前のパラメータが含まれていない場合、Discoverer はその引数を無視します。パラメータ名の先頭に param_ が付くことに注意してください。	param_regionparam=East regionparam という名前のパラメータに East という値を設定するよう Discoverer に指示します。
responsibility= <responsibility name>	Oracle Applications のエンド・ユーザー（たとえば、Oracle General Ledger）に対して、その職責を指定できます。	responsibility=Manager Discoverer は「職責」ダイアログ・ボックスを省略して、エンド・ユーザーにマネージャの Oracle Applications 職責を割り当てます。
sheet=<worksheetname>	ユーザーがデフォルトで開くワークシートの名前を Discoverer に提供します。URL で Sheet 引数を 2 度以上使用すると、Discoverer は最後の引数を使用します。	sheet=Sales+Detail+Sheet Discoverer は Sales Detail Sheet ワークシートに対する問合せを実行し、結果をエンド・ユーザーに表示します。
sheetid=<unique ID>	開くワークシートの一意な識別子を指定します。	sheetid=Lag&LeadAnalysis
windowheight= <pixel width>	Discoverer アプリケーション・フレームの高さを、ピクセルで指定します。この引数を使用しない場合、Discoverer のデフォルト値を使用します。	windowheight=600 Discoverer フレームの高さは 600 ピクセルとなります。
windowwidth=<pixel width>	Discoverer アプリケーション・フレームの幅をピクセルで指定します。この引数を使用しない場合、Discoverer のデフォルト値を使用します。	windowwidth=800 Discoverer フレームの幅は 800 ピクセルとなります。
workbookname=<workbookname>	ユーザーがデフォルトで開く Discoverer ワークブックの名前を指定します。 注意： このコマンドは workbooksource とともに使用します。たとえば、「workbookname=Video+Sales+Workbook&workbooksource=Database」は「opendb=Video+Sales+Workbook」と等価です。 opendb も参照してください。	workbookname=Video+Sales+Workbook Discoverer が開始し、「Video Sales Workbook」という名前のワークブックが開きます。

引数と値	説明	例
workbooksouce=<Database or Scheduled>	開くワークブックが保存されている場所を指定します。 <ul style="list-style-type: none">■ 「Database」は、ワークブックがデータベースに保存されていることを指定します。■ 「Scheduled」は、ワークブックがスケジュールされたワークブックで、定期的に更新されることを指定します。	workbooksouce=Database

注意：

- Discoverer Viewer 内のワークブックの一意な ID を見つけるには、**key** XML タグを探します。
 - a. Web ブラウザを起動します。
 - b. Discoverer Viewer を実行してワークブックを開きます。
 - c. Discoverer 接続ページの下部にある「**XML を表示**」リンクを選択します。

接続リストにある各 Discoverer 接続に対して、XML タグのリストが表示されます。

注意：「XML を表示」リンクが表示されない場合は、Discoverer 管理者または Discoverer サービス・マネージャに連絡してください。
 - d. ワークブックの一意な ID を見るには、**key** タグ値の値を見つめます。

たとえば、ワークブック・エントリは **key="wb_02"** を持ちます。
- Discoverer Plus 内のワークブックの一意な ID を見つけるには、「ワークブック・プロパティ」タブを探します。
 - a. Web ブラウザを起動します。
 - b. Discoverer Plus を実行してワークブックを開きます。
 - c. 「ファイル」→「ワークブックの管理」→「プロパティ」を選択して、「ワークブック・プロパティ」ダイアログ・ボックスを表示します。
 - d. 一意の ID を見つけるには、ワークブックの識別子を探します。

8.7 Discoverer Viewer の URL 引数

この表は、Discoverer Viewer で使用できる URL 引数の定義を示しています。

引数と値	説明	例
<code>anlsdf=<date format></code>	Oracle Applications のエンド・ユーザーの場合、セッションのデフォルトの日付書式を変更できます。	<code>anlsdf='MM/DD/YY'</code>
<code>anlsdl=<date language></code>	Oracle Applications のエンド・ユーザーの場合、曜日と月名および日付の略式の綴り (AM、PM、AD、BC) を変更できます。	<code>anlsdl=fr</code>
<code>anlsl=<language></code>	Oracle Applications のエンド・ユーザーの場合、セッション言語を変更できます。	<code>anlsl=en-gb</code>
<code>anlsnc=<separator characters></code>	Oracle Applications のエンド・ユーザーの場合、グループ・セパレータおよび小数点として使用するデフォルトの文字を変更できます。 小数点区切りを指定してから、続けてグループ・セパレータを指定する必要があります。	<code>anlsnc=',.'</code>
<code>anlss=<sortname or binary></code>	Oracle Applications のエンド・ユーザーの場合、ORDER BY 問合せおよび文字列比較時のセッション照合順番を変更できます。 値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 言語ソート順序の名前 ■ バイナリ・ソートを指定する場合には <code>binary</code> 	<code>anlss=binary</code>
<code>aow=<true or false></code>	(ワークシートの自動オープン) - ワークブックを開くときに、デフォルトのワークシートを開くかどうかを、 <code>true</code> または <code>false</code> の値で指定します。 注意: 開くワークシートを指定するには、 <code>ws=</code> および <code>wsk=</code> を使用することもできます。	<code>aow=true</code>

引数と値	説明	例
arq=<true or false>	(問合せの自動実行) - ワークシートを開いたときに、ワークシートの問合せを自動的に実行するかどうかを、true または false の値で指定します。	arq=true
cp_height=<number_of_pixels>	グラフの高さをピクセルで指定します。	cp_height=200
cp_show_legend=<true or false>	グラフのタイトルを表示するかどうかを指定します。	cp_show_legend=true
cp_width=<number_of_pixels>	グラフの幅をピクセルで指定します。	cp_width=300
cs=[APPS_SECURE] <hostname_instancename>	Oracle Applications のエンド・ユーザーの場合、保護モードで接続されるように指定できます。ホスト名_インスタンス名には、データベースのホスト名とアプリケーション・サーバーのインスタンスを指定します。	cs=[APPS_SECURE]genledger_payables
db=<databasename>	接続するデータベースを指定します。	db=video
eul=<eulname>	接続する際の EUL の名前を指定します。このパラメータを指定するのは、デフォルトの EUL を変更する場合のみです。 注意 : EUL 名には、大文字と小文字の区別があります。	eul=myEUL

引数と値	説明	例
fm=<exportformat>	次のエクスポート形式のいずれかを指定します。 xml xls (Microsoft Excel) htm (HTML) txt (テキスト) csv (カンマ区切りの値) prn (書式化されたテキスト) dcs (Express) dif (データ交換形式) slk (記号リンク) wks (Lotus 1-2-3) sql (Structured Query Language : 構造化問合せ言語) 注意 : このパラメータを使用してデータをエクスポートするには、問合せを実行する必要があります。	fm=xls
lm=<applications or discoverer>	ログイン・メソッドを指定します。 「applications」と設定すると、Oracle Applications ユーザーでログインします。 「discoverer」と設定すると、Discoverer ユーザーでログインします。 このパラメータを指定しない場合、デフォルトのログイン方法 (ui_config.xml 構成ファイルに指定された方法) が使用されます。	lm=applications
nlsl=<language>	使用する言語の言語コードを指定します。	nlsl=en-gb
pg=<page_number>	表示するワークシートのページを指定します。	pg=4
pi_<pageitemname>=<pageitemvalue>	ページ・アイテムの名前と、そのページ・アイテムに設定する値を指定します。	pi_Region=West 「Region」 ページ・アイテムに「West」を設定します。

引数と値	説明	例
pw=<password>	指定したデータベースに接続する際の、指定したユーザー名に対応するパスワードを指定します。	pw=tiger
qp_<parameter_name>=<parameter_value>	問合せパラメータの名前と、そのパラメータに設定する値を指定します。	qp_City=Denver
qpd=<number_of_seconds>	<p>問合せの進行状況ページが表示（または再表示）される前の遅延を秒数で指定します。この引数を使用すると、作成したアプリケーションに Discoverer Servlet を使用してデータを返す場合に、問合せの進行状況ページを処理するコードを記述する必要はありません。</p> <p>注意： query_progress_delay 引数を使用すると、この値をグローバルに（中間層で）設定することもできます（詳細は、「A.4 項「configuration.xml の構成設定のリスト」」を参照してください）。</p>	<p>qpd=60</p> <p>上の例では、問合せが実行されてから 60 秒後に問合せの進行状況ページが表示されます。問合せの進行状況ページは、問合せ結果が出力されるまで、60 秒ごとに再表示されます。</p>
rd=<number_of_seconds>	ブラウザが元の URL にリダイレクトされるまでの遅延を秒数で指定します。この引数を使用して、エクスポート操作中のブラウザのタイムアウトを防止します。この引数は、fm 引数の有効な値が指定された場合にのみ適用されることに注意してください。	<p>rd=90</p> <p>上の例では、エクスポート操作が完了するまで、ブラウザが 90 秒ごとに元の URL にリダイレクトされます。</p>
rs=<responsibility>	接続する際の Oracle Applications 職責を指定します。	Rs=Manager
sg=<securitygroup>	接続する際の Oracle Applications セキュリティ・グループを指定します。	Sg=securityGroup
tsc_d!<index>=<direction>	<index> で識別されるアイテムのソート順序を指定します。<順序> は、「lh」（低から高）または「hl」（高から低）のいずれかになります。	tsc_d!namesindex=lh
tsc_g!<index>=<type>	<index> によって識別されるアイテムに適用されるソートがグループ・ソートまたは標準のソートであるかを指定します。<type> は「normal」または「group」のいずれかになります。	tsc_g!namesindex=normal
	<p>注意： グループ・ソートの詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。</p>	

引数と値	説明	例
tsc_h!<index>=<true or false>	<index> によって識別されたアイテムを隠す（ワークシートには表示されない）または表示するかを指定します。値は「true」（非表示）または「false」（表示）のいずれかです。	tsc_h!namesindex=true
tsc_i!<index>=<item_key>	ソートされるアイテムを指定します。<index> は、適用されるソート順を参照しています。「0」の<index> が最初に適用され、次に「1」の<index> が続きます。	tsc_i!namesindex=0
tss_s!<index>=<direction>,<type>,<hidden>,<item_key>	tsc_d!、tsc_g!、tsc_h!、tsc_i! パラメータを任意に組み合わせた 1 つの URL 引数を使用して、アイテムのソートを定義します。	tss_s!namesindex=lh,normal,true,0
us=<connectString>	ユーザー名およびデータベースの他に、オプションの接続情報を指定します。接続文字列では、次の構文を使用します。 <username>[:<responsibility>[:<securityGroup>]][/<password>]@<database>	us=scott/tiger@disco
us=<username>	使用するユーザー名を指定します。	us=video5
wb=<workbookname>	開くワークブックの名前（または ID）を指定します。	wb=My+Workbook
wbd=<workbookdate>	スケジュールされたワークブックを開くときに、スケジュールされたワークブックが実行された日付を指定します。	wbd=31-OCT-00
wbk=<unique ID>	開くワークブックの一意な識別子を指定します。	wbk=JanuarySales
wbr=<unique ID>	wbk= パラメータで指定したワークブックがスケジュールされたワークブックである場合は、wbr= を使用して、ワークブックの一意な実行識別子を指定する必要があります。	wbr=SWB001
wbt=<workbooktime>	スケジュールされたワークブックを開くときに、スケジュールされたワークブックが実行された時間を指定します。wb パラメータを使用してスケジュール・ワークブックの ID を指定した場合には、このパラメータを指定する必要はありません。	wbt=4%3a00+PM 4:00 PM を指定します。

Discoverer Viewer の URL 引数

引数と値	説明	例
ws=<worksheetname>	開くワークシートを指定します。	ws=My+Worksheet
wsk=<unique ID>	開くワークシートの一意な識別子を指定します。	wsk=Lag&LeadAnalysis

Oracle9iAS Web Cache との Discoverer の 使用

9.1 Oracle9iAS Web Cache との Discoverer の使用

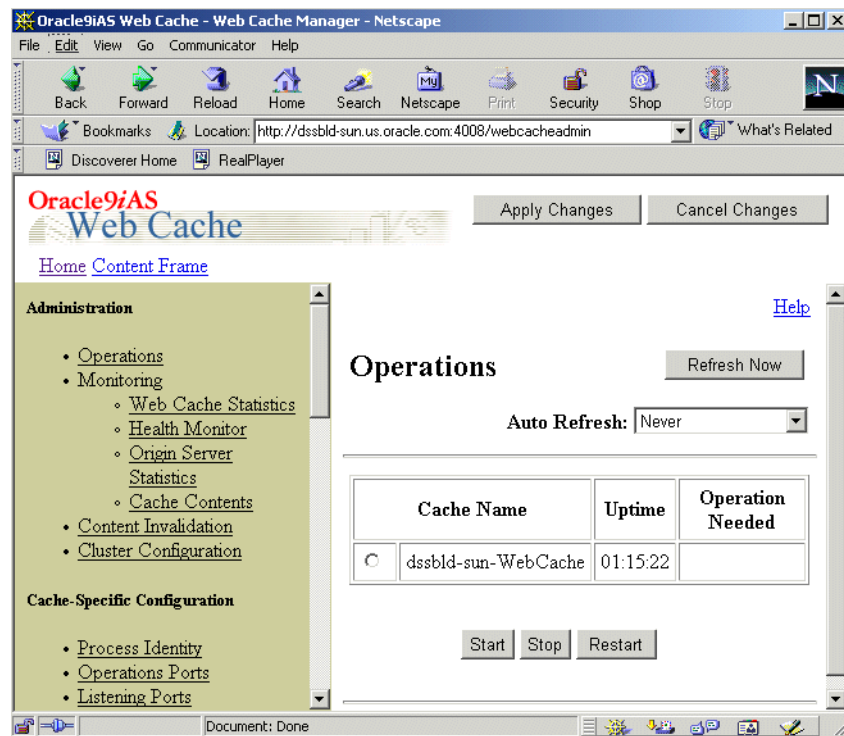
この章では、Discoverer Viewer のパフォーマンスを拡張する Oracle9iAS Web Cache の使用方法について説明します。説明する項目は、次のとおりです。

- 9.2 項「Oracle9iAS Web Cache について」
- 9.3 項「Oracle9iAS Web Cache の利点」
- 9.4 項「Oracle9iAS Web Cache の動作について」
- 9.5 項「Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合」
- 9.6 項「Oracle9iAS Web Cache との Discoverer Viewer の使用方法」
- 9.7 項「Discoverer Viewer 用に Oracle9iAS Web Cache を使用可能にする方法」
- 9.8 項「「問合せの再実行」リンクを表示し、「環境設定」と「表示オプション」リンクを隠す方法」
- 9.9 項「Discoverer Viewer のスティッキーなワークシート動作を使用不可能にする方法」
- 9.10 項「Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合の注意」

9.2 Oracle9iAS Web Cache について

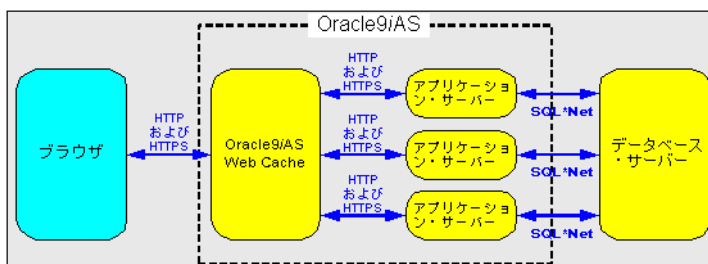
Oracle9iAS Web Cache は、Web サイトのパフォーマンス、拡張性、可用性を向上させる、Oracle9i Application Server のコンポーネントです。頻繁にアクセスされるページをメモリに保存することにより、Oracle9iAS Web Cache が中間層サーバーおよびデータベースにあるページへの処理リクエストを繰り返す必要がなくなります。Oracle9iAS Web Cache は、Oracle9iAS Web Cache Administration ページを使用して管理します。

図 9-1 Oracle9iAS Web Cache Administration ページ



Oracle9iAS Web Cache は、Web ブラウザからリクエストされたコンテンツをキャッシュして提供するため、アプリケーション Web サーバーの前に置かれます。Web ブラウザが Web サイトにアクセスする際、Web ブラウザは、HTTP または HTTPS プロトコル・リクエストを Oracle9iAS Web Cache に送信します。そして、Oracle9iAS Web Cache は、アプリケーション Web サーバーに対する仮想サーバーとして動作します。リクエストされたコンテンツが変更されると、Oracle9iAS Web Cache がアプリケーション Web サーバーから新しいコンテンツを取得します。アプリケーション Web サーバーは、Oracle データベースからコンテンツを取得する場合があります。

図 9-2 Oracle9iAS Web Cache の概要



Oracle9iAS Web Cache の詳細は、『Oracle9iAS Web Cache 管理および配置ガイド』を参照してください。

注意：

- Discoverer をデプロイするとき、通常、Discoverer コンポーネントを Oracle9iAS ファームに追加し、Oracle9iAS Web Cache をプロキシ・サーバーとして使用します（詳細は、5.1 項「Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール」を参照してください）。

9.3 Oracle9iAS Web Cache の利点

Oracle9iAS Web Cache の使用には、次の利点があります。

- パフォーマンスの向上

安価なハードウェアで実行しても、Oracle9iAS Web Cache を使用して Web サイトのスループットを大きく向上させることができます。さらに、Oracle9iAS Web Cache は、メモリにドキュメントを保存したり、GZIP エンコーディング法をサポートするブラウザにドキュメントの圧縮したバージョンを供給して、ブラウザのリクエストに対する応答時間を大幅に短縮できます。

- 拡張性の向上

パラレルでないスループットに加え、Oracle9iAS Web Cache は、多数の同時ブラウザ接続を維持できます。これにより、負荷がピークに達している間も、アプリケーション Web サーバーのエラーが少なくなります。

- 高可用性の提供

Oracle9iAS Web Cache は、コンテンツによる（レイヤー 4～7）ロード・バランシングおよびフォールオーバー検出をサポートしています。これらの機能により、最も可用性が高く、クラスタ内で最高のパフォーマンスを持つ Web サーバーに、キャッシュにないドキュメント（「キャッシュ・ミス」と呼ばれます）がダイレクトされます。さらに、

これらの機能により、アプリケーション Web サーバーへの負荷が増加した場合にパフォーマンスの保証とサージ保護が提供されます。

- コストの節約

通信量のスパイクおよび DoS 攻撃によって引き起こされる問題を克服するために必要なアプリケーション Web サーバーが少なくすみます。結果として、Oracle9iAS Web Cache を使用することにより、各リクエストに対する Web サイトのコストを軽減できる簡単で安価な方法が提供されます。

- ネットワーク通信量の軽減

ほとんどのリクエストが Oracle9iAS Web Cache で解決されるため、アプリケーション Web サーバーへの通信量を軽減できます。また、キャッシュにより、アプリケーション Web サーバーだけでなく、コンピュータにあるバックエンド・データベースへの通信量も軽減されます。

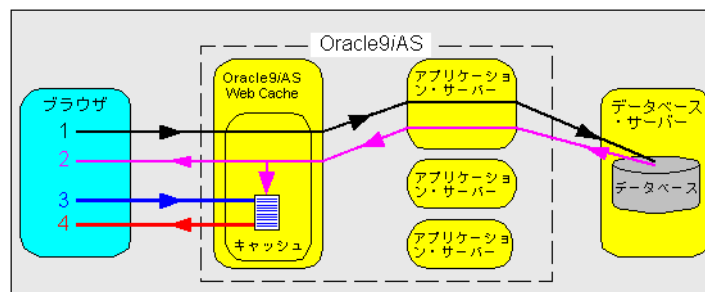
Oracle9iAS Web Cache 使用の利点の詳細は、『Oracle9iAS Web Cache 管理および配置ガイド』を参照してください。

9.4 Oracle9iAS Web Cache の動作について

Oracle9iAS Web Cache は、どのドキュメントをキャッシュするかを決定するキャッシュ可用性ルールを使用します。キャッシュ可用性ルールは、特定の URL 内で指定されたドキュメントをキャッシュするか、キャッシュしないかを決定します。キャッシュ可用性ルールは、正規表現を使用して定義されます (Oracle の正規表現の実装の詳細は、『Oracle9iAS Web Cache 管理および配置ガイド』を参照してください)。

キャッシュ可用性ルールに含まれる URL 内で指定されるドキュメントは、ブラウザがそのドキュメントをリクエストするまで実際にはキャッシュされません。

図 9-3 URL およびドキュメントのリクエスト処理



主要要素

1. ブラウザが特定の URL に対して初めてリクエストを行うと、Oracle9iAS Web Cache は必要なドキュメントがキャッシュされていない（「キャッシュ・ミス」と呼ばれます）ことを検出します。Oracle9iAS Web Cache がリクエストをアプリケーション Web サーバーに転送し、リクエストがデータベースに送信されます。
2. データベースはアプリケーション Web サーバーにデータを返し、ドキュメントとその URL が Oracle9iAS Web Cache に転送されます。URL がキャッシュする URL の一つとして指定されている場合は、Oracle9iAS Web Cache により、以後リクエストがあった場合のためにドキュメントがキャッシュされます。
3. ブラウザが特定の URL に対して次にリクエストを行うと、Oracle9iAS Web Cache は必要なドキュメントがキャッシュされている（「キャッシュ・ヒット」と呼ばれます）ことを検出します。
4. Oracle9iAS Web Cache は、キャッシュからブラウザにドキュメントを供給します。

9.5 Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合

Oracle9iAS リリース 2 で、Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する、次の場合に Web サイトのパフォーマンス、拡張性、可用性が最適化されます。

- パブリック・ワークブックのみを使用する Web サイト
- データが比較的静的な Web サイト
- Discoverer マネージャやワークブックの作成者が Oracle9iAS Web Cache にアクセスし、ワークブックの変更後にキャッシュをリフレッシュできる場合

Oracle9iAS Web Cache は、データへのアクセス制御が比較的重要でない場合（たとえば、ワークブックにアクセスする複数のユーザーによって同じパブリック接続が使用されるような場合）に、Discoverer Viewer のパフォーマンスを最適化するために使用するのが理想的です。Oracle9iAS Web Cache は、データへのアクセス制御が問題となるような制限された環境（たとえば、独自のワークブックにアクセスする各ユーザーによってプライベート接続が使用されるような場合）にはあまり適していません。制限された環境で Oracle9iAS Web Cache を使用する場合、悪意を持つユーザーが他のユーザー用にキャッシュされたアクセス・ページにアクセスする可能性があることに注意してください。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) で、Discoverer Viewer および Oracle9iAS Web Cache をともに使用する場合は、次のような条件が必要となります。

- Discoverer Viewer から次のリンクを削除します。
 - ユーザーが Discoverer Viewer の動作を構成できる「環境設定」リンク
 - ユーザーが Discoverer Viewer の外観を変更できる「表示オプション」リンク

- スティッキーなワークシート機能の不安定な動作（スティッキーなワークシート機能の詳細は、「[9.9 項「Discoverer Viewer のスティッキーなワークシート動作を使用不可能にする方法」](#)」を参照してください）。
- 基礎となるデータベース表の変更後に、キャッシュされたデータが消去されない可能性があるという、データの同期化問題。

注意：

- Oracle9iAS Discoverer セキュリティの詳細は、「[13.1 項「Discoverer でのデータ・セキュリティ維持」](#)」を参照してください。

9.6 Oracle9iAS Web Cache との Discoverer Viewer の使用方法

Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用するには、次の構成タスクを実行する必要があります。

- configuration.xml ファイルを編集して、Discoverer Viewer 用に Oracle9iAS Web Cache をオンにする必要があります（詳細は、[9.7 項「Discoverer Viewer 用に Oracle9iAS Web Cache を使用可能にする方法」](#)を参照してください）。
- 次の操作を行うために、ui_config.xml を編集する必要があります。
 - 「問合せの再実行」リンクの表示、「環境設定」リンクを隠す、「表示オプション」リンクを隠す（詳細は、[9.8 項「「問合せの再実行」リンクを表示し、「環境設定」と「表示オプション」リンクを隠す方法」](#)を参照してください）。
 - Discoverer Viewer のスティッキーなワークシート動作をオフにする（詳細は、[9.9 項「Discoverer Viewer のスティッキーなワークシート動作を使用不可能にする方法」](#)を参照してください）。

Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用するように指定するには、次のメンテナンス作業を実行します。

- ワークブック・データが変更されるため、ファイルをキャッシュから削除する（詳細は、[9.10.1 項「キャッシュから Discoverer Viewer ドキュメントを削除する方法」](#)を参照してください）。
- 複数のブラウザを複数の言語で配布する場合は、各ユーザーのブラウザに正しい言語とレンダリングされたページが配布されるかをチェックする（詳細は、[9.10.2 項「正しい言語がデプロイされているかどうかをチェックする方法」](#)を参照してください）。
- Oracle9iAS Web Cache は Discoverer Viewer の認証メカニズムを使用するようにあらかじめ構成されていますが、次の操作を行うことをお勧めします。
 - 同じ URL を持つ複数のドキュメントがキャッシュされるように指定する（詳細は、[9.10.3.1 項「同じ URL を持つ複数のドキュメントがキャッシュされるように指定する方法」](#)を参照してください）。

- キャッシング・ルールに関連したセッション / パーソナライズド属性を作成する
(詳細は、[9.10.3.2 項「キャッシング・ルールに関連するセッション / パーソナライズド属性を作成する方法」](#)を参照してください)。

注意：

- Oracle9iAS Web Cache のキャッシュ可用性ルールは、Discoverer Viewer 用にあらかじめ構成されており、Oracle9iAS Web Cache とともに自動的にインストールされます。

9.7 Discoverer Viewer 用に Oracle9iAS Web Cache を使用可能にする方法

Oracle9iAS Web Cache は Oracle9iAS とともにインストールされますが、デフォルトでは使用不可能になっています。

Oracle9iAS Web Cache を Discoverer Viewer 用に使用可能にするには、次の操作を行います。

1. XML エディタまたはテキスト・エディタで configuration.xml ファイルを開きます (構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。
2. Discoverer 構成要素の「webcache」属性の値を「false」から「true」に変更します (webcache="true")。

変更後、たとえば、構成要素は次のようになります。

```
<disco: configuration
xmlns:disco="http://oracle.com/xmlns/discoverer/configuration"
xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:schemaLocation="http://oracle.com/xmlns/discoverer/configuration
configuration.xsd" locale="en" webcache="true" rmi="true">
```

3. configuration.xml ファイルを保存し、テキスト・エディタを閉じます。
4. OC4J をシャットダウンして再起動します (詳細は、『Oracle9iAS Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください)。

これで、Oracle9iAS Web Cache が使用可能になりました。

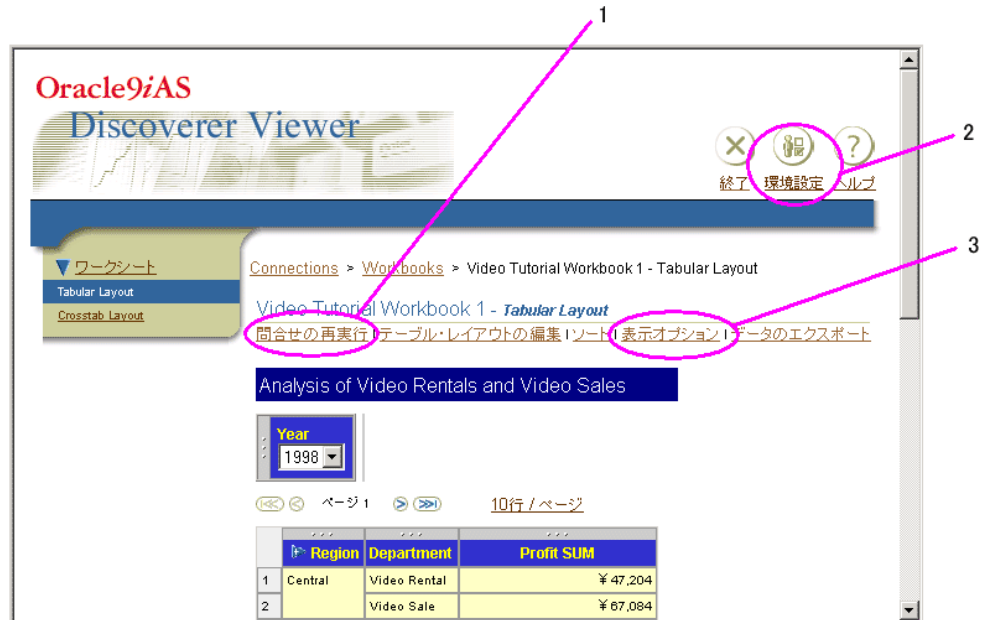
9.8 「問合せの再実行」リンクを表示し、「環境設定」と「表示オプション」リンクを隠す方法

Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する際、次の操作を行って Discoverer Viewer ユーザー・インタフェースを変更する必要があります。

- 「問合せの再実行」リンクを表示する

- 「環境設定」リンクを隠す
- 「表示オプション」リンクを隠す

図 9-4 Discoverer Viewer の「問合せの再実行」、「環境設定」、「表示オプション」リンク



図の主要要素は、次のとおりです。

1. 「問合せの再実行」リンク
2. 「環境設定」リンク
3. 「表示オプション」リンク

Discoverer Viewer のエンド・ユーザーが、Oracle9iAS Web Cache の動作の妨げになるユーザー・インタフェースにアクセスできなくするために、これらのリンクを削除します。

注意：

- データを頻繁に交換する場合は、ユーザーがキャッシュされたデータを使用せずに新しいサーバー・リクエストを実行できるように、「問合せの再実行」リンクを表示しておくことをお勧めします。
- 「環境設定」および「表示オプション」の値が変更された場合、Oracle9iAS Web Cache はそれらの変更を認識しないので、ワークブックの動作や外観が一貫しくなくなります。

そのため、「環境設定」および「表示オプション」リンクは隠しておくことをお勧めします。

リンクの表示を切り替えるには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタで `ui_config.xml` ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. ファイル内の `<appearance>` タグを見つけます。
3. `<appearance>` タグの値を次のように変更します。

- `display_rerun_query_link` タグの値を「true」に変更する
- `display_preferences_link` タグの値を「false」に変更する
- `display_presentation_options_link` タグの値を「false」に変更する

タグを変更した後、次のようになります。

```
.  
.  
<option id="display_rerun_query_link" state="true"/>  
<option id="display_preferences_link" state="false"/>  
<option id="display_presentation_options_link" state="false"/>
```

4. `ui_config` ファイルを保存してテキスト・エディタを閉じます。

エンド・ユーザーが次に Discoverer Viewer を実行する際には、ユーザー・インタフェースがこの変更に従って更新されます。

9.9 Discoverer Viewer のスティッキーなワークシート動作を使用不可能にする方法

Discoverer Viewer には、単一セッション内で訪れたワークシート間で、ワークシートのドリルとピボット操作を保持する機能があります。スティッキーなワークシート動作と呼ばれるこの機能は、Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合はサポートされません。そのため、この動作を使用不可能にする必要があります。

Discoverer Viewer のスティッキーなワークシート動作を使用不可能にするには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタで `ui_config.xml` ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. ファイル内の `<behavior>` タグを見つけます。
3. `sticky_worksheets` タグの値を「true」から「false」に変更します。

タグの変更後、要素は次のようになります。

```

.
.
<option id="sticky_worksheets" state="false"/>
.
.

```

4. ui_config ファイルを保存してテキスト・エディタを閉じます。

エンド・ユーザーが次に Discoverer Viewer を実行する際、スティッキーなワークシート動作は使用不可能になります。

9.10 Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合は注意

この項では、Oracle9iAS Discoverer とともに Oracle9iAS Web Cache を使用する場合は、操作方法などについて説明します。

9.10.1 キャッシュから Discoverer Viewer ドキュメントを削除する方法

次のような場合には、キャッシュされた Discoverer Viewer ドキュメントを削除する必要があります。

- ワークブックのデータが変更された
- 複数のワークブックで共有されている計算が変更された

キャッシュから Discoverer Viewer ドキュメントを削除するには、次の操作を行います。

1. Oracle9iAS Web Cache Manager が稼動していない場合は、これを起動してログインします。

ユーザー名およびパスワードが不明な場合は、Oracle9iAS システム管理者に問い合わせてください。

2. 「Content Invalidation」リンクを選択して、Content Invalidation ページを表示します。
3. 「Advanced Invalidation」セクションで、次の操作を行います。
 - a. 「URL Path Prefix」フィールドに「http://discoverer/」と入力します。
 - b. 「URL Regular expression」フィールドに適切な正規表現を入力します。

入力する正規表現は、キャッシュから削除する Discoverer Viewer ドキュメントによって異なります。次の表に例を示します。

URL の正規表現	説明
viewer	すべてのキャッシュされた Discoverer ドキュメントを削除します。
viewer.+(wbk=X)	X はワークブックの名前です。X というワークブック名を持つ、キャッシュされた Discoverer ドキュメントを削除します。
viewer.+(eul=X)	X は EUL の名前です。X という EUL 名を持つ、キャッシュされた Discoverer ドキュメントを削除します。
viewer.+(ac=X)	X はアカウントの名前です。X というアカウント名を持つ、キャッシュされた Discoverer ドキュメントを削除します。
viewer.+(nls=en-us)	米国英語のキャッシュされたドキュメントをすべて削除します。

4. 「Submit」 ボタンをクリックして、キャッシュから選択したドキュメントを消去します。

9.10.2 正しい言語がデプロイされているかどうかをチェックする方法

複数のブラウザを複数の言語で使用している場合は、各ユーザーのブラウザに、正しい言語とレンダリングされたページが配布されることが重要です。

同じ URL を基にしてキャッシュされたページの数、ブラウザおよび言語の数と一致することを確認するために、Discoverer Viewer キャッシュ可用性ルール の Accept-Language および User-Agent の 2 つの Oracle9iAS Web Cache オプションが自動的に選択されます。

これらのオプションが選択されていることを確認するには、次の操作を行います。

1. Oracle9iAS Web Cache Manager が稼動していない場合は、これを起動してログインします。
注意： ユーザー名およびパスワードが不明な場合は、Oracle9iAS システム管理者に問い合わせてください。
2. 「Cacheability Rules」 リンクを選択します。
3. 確認するキャッシュ可用性ルールのラジオ・ボタンを選択します。
4. 「Edit」 ボタンをクリックして、「Edit Cacheability Rule」 ページを表示します。
5. 「Multiple Documents with the Same Selector by Other Headers」 セクションで、次のチェック・ボックスが選択されていることを確認します。
 - Accept-Language

- User-Agent

6. 「キャンセル」 ボタンをクリックして、「Edit Cacheability Rule」 ページを閉じます。

9.10.3 許可のないユーザーによる、キャッシュされたページへのアクセスを防止する方法

Oracle9iAS Web Cache で、異なる Discoverer Viewer ユーザーに対して HTML ページのキャッシュを行う場合があります。許可のないユーザーがキャッシュされたページにアクセスすることを防止するため、Oracle9iAS Web Cache では Discoverer Viewer の認証メカニズムを使用するようにあらかじめ構成されています。

ただし、Oracle9iAS Web Cache を手動で構成する必要がある場合は、次の 2 つの手順を実行します。

- 同じ URL を持つ複数のドキュメントがキャッシュされるように指定する（詳細は、[9.10.3.1 項「同じ URL を持つ複数のドキュメントがキャッシュされるように指定する方法」](#)を参照してください）。
- キャッシング・ルールに関連したセッション / パーソナライズド属性を作成する（詳細は、[9.10.3.2 項「キャッシング・ルールに関連するセッション / パーソナライズド属性を作成する方法」](#)を参照してください）。

9.10.3.1 同じ URL を持つ複数のドキュメントがキャッシュされるように指定する方法

同じ URL を持つ複数のドキュメントがキャッシュされるように指定するには、次の操作を行います。

1. Oracle9iAS Web Cache Manager が稼動していない場合は、これを起動してログインします。
ユーザー名およびパスワードが不明な場合は、Oracle9iAS システム管理者に問い合わせてください。
2. 「Multiple Documents with Same Selector by Cookies」リンクを選択して、「Multiple Documents with the Same Selector by Cookies」 ページを表示します。
3. 「Add」 ボタンをクリックして、「Edit/Create Multiple Documents with the Same Selector by Cookies Rule」 ページを表示します。
4. 「Enter Cookie name:」 フィールドに Discoverer Viewer Cookie 名として「oracle-disco-account」と入力します。
5. 「Also cache documents whose requests do not contain this Cookie?」 という質問に対しては、「Yes」 ラジオ・ボタンを選択します。
6. 「Submit」 ボタンをクリックします。

Discoverer Viewer の Cookie をセレクト (キャッシュ可用性ルール) に関連付ける必要があります。

7. 「Multiple Documents with the Same Selector by Cookies」ページの新しいエントリの横にあるラジオ・ボタンを選択します。
8. 「Change Selector Association...」ボタンをクリックして、「Change Policy-Selector Association」ページを表示します。
9. セレクト (キャッシュ可用性ルール) のリストから、すべての Discoverer セレクトを選択します。
10. 「Make Association」ボタンをクリックします。
これで、Discoverer Viewer の Cookie に関連付けたキャッシュ可用性ルールが、「Multiple Documents with the Same Selector by Cookies」ページに表示されます。
11. 「Apply changes」ボタンをクリックして、変更内容を保存します。

9.10.3.2 キャッシング・ルールに関連するセッション/パーソナライズド属性を作成する方法

キャッシング・ルールに関連するセッション / パーソナライズド属性を作成するには、次の操作を行います。

1. Oracle9iAS Web Cache Manager が稼動していない場合は、これを起動してログインします。
ユーザー名およびパスワードが不明な場合は、Oracle9iAS システム管理者に問い合わせてください。
2. 「Session/Personalized Attribute Definitions」リンクを選択して、「Session/Personalized Attribute Definitions」ページを表示します。
3. 「Add」ボタンをクリックして、「Create Session/Personalized Attribute Definition」ページを表示します。
4. 「This Site Only」ラジオ・ボタンを選択します。
5. 「Session/Attribute」フィールドに「ViewerCookie」と入力します。
6. 「Cookie Name」フィールドに「oracle-disco-account」と入力します。
7. 「Comment」フィールドに「Oracle Discoverer Viewer authentication related Cookie」と入力します。
8. 「Submit」ボタンをクリックして、「Create Session/Personalized Attribute Definition」ページを閉じます。
9. 「Apply changes」ボタンをクリックして、変更内容を保存します。
10. 「Session/Personalized Attribute Related Caching Rules」リンクを選択します。

11. 「Create」 ボタン（1 つまたは複数のルールが存在する場合は「Add」 ボタン）をクリックして、「Add Session/Personalized Attribute Related Caching Rule」 ページを表示します。
12. 「Add Session/Personalized Attribute Related Caching Rule」 ページで、次のようにオプションを選択します。
 - a. 「Please select a session/attribute:」 ドロップ・ダウン・リストで ViewerCookie を選択します。
 - b. 「Cache documents whose requests contain this session/attribute?」 という質問に対して、「Yes」 ラジオ・ボタンを選択します。
 - c. 「Cache documents whose requests do not contain this session/attribute?」 という質問に対して、「Yes」 ラジオ・ボタンを選択します。
 - d. 「Can the document whose request doesn't contain this attribute be derived from the document whose request does contain this attribute by using the default value of the attribute?」 という質問に対して、「Yes」 ラジオ・ボタンを選択します。
13. 「Submit」 ボタンをクリックして、「Add Session/Personalized Attribute Related Caching Rule」 ページを閉じます。

「Session/Personalized Attribute Related Caching Rules」 ページに、作成したルールが表示されます。次に、このルールに URL を関連付ける必要があります。
14. 「Session/Personalized Attribute Related Caching Rules」 ページで、新しいエントリの横にあるラジオ・ボタンを選択します。
15. 「Change Selector Association...」 ボタンをクリックして、「Change Policy-Selector Association」 ページを表示します。
16. セレクタ（キャッシュ可用性ルール）のリストから、すべての Discoverer セレクタを選択します。
17. 「Make Association」 ボタンをクリックします。

これで、「Session/Personalized Attribute Related Caching Rules」 ページに、Discoverer Viewer の Cookie に関連付けたキャッシュ可用性ルールが表示されます。
18. 「Apply changes」 ボタンをクリックして、変更内容を保存します。
19. 次の操作を行って、Oracle9iAS Web Cache を再起動します。
 - a. 「Operations」 リンクをクリックして Operations ページを表示します。
 - b. 再起動するキャッシュの名前の横にあるラジオ・ボタンを選択します。
 - c. 「Restart」 ボタンをクリックします。

9.10.4 Discoverer Viewer 用にあらかじめ構成されている Oracle9iAS Web Cache のキャッシュ可用性ルール・リスト

Oracle9iAS Web Cache のキャッシュ可用性ルールの多くは、Discoverer Viewer 用にあらかじめ構成されています。これらのキャッシュ可用性ルールは、Oracle9iAS Web Cache によって次の順番で処理されます。

- 問合せを実行するページをキャッシュしない
- スケジュールされたワークブック・ページ（およびそこから導出されるすべてのワークブック）をキャッシュしない
- Discoverer Plus ページをキャッシュしない
- キャッシュされた問合せパラメータに含まれている、問合せページをキャッシュしない
- キャッシュされたドリル指定に含まれている、問合せページをキャッシュしない
- RMI コマンドをキャッシュしない
- Viewer Servlet によって提供されるすべてのページ（上に挙げたキャッシュ可用性ルールによって、キャッシュしないように指定されなかったページ）をキャッシュする

各キャッシュ可用性ルールは、正規表現を導出します。Oracle9iAS Web Cache により、文字列に対する各表現が評価され、特定の URL がその文字列を含んでいるかどうかテストされます。URL に文字列が含まれていない場合は、Oracle9iAS Web Cache によって、キャッシュ可用性ルールで指定されている操作（ページをキャッシュするか、キャッシュしない）が実行されます。URL に文字列が含まれていない場合は、Oracle9iAS Web Cache により、次のキャッシュ可用性ルールにある表現が評価されます。

注意：

- キャッシュ可用性ルールは、Oracle9iAS のインストール時に自動的に構成されます。次のキャッシュ可用性ルールは、参照するために含まれています。オラクル社から薦められない限り、Web Cache 構成は変更しないでください。

9.10.4.1 キャッシュ可用性ルール：問合せを実行するページをキャッシュしない

データが頻繁に変更される場合、Discoverer Viewer ユーザーは最新のデータを取得するために問合せを再実行しようとします。しかし、Discoverer Viewer の問合せを実行するページがキャッシュされていると、ユーザーが、追加または変更されたデータを表示できません。

このキャッシュ可用性ルールにより、「問合せの再実行」リンクをクリックするとキャッシュされたデータは使用されず、新しいサーバー・リクエストの実行が強制されます。

キャッシュ可用性ルール - discoverer¥viewer.+(qv=[0-9])+

ルールの詳細	値
方法	GET、問合せ文字列を含む GET
POST ボディ表現	
キャッシュする / キャッシュしない	キャッシュしない
ESI 出力権限	はい
圧縮	Netscape 以外のブラウザでオン
コメント	これは、問合せを実行するページをキャッシュしません。

9.10.4.2 キャッシュ可用性ルール：スケジュールされたワークブック・ページ（およびそれから導出されるすべてのワークブック）をキャッシュしない

Discoverer のスケジュールされたワークブックには、ワークブックが処理される際、変更の可能性のあるデータが含まれます。スケジュールされたワークブックがキャッシュされると、ユーザーは追加または変更されたデータを表示できません。

このキャッシュ可用性ルールにより、スケジュールされたワークブックがキャッシュされません。

キャッシュ可用性ルール - discoverer¥/viewer.+in=swb

ルールの詳細	値
方法	GET、問合せ文字列を含む GET
POST ボディ表現	
キャッシュする / キャッシュしない	キャッシュしない
ESI 出力権限	はい
圧縮	Netscape 以外のブラウザでオン
コメント	これは、スケジュールされたワークブック・ページまたはそれから導出されたワークブックをキャッシュしません。

9.10.4.3 キャッシュ可用性ルール : Discoverer Plus ページをキャッシュしない

このキャッシュ可用性ルールによって、Discoverer Plus アプレットのキャッシュが行われません。Oracle9iAS Web Cache は、Discoverer Plus とともに使用できません。

キャッシュ可用性ルール - discoverer¥/viewer. .release=true)

ルールの詳細	値
方法	GET、問合せ文字列を含む GET
POST ボディ表現	
キャッシュする / キャッシュしない	キャッシュしない
ESI 出力権限	はい
圧縮	Netscape 以外のブラウザでオン
コメント	これは、Discoverer Plus パラメータを含む URL を持つすべてのページをキャッシュしません。

9.10.4.4 キャッシュ可用性ルール : キャッシュされた問合せパラメータに含まれている問合せページをキャッシュしない

このキャッシュ可用性ルールによって、サーブレット側でキャッシュされた問合せパラメータを含む、問合せページはキャッシュされません。

パラメータを含む URL が、許可されている最大長を超える場合があります。この場合、パラメータとその値は、現在のセッションのためだけに Discoverer Servlet に保存されます。現在のセッションが終了すると、パラメータとその値は破棄されます。保存されたパラメータを参照しているキャッシュ・ページは無効になります。

キャッシュ可用性ルール - discoverer¥/viewer.+cqp=[0-9]+)

ルールの詳細	値
方法	GET、問合せ文字列を含む GET
POST ボディ表現	
キャッシュする / キャッシュしない	キャッシュしない
ESI 出力権限	はい
圧縮	Netscape 以外のブラウザでオン
コメント	Discoverer : キャッシュされた問合せパラメータに含まれている、問合せページをキャッシュしない

9.10.4.5 キャッシュ可用性ルール：キャッシュされたドリル指定を含む問合せページをキャッシュしない

このキャッシュ可用性ルールにより、キャッシュされたドリル指定を含む問合せページがキャッシュされません。

ドリル指定を含む URL が許可されている最大長を超える場合があります。この場合、ドリル指定は現在のセッションのためだけに Discoverer Servlet に保存されます。現在のセッションが終了すると、ドリル指定は破棄されます。保存されたキャッシュ指定を参照しているキャッシュ・ページは無効になります。

キャッシュ可用性ルール - discoverer¥/viewer.+cds=[0-9]+ y

9.10.4.6 キャッシュ可用性ルール：RMI コマンドをキャッシュしない

このキャッシュ可用性ルールによって、Discoverer Plus アプレットによって発行された RMI コマンドのキャッシュを防止します。Oracle9iAS Web Cache は、Discoverer Plus とともに使用できません。

キャッシュ可用性ルール - discoverer¥/viewer.+rmicmd=.

ルールの詳細	値
方法	GET、問合せ文字列を含む GET
POST ボディ表現	
キャッシュする / キャッシュしない	キャッシュしない
ESI 出力権限	はい
圧縮	Netscape 以外のブラウザでオン
コメント	Discoverer : RMI コマンドをキャッシュしない

9.10.4.7 キャッシュ可用性ルール：Viewer Servlet によって供給されたすべてのページをキャッシュする

このキャッシュ可用性ルールによって、Discoverer Viewer ページ（上に挙げたキャッシュ可用性ルールによって、キャッシュしないように指定されていないページ）がすべてキャッシュされます。

キャッシュ可用性ルール - discoverer¥/viewer

ルールの詳細	値
方法	GET、問合せ文字列を含む GET
POST ボディ表現	

ルールの詳細	値
キャッシュする / キャッシュしない	キャッシュする
期限切れポリシー	デフォルト：期限切れなし
Cookies による同じセレクトアを持つ複数のドキュメント*	Cookie「oracle-disco-account」の値を基にしたキャッシュも、リクエストがこの Cookie を含んでいないドキュメントをキャッシュします。
その他のヘッダーによる同じセレクトアを持つ複数のドキュメント*	Accept-Language、User-Agent
セッション / パーソナライズド属性に関連するキャッシュ・ルール	セッション / 属性「ViewerCookie」の場合 リクエストがこのセッションを含むキャッシュ・ドキュメント、およびこのセッションを含まないキャッシュ・ドキュメント
単純なパーソナライズ	いいえ
HTTP エラー・キャッシング	
ESI 出力権限	はい
圧縮	Netscape 以外のブラウザでオン
コメント	Viewer Servlet で供給されるすべてのページをキャッシュします。

* このオプションの詳細は、[9.10.3 項「許可のないユーザーによる、キャッシュされたページへのアクセスを防止する方法」](#)を参照してください。

10

Discoverer Viewer のカスタマイズ

10.1 Discoverer Viewer のカスタマイズ

この章では、エンド・ユーザーに対して Discoverer Viewer の外観をカスタマイズする方法について説明します。たとえば、Discoverer の Oracle ロゴを独自のロゴに置き換えたり、テキストの色やスタイルを変更することができます。

注意： Discoverer Viewer エンド・ユーザーは、独自の表示オプションを設定して、セッションごとにユーザー・インタフェースを構成することもできます（詳細は、「[表示オプション](#)」を参照してください）。

この章では、次の項目について説明します。

- 10.2 項「Discoverer Viewer のカスタマイズとは」
- 10.3 項「Discoverer Viewer をカスタマイズする方法」
- 10.4 項「Discoverer Viewer CSS ファイルの更新」
- 10.5 項「Discoverer Viewer の XML ファイルの更新」
- 10.6 項「表示オプション」
- 10.7 項「表示テンプレートについて」
- 10.8 項「ブラウザ外観のサンプル・ファイル (blaf.htm)」
- 10.9 項「デフォルトの Discoverer Viewer の外観を変更する方法」
- 10.10 項「デフォルトの Discoverer Viewer のロゴを変更する方法」
- 10.11 項「Discoverer Viewer ユーザー・インタフェース・オプションを削除する方法」
- 10.12 項「表示テンプレートの作成方法」
- 10.13 項「JavaScript が無効な状態で Discoverer Viewer を実行する方法」

10.2 Discoverer Viewer のカスタマイズとは

Discoverer Viewer をカスタマイズして、Discoverer Viewer エンド・ユーザーに提供するデフォルトの外観を変更したり、事前定義した表示テンプレートを提供したりできます。たとえば、次の操作を行うことができます。

- Discoverer のフォント・スタイルを変更して、企業インターネットの外観に合わせる（詳細は、「[デフォルトの Discoverer Viewer の外観を変更する方法](#)」を参照してください）。
- Discoverer のデフォルト・ロゴを独自のロゴやグラフィックに変更する（詳細は、「[デフォルトの Discoverer Viewer のロゴを変更する方法](#)」を参照してください）。
- Discoverer Viewer にユーザー・インタフェースのコンポーネント（ヘッダーおよびフッター、ドリル・アイコン、行番号など）を追加および削除する表示テンプレートを

提供する（詳細は、「[表示オプション](#)」および「[表示テンプレートの作成方法](#)」を参照してください）。

- JavaScript が無効な状態で Discoverer Viewer を実行する（詳細は、「[JavaScript が無効な状態で Discoverer Viewer を実行する方法](#)」を参照してください）。

ユーザー・インタフェースの構成に使用する値を変更して、Discoverer Viewer をカスタマイズします。これらの値は、次の業界標準のファイル・タイプで保存されています。

- カスケーディング・スタイルシート（CSS）
- eXtensible Markup Language（XML）

注意：

- Discoverer Viewer をカスタマイズした場合、その内容を Discoverer のバージョン全体に移行してください。
- また、URL をブックマークに追加して、カスタマイズした Discoverer Viewer の外観をエンド・ユーザーに提供することもできます。URL には、元の Discoverer セッションで設定した表示オプションが含まれます。
- XML ファイルの詳細は、W3C World Wide Web Consortium の Web サイト（<http://www.w3.org/>）を参照してください。
- 企業によっては、JavaScript が有効な状態でブラウザを動作することが許可されていない場合があります。この場合、JavaScript を無効にすることもできます。JavaScript を無効にするには、次の 2 つの方法があります。
 - ブラウザごと：JavaScript を無効にする方法の詳細は、ブラウザのヘルプを参照してください。
 - 全ユーザーに対して（グローバル）：詳細は、「[JavaScript が無効な状態で Discoverer Viewer を実行する方法](#)」を参照してください。

10.3 Discoverer Viewer をカスタマイズする方法

Discoverer Viewer をカスタマイズするには、次のいずれかを使用して Discoverer Web サーバーのテキスト・ファイルを編集する必要があります。

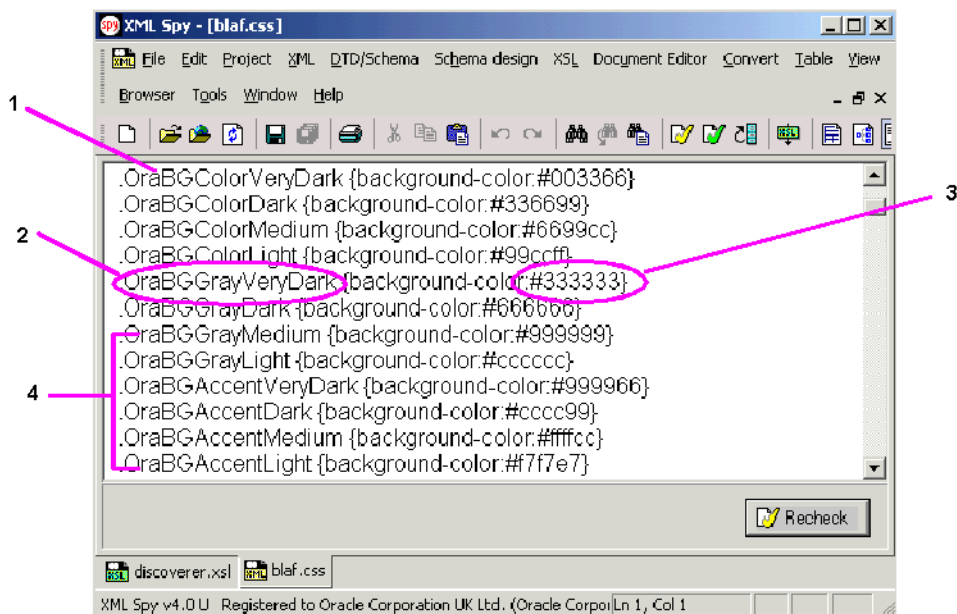
- 標準テキスト・エディタ
- 専用 XML エディタ（Altova 社の XML Spy など）

注意：XML エディタを使用した方が、XML ファイルでの作業や修正をより簡単に実行できます。

10.4 Discoverer Viewer CSS ファイルの更新

Discoverer Viewer の CSS ファイルには、カスタマイズする Discoverer Viewer ユーザー・インタフェースの各コンポーネント用のタグが含まれています。次の図は、blaf.css ファイルの例を示しています。

図 10-1 XML エディタに表示された blaf.css ファイルの例



図の主要要素は、次のとおりです。

1. 専用 XML エディタで開いた blaf.css ファイル
2. Discoverer Viewer の背景色の 1 つを設定するタグ（`OraBGGreyVeryDark`）
3. RGB コードで色を指定するタグの値（`#333333`）
4. 他の Discoverer Viewer スタイル用タグ

Discoverer Viewer をカスタマイズするには、タグの値を変更します。

注意

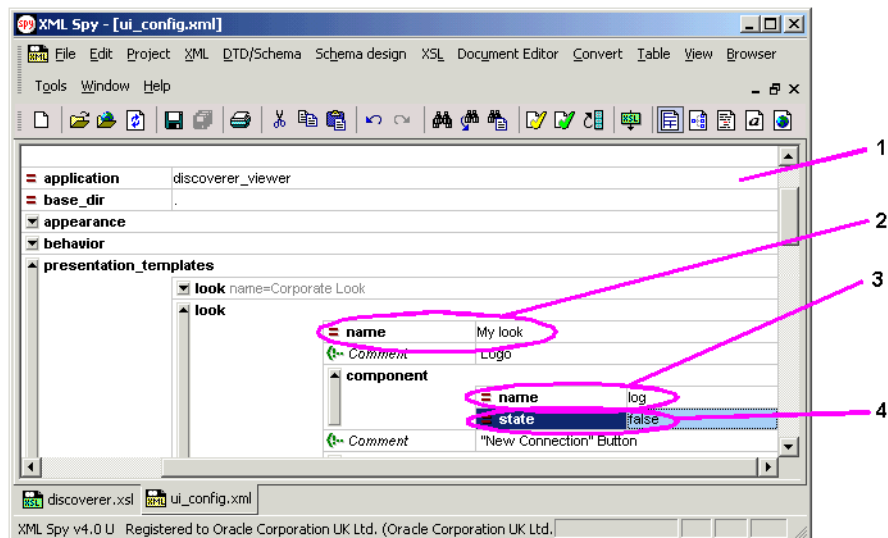
- RGB カラー・コードの詳細は、標準の HTML リファレンス・マニュアルを参照してください。

- 安定した結果を得るには、フォント・スタイルをカスタマイズする際に、異なるブラウザ間で一定の色（セーフ・カラー）を使用します。
- Discoverer Viewer のカスケード・スタイルシートの使用と、HTML ファイルの外観の例は、「ブラウザ外観のサンプル・ファイル (blaf.htm)」を参照してください。

10.5 Discoverer Viewer の XML ファイルの更新

Discoverer Viewer の XML ファイルには、カスタマイズ可能な Discoverer Viewer ユーザー・インタフェースの各コンポーネント用タグが含まれています（詳細は、「表示オプション」を参照してください）。次の図は、ui_config.xml ファイルの例を示しています。

図 10-2 XML エディタに表示された ui_config.xml ファイルの例



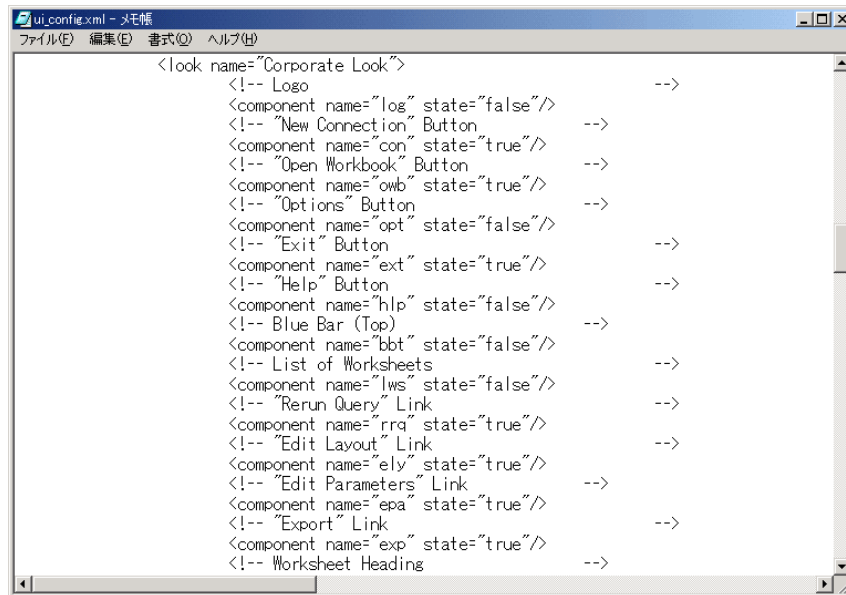
図の主要要素は、次のとおりです。

1. 専用 XML エディタで開いた ui_config.xml ファイル
2. 「My Look」という名前の、「Corporate Look」表示テンプレートのコピー
3. 「log」という名前の、Discoverer Viewer ログをいつ表示するかを決定するタグ
4. 「log」タグの値 (false) は、Discoverer Viewer ログまたはカスタマイズした企業ロゴが表示されないことを意味します。このタグを「true」に変更するには、値フィールドをダブルクリックしてドロップ・ダウン・リストから「true」を選択します。

専用 XML エディタを使用する場合は、展開または縮小可能な構造化された XML タグが表示され、ドロップダウン・リストを使用して値を選択できます。

標準のテキスト・エディタを使用して XML ファイルを編集する場合、タグは書式設定のないテキストのみの形式で表示されます。

図 10-3 標準のテキスト・エディタに表示された ui_config.xml ファイル



タグの値を更新するには、タグの値を新しい値に置き換えます。たとえば、ユーザー・インタフェースのコンポーネントを隠すには、タグの値を「true」から「false」に変更します。

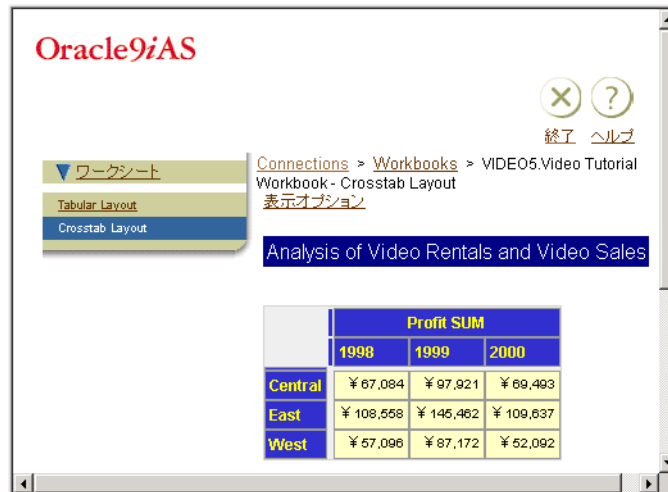
注意： ui_config.xml ファイルには、編集の際に役立つコメントやタグ・ラベルが追加されます。コメントは、次のタグで囲まれています。

```
<!-- Comments -->
```

10.6 表示オプション

表示オプションは、ヘッダー、ページ領域、フッターなどの Discoverer Viewer ユーザー・インタフェースの領域を定義します。たとえば、ワークシート領域内で、Discoverer Viewer エンド・ユーザーに対してワークシートのヘッダーやドリル・アイコンを表示しないように定義できます。

図 10-4 表示オプションを使用した Discoverer Viewer のカスタマイズ



上の図では、Discoverer のロゴ、「新規接続」ボタン、「ワークブックを開く」ボタン、「環境設定」ボタン、ページのフッター、およびエクスポート・オプションを削除して、Discoverer Viewer がカスタマイズされています。

表示オプションを表示テンプレートに保存して、Discoverer のエンド・ユーザーに提供できます（詳細は、10.7 項「表示テンプレートについて」を参照してください）。

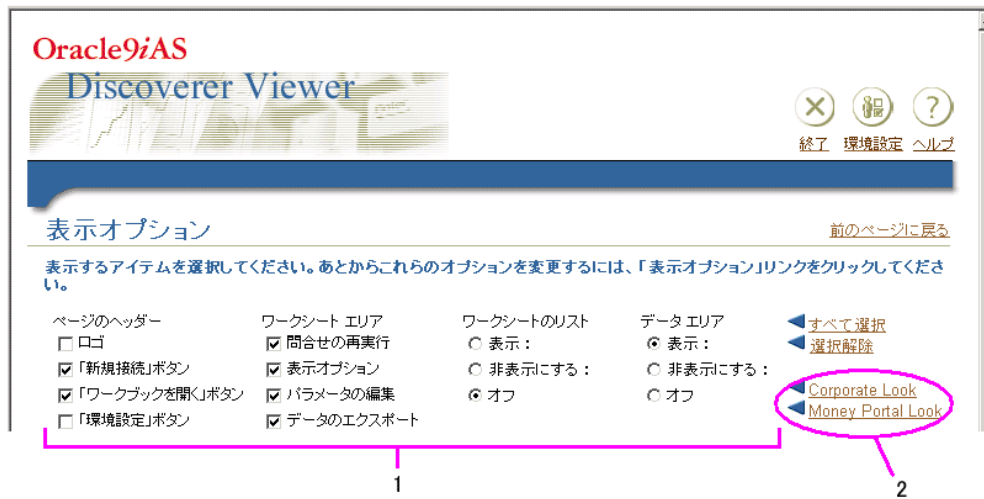
注意：また、ui_config.xml ファイルを編集して、Discoverer の UI コンポーネントを削除することもできます（詳細は、10.11 項「Discoverer Viewer ユーザー・インタフェース・オプションを削除する方法」を参照してください）。

10.7 表示テンプレートについて

表示テンプレートとは、事前定義された表示オプションのセットです。これを使用して、Discoverer Viewer エンド・ユーザーは Discoverer Viewer UI のカスタマイズを簡単に行うことができます。

注意：Discoverer Viewer のエンド・ユーザーは、Discoverer Viewer の「表示オプション」ページを使用して、セッションごとに独自の表示オプションを設定することもできます。

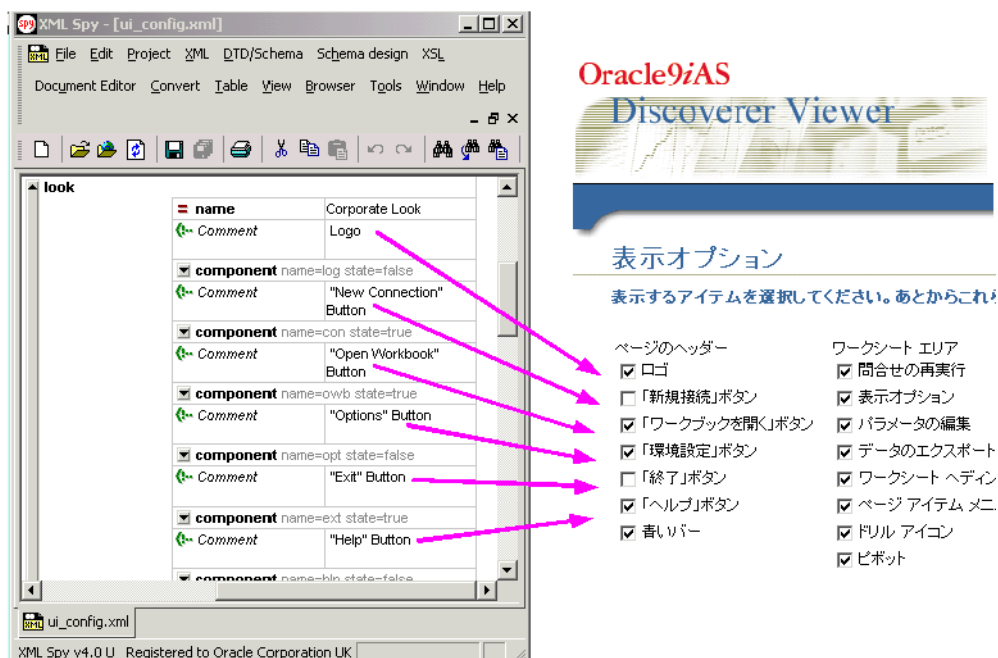
図 10-5 Discoverer Viewer の「表示オプション」ページ



図の主要要素は、次のとおりです。

1. 表示する Discoverer Viewer コンポーネントを決定する表示オプション。たとえば、「List Of Worksheets」と「Page Header Logo」をオフにします。
2. 事前定義された表示オプションを適用する表示テンプレート。この例では、「Corporate Look」と「Money Portal Look」の2つの表示テンプレートが Discoverer Viewer のエンド・ユーザーに提供されています。「Money Portal Look」表示オプションを Discoverer Viewer に適用するには、「**Money Portal Look**」オプションをクリックします。表示オプションが、ui_config.xml ファイルに保存されている値で更新されます。

図 10-6 ui_config.xml ファイルと「表示オプション」ページ



上の図では、表示オプションの状態 (true または false) により、ユーザー・インタフェースのコンポーネントを表示するかどうか指定されています。これらのオプションは、「表示オプション」ページにあるチェック・ボックスで表されます。表示テンプレートの作成方法の詳細は、「表示テンプレートの作成方法」を参照してください。

注意：また、ui_config.xml ファイルを編集して、Discoverer の UI コンポーネントをグローバルに削除することもできます (詳細は、10.11 項「Discoverer Viewer ユーザー・インタフェース・オプションを削除する方法」を参照してください)。

10.8 ブラウザ外観のサンプル・ファイル (blaf.htm)

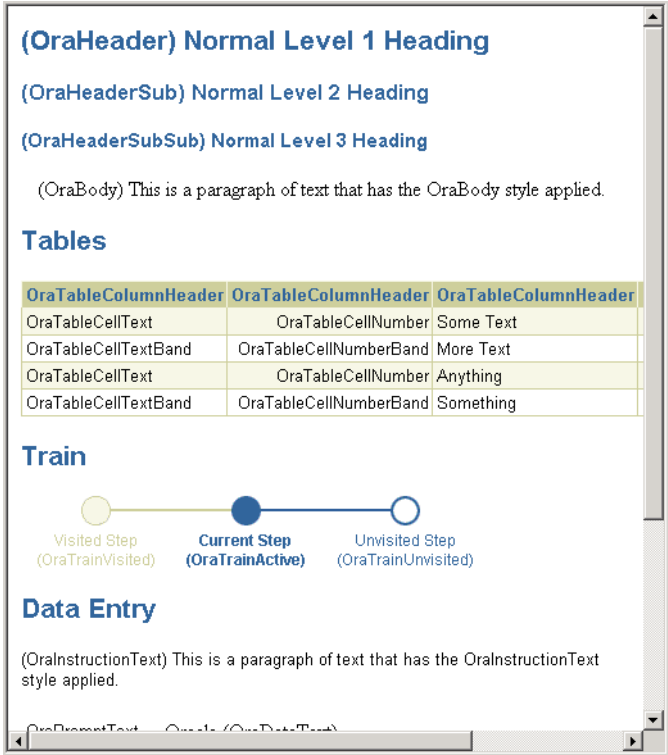
Discoverer Viewer の外観をカスタマイズする際に、Discoverer とともにインストールされるブラウザ外観のサンプル・ファイル (blaf.htm) を使用すると便利です。blaf.htm ファイルには、Discoverer Viewer カスケーディング・スタイルシート (blaf.css) で定義されている各表示タグの現在の外観設定が表示されます。

注意：構成ファイルの場所の詳細は、A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください。

blaf.css 内の表示タグを更新すると、その内容が blaf.htm にすぐ反映されます。blaf.htm を使用して、変更が必要なブラウザの外観タグを見つけることができます。

下の例では、括弧内または「Tables」セクションにあるタグ名が、blaf.css で変更する表示タグになります。

図 10-7 Discoverer Viewer のサンプル HTML ファイル (blaf.htm)



10.9 デフォルトの Discoverer Viewer の外観を変更する方法

デフォルトの Discoverer Viewer の外観を変更してカスタマイズし、エンド・ユーザーに提供することができます。たとえば、UI の背景色やフォントを変更できます。

デフォルトの Discoverer Viewer の外観を変更するには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタまたは XML エディタで blaf.css ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。

blaf.css ファイル内の任意のタグ値を更新できます。

2. 必要に応じて、blaf.css ファイル内のタグ値を更新します。

たとえば、段落のスタイルを黒から青に変更するには、`.OraBody{background-color:#000000}` タグを `.OraBody{background-color:#0000FF}` に変更します。

ヒント: blaf.css で変更するタグは、blaf.htm を使用して見つけることができます（詳細は、「[ブラウザ外観のサンプル・ファイル \(blaf.htm\)](#)」を参照してください）。

3. blaf.css ファイルを保存します。

ヒント: blaf.css で変更したタグは、blaf.htm を使用してプレビューできます（詳細は、「[ブラウザ外観のサンプル・ファイル \(blaf.htm\)](#)」を参照してください）。

4. Discoverer Viewer を実行してワークブックを開きます。

ヒント: 既存の Discoverer Viewer セッションが稼働中の場合は、ブラウザをリフレッシュして Discoverer Viewer を更新すると、変更した外観が適用されます。

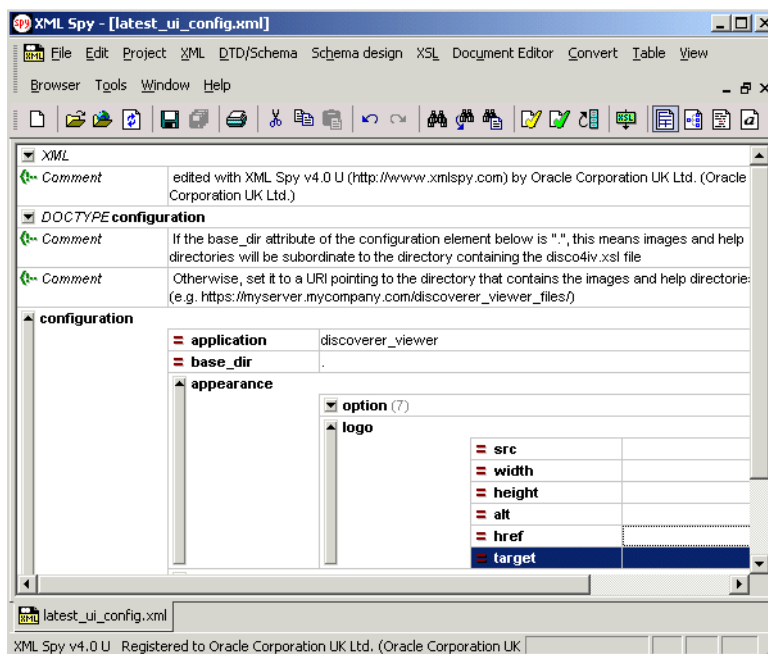
10.10 デフォルトの Discoverer Viewer のロゴを変更する方法

デフォルトの Discoverer Viewer のロゴを、独自のロゴやグラフィックで置き換えることができます。たとえば、Discoverer Viewer によって表示されるロゴを変更できます。

デフォルトの Discoverer Viewer のロゴを変更するには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタまたは XML エディタを使用して、ui_config.xml ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. ui_config.xml ファイルの「configuration¥appearance」セクションで、logo タグを探します。

図 10-8 ui_config.xml ファイルの表示テンプレート領域



3. 必要に応じて、logo タグ属性を更新します。

ロゴを挿入するには、「src」属性値フィールドにグラフィックの URL を挿入します。たとえば、デフォルトの Oracle ロゴを、`$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BI_Forms/applications/discoverer/web/common/xsl/my_logo.gif` に保存されているロゴで置き換える場合、ロゴ・ファイルの URL は「common/xsl/my_logo.gif」（相対パス）または「`http://www.server.com:777/discoverer/common/xsl/my_logo.gif`」（絶対パス）となります。

4. ui_config.xml ファイルを保存します。
5. Discoverer Viewer を実行してワークブックを開きます。

注意：既存の Discoverer Viewer セッションが実行中の場合は、ブラウザをリフレッシュして Discoverer Viewer を更新します。

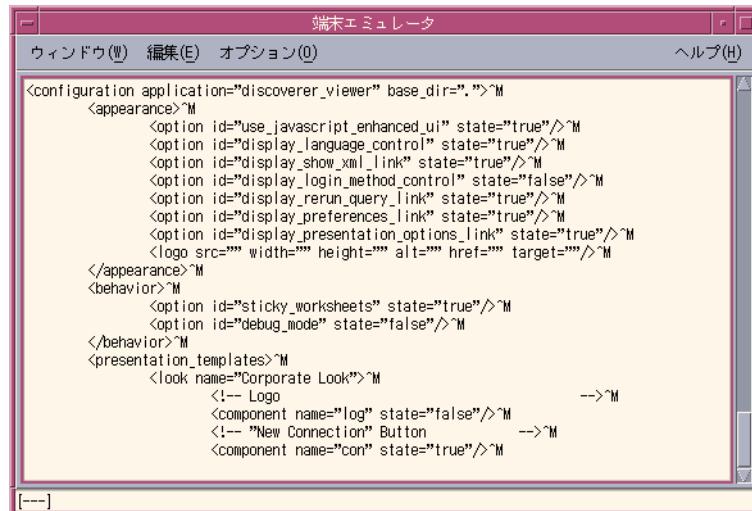
指定したロゴまたはグラフィックが、Discoverer Viewer に表示されます。

10.11 Discoverer Viewer ユーザー・インタフェース・オプションを削除する方法

独自のユーザー・インタフェース・オプション（問合せの再実行または表示オプション）を使用しないで、Discoverer Viewer の基本インタフェースをデプロイする場合、表示するオプションを変更できます。たとえば、エンド・ユーザーが、表示されている Discoverer Viewer の UI オプションを変更できないように、「表示オプション」リンクを削除できます。

Discoverer Viewer オプションを削除するには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタまたは XML エディタを使用して、`ui_config.xml` ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. `ui_config.xml` ファイルの「`configuration¥appearance`」セクションを探します。



3. 必要に応じて、「`configuration¥appearance`」タグ属性を更新します。

例

- 「問合せの再実行」リンクを隠すには、`display_rerun_query_link` 属性の値を「`false`」に変更します。
- 「表示オプション」リンクを隠すには、`display_presentation_options_link` 属性の値を「`false`」に変更します。

4. `ui_config.xml` ファイルを保存します。
5. Discoverer Viewer を実行してワークブックを開きます。

注意：既存の Discoverer Viewer セッションが実行中の場合は、ブラウザをリフレッシュして Discoverer Viewer を更新します。

指定したロゴまたはグラフィックが、Discoverer Viewer に表示されます。

注意：Discoverer Viewer のエンド・ユーザーは、表示オプションを使用して、セッションごとに Discoverer UI コンポーネントを削除することもできます（詳細は、[10.6 項「表示オプション」](#)を参照してください）。

10.12 表示テンプレートの作成方法

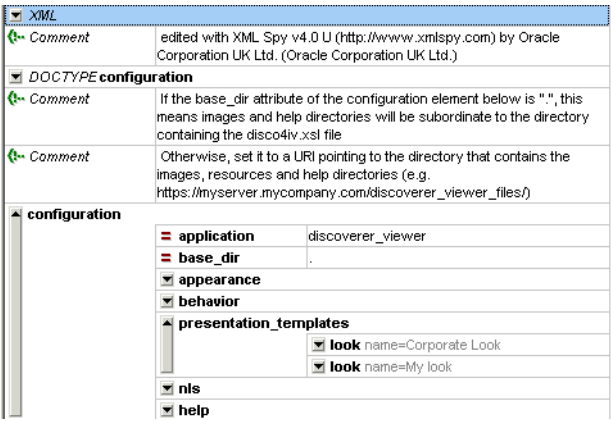
事前定義された表示オプションを使用してエンド・ユーザーに Discoverer Viewer の構成を許可する場合は、表示テンプレートを作成します。表示オプションおよび表示テンプレートの詳細は、「[表示オプション](#)」および「[表示テンプレートについて](#)」を参照してください。

ui_config.xml ファイルに含まれている「Corporate Look」テンプレートをコピーして貼り付け、必要に応じて編集すると、表示テンプレートを最も簡単に作成できます。

表示テンプレートを作成するには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタまたは XML エディタを使用して、ui_config.xml ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. ui_config.xml ファイルの「configuration」セクションで、「Corporate Look」表示テンプレートを探します。

図 10-9 ui_config.xml ファイルの表示テンプレート領域



3. 「Corporate Look」表示テンプレートを選択します。

4. 「Corporate Look」表示テンプレートをカットして、`ui_config.xml` ファイルの「Corporate Look」表示テンプレートのすぐ後に貼り付けます。

これで、「Corporate Look」という 2 つの表示テンプレートがファイル内に存在することになります。

注意：標準のテキスト・エディタを使用している場合は、`<look name="Corporate Look">` タグと、それに続く最初の `</look>` タグの間にあるテキストをすべてコピーしてください。例

```
<look name="Corporate Look">
<!-- Logo-->
<component name="log" state="false"/>
etc.
.
.
</look>
```

5. 2 番目に表示されている「Corporate Look」（コピーした方）のテンプレート名を変更します（ここで指定した名前はユーザーに表示されます）。たとえば、`<look name="Corporate Look">` を `<look name="Money Portal look">` に変更します。
6. 必要に応じて、新しく名前を変更した表示テンプレートのコンポーネント値を「true」または「false」に変更します。新しい表示テンプレートの下にあるタグは、すべて更新できます。

例

- Discoverer Viewer のロゴを表示するには、`log` 値を「true」に設定します。
- ユーザー・インタフェースから「新規接続」ボタンを削除するには、`con` 値を「false」に設定します。

注意：`ui_config.xml` ファイル内のタグを識別するために、各タグには、そのタグが Discoverer Viewer ユーザー・インタフェースのどの部分に関連しているかを示すコメント・ラベルが付いています。

7. `ui_config.xml` ファイルを保存します。
8. Discoverer を実行している Web サーバーを再起動します。

Web サーバーを再起動すると、カスタマイズされたファイルの最新バージョンがキャッシュに保存されます。

注意：`configuration.xml` ファイルで `stylesheet_pool` の「maximum」値がゼロに設定されている場合は、この手順を省略してください。「maximum」値がゼロに設定されている場合はページがキャッシュされないので、変更はすぐに適用されます。

選択した表示オプションを使用して Discoverer Viewer が更新されます。

注意：

- Discoverer Viewer のエンド・ユーザーは、次の操作を行って新しい表示オプションを選択できます。
 - a. Discoverer Viewer を実行してワークブックを開きます。
 - b. 「表示オプション」をクリックして、「表示オプション」ページを表示します。

使用できる表示テンプレートが「選択解除」オプションの下にあるページの右側に表示されます（図 10-5 「Discoverer Viewer の「表示オプション」ページ」を参照してください）。
 - c. ページの右側で、使用する外観の表示テンプレート名をクリックします。
 - d. 「適用」をクリックします。

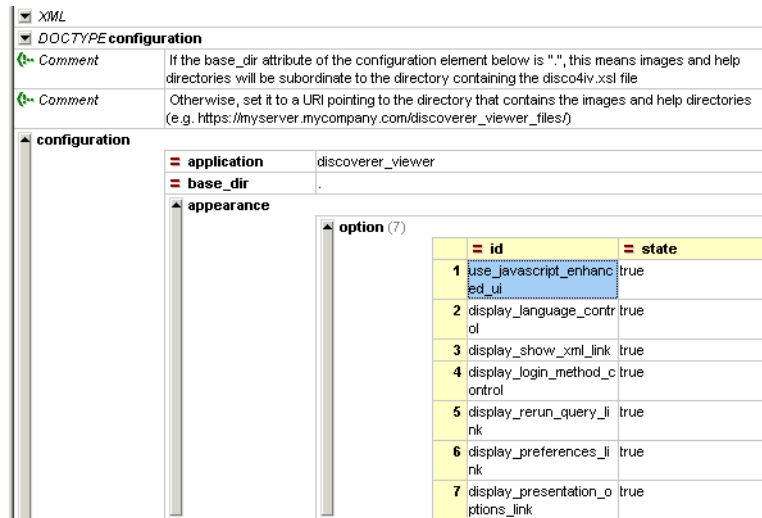
10.13 JavaScript が無効な状態で Discoverer Viewer を実行する方法

Web セキュリティを向上させるため、企業によっては JavaScript を無効にした純粋な HTML モードで Discoverer Viewer を実行することが強制されます。これは、JavaScript コードを使用して、表示した HTML を変更したり、データを操作したりできないことを意味します。JavaScript 拡張ユーザー・インタフェースの詳細は、[4.4 項「UNIX でスタンドアロンの Oracle9iAS Discoverer コンポーネントを停止する方法」](#)を参照してください。

JavaScript を無効にして Discoverer Viewer を実行するには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタまたは XML エディタを使用して、ui_config.xml ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. configuration.appearance.option.use_javascript_enhanced_ui タグを探します。

図 10-10 ui_config.xml ファイル内の use_javascript_enhanced_ui タグ



3. `use_javascript_enhanced_ui` タグの値を「true」から「false」に変更します。
4. `ui_config.xml` ファイルを保存します。
5. Discoverer を実行している Web サーバーを再起動します。

Web サーバーを再起動すると、カスタマイズされたファイルの最新バージョンがキャッシュに保存されます。

注意： `configuration.xml` ファイルで `stylesheet_pool` の「maximum」値がゼロに設定されている場合は、この手順を省略してください。「maximum」値がゼロに設定されている場合はページがキャッシュされないので、変更はすぐに適用されます。

Oracle9iAS Portal との Discoverer の使用

11.1 Oracle9iAS Portal との Discoverer の使用

この章では、Oracle9iAS Portal とともに Oracle9iAS Discoverer を使用方法について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 11.2 項「Oracle9iAS Portal について」
- 11.3 項「Oracle9iAS Portal との Oracle9iAS Discoverer の使用方法」
- 11.4 項「Oracle9iAS Portal との Discoverer Portlet Provider の登録方法」
- 11.5 項「Discoverer Portlet Provider の編集方法」
- 11.6 項「Oracle9iAS Discoverer のデフォルトのパフォーマンス設定の変更」

11.2 Oracle9iAS Portal について

Oracle9iAS Portal は Oracle9iAS のコンポーネントの一部で、技術的知識のないビジネス・ユーザーがポータルを作成できるようにします。ポータルとは、すべての企業アプリケーションをまとめて 1 箇所から操作できるようにした、パーソナライズされたインターネットまたはイントラネット・サイトです。また、ポータルを使用すると、ユーザーに一貫した外観を提供することができます。

Discoverer Portlet Provider は、Discoverer データを Oracle9iAS Portal で公開するのに使用するコンテンツ配信メカニズムです。Discoverer Portlet Provider を使用して、ポータル・ユーザーは次の 2 種類の Discoverer ポートレットを公開できます。

- ワークシート・ポートレット - ポータルにワークシートを表示します。
- ワークブック・ポートレットのリスト - ポータルにワークブックのリストを表示します。

下図は、「Analyze Sales Reports」という名前の Discoverer ポートレットを含むポータル・ページを示しています。Analyze Sales Reports には Discoverer ワークブックへのリンクが含まれており、ポータル・ユーザーは Discoverer ワークブックにすばやくアクセスできます。

The screenshot displays the Oracle9iAS Portal interface. At the top, there are navigation tabs: Home, Budget, Org Chart, New Employees, and Customize. Below these, the main content area is divided into several portlets:

- News**: Contains headlines such as "Oracle Buys Thinking Machines", "Oracle Gets Analytical With Data Mining Acquisition", and "Informix Continues to Cry the Blues".
- My Picks**: Lists links like "People Search", "Scheduler", "BugDE", "Legal", "Internal Orders", "Corporate Cafes", "Y2K Initiative", and "Customer Newsgroups".
- Analyze Sales Reports**: A table with columns for Name, Update, Accessed, Scheduled, and Description. It lists various reports like "Video Analysis", "Regional Analysis", and "Mke's sales areas".
- Announcements**: Displays events like "Festival of Colors" and "The 8th Annual 5K Fun Run".
- HR**: Includes links for "My Benefits", "Corporate Holidays", "Vacation Balance", and "401k Portfolio".
- Expenditures**: A table with columns for Dept and Total.

注意：

- Oracle9iAS Portal の詳細は、『Oracle9iAS Portal 構成ガイド』を参照してください。
- Discoverer ポートレットの詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

11.3 Oracle9iAS Portal との Oracle9iAS Discoverer の使用方法

ポータル・ユーザーが Oracle9iAS Portal に Discoverer ポートレットを追加する前に、Oracle9iAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する必要があります。

Discoverer Portlet Provider の登録には、Oracle9iAS Portal の「プロバイダの追加」ページを使用します。

Oracle9iAS Portal とともに Oracle9iAS Discoverer を使用するには、次の操作を行います。

- Oracle9iAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録します（詳細は、[11.4 項「Oracle9iAS Portal との Discoverer Portlet Provider の登録方法」](#)を参照してください）。

- (オプション) 必要に応じて、Discoverer Portlet Provider のデフォルトのキャッシュ設定を変更します (詳細は、11.6 項「[Oracle9iAS Discoverer のデフォルトのパフォーマンス設定の変更](#)」を参照してください)。

注意：

- Oracle9iAS Portal を使用してポートレット・プロバイダを登録する方法の詳細は、Oracle9iAS Portal のヘルプを参照してください。

11.4 Oracle9iAS Portal との Discoverer Portlet Provider の登録方法

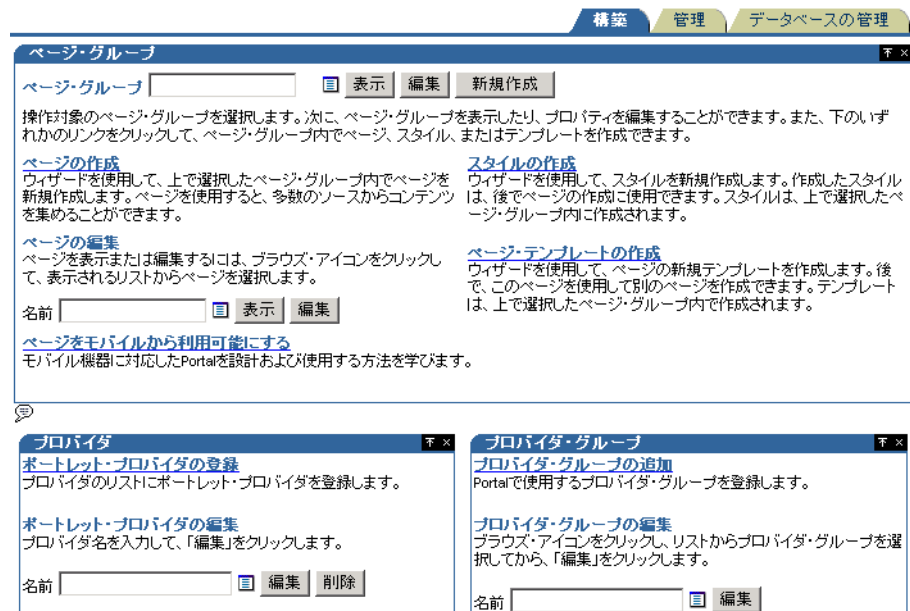
ポータル・ユーザーが Discoverer Portlet Provider を使用してポータル・ページに Discoverer ポートレットを追加するには、まず、Discoverer Portlet Provider を登録する必要があります。

Oracle9iAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録するには、次の操作を行います。

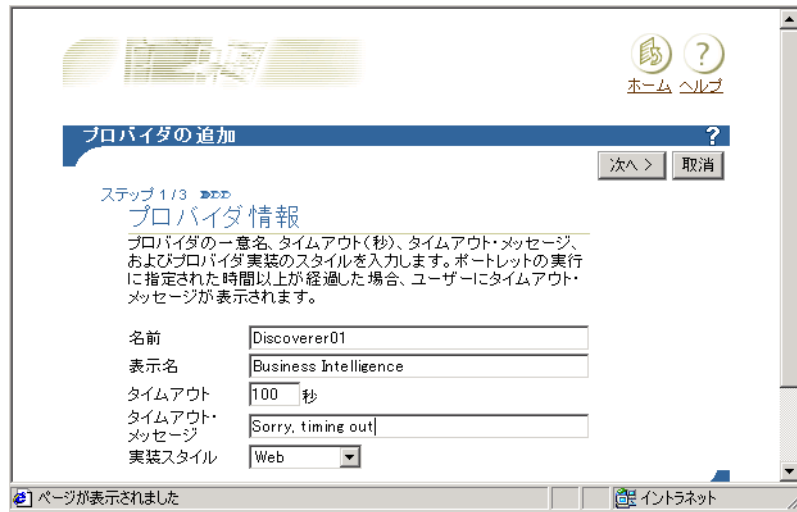
1. Web ブラウザを開いて、Portal のメイン・ページに移動します。

Portal のメイン・ページの表示の詳細は、Oracle9iAS Portal 管理者に問い合わせてください。

2. 「ビルダー」アイコンを選択して、「Oracle Portal ホームページ」を表示します。



3. 「ポートレット・プロバイダの登録」リンクを選択して「プロバイダの追加」ページを表示します。



ホーム ヘルプ

プロバイダの追加

ステップ 1 / 3

プロバイダ情報

プロバイダの一意名、タイムアウト(秒)、タイムアウト・メッセージ、およびプロバイダ実装のスタイルを入力します。ポートレットの実行に指定された時間以上が経過した場合、ユーザーにタイムアウト・メッセージが表示されます。

名前	Discoverer01
表示名	Business Intelligence
タイムアウト	100 秒
タイムアウト・メッセージ	Sorry, timing out
実装スタイル	Web

ページが表示されました

イントラネット

4. Portlet Provider の詳細を入力します。

注意：必要に応じて、Discoverer Portlet Provider に「名前」と「表示名」を割り当てます。「名前」と「表示名」は同じでなくても構いません。

ヒント：Portlet Provider の表示名は、Portal ユーザーがポータル・ページに Discoverer ポートレットを追加する際に表示されます。そのため、Portlet Provider の表示名には意味のあるわかりやすい名前を入力してください。

5. 「実装スタイル」ドロップ・ダウン・リストから「Web」を選択します。

6. 「次へ」をクリックして、「接続の定義」ページを表示します。

7. 次のように、Portlet Provider の一般プロパティを入力します。

- a. フォーム内の「URL」フィールドに、次の Discoverer Portlet Provider の URL を入力します。

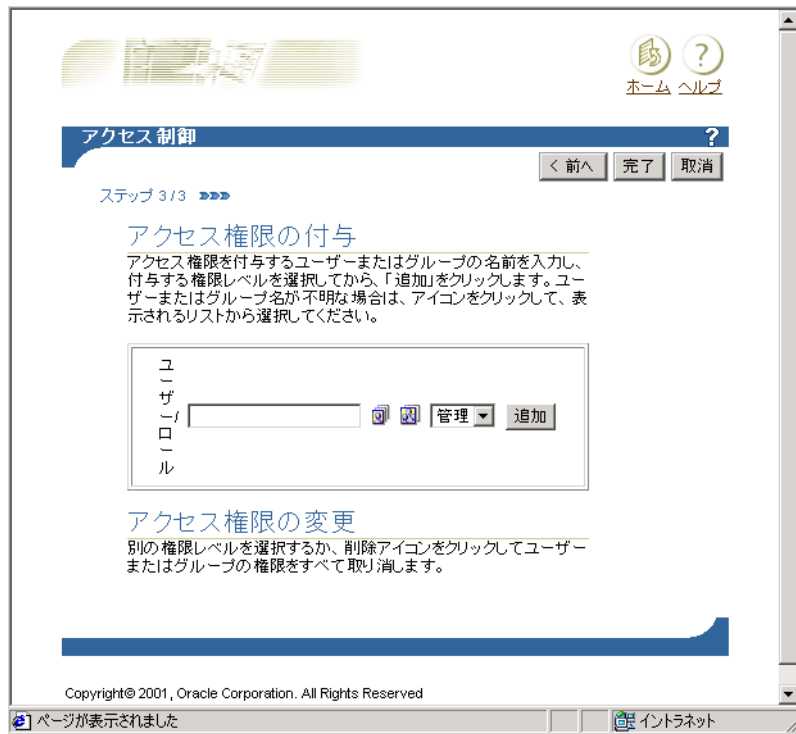
`http://<hostname[:port]>/discoverer/portletprovider` (たとえば、`http://server:8080/discoverer/portletprovider`)

- b. Oracle9iAS Portal と Discoverer Portlet Provider が同じ Cookie ドメイン内にある場合、「Web Provider in same Cookie domain as the portal」チェックボックスを選択します。

注意： Oracle9iAS Portal と Discoverer Portlet Provider は、通常同じ Cookie ドメインにあります。

- c. 「The user has the same identity in the Web providers application as in the Single Sign-On identity」ラジオ・ボタンを選択します。

8. 「次へ」をクリックして、「アクセス制御」ページを表示します。



デフォルトの「アクセス権限の付与」設定を変更する場合は、「アクセス制御」ページに詳細を入力します。

9. 「完了」をクリックします。

これでエンド・ユーザーは、Discoverer Portlet Provider を使用して Oracle9iAS Portal ページにポートレットを追加できます。

11.5 Discoverer Portlet Provider の編集方法

Discoverer Portlet Provider の動作を変更するには、これを編集します。たとえば、Discoverer Portlet Provider の表示名やアクセス制御設定を変更できます。

Discoverer Portlet Provider を編集するには、次の操作を行います。

1. Web ブラウザを開いて、Portal のメイン・ページに移動します。

Portal のメイン・ページの表示の詳細は、Oracle9iAS Portal 管理者に問い合わせてください。

2. 「ビルダー」アイコンを選択して、「Oracle Portal ホームページ」を表示します。

The screenshot displays the Oracle Portal Builder interface. At the top, there are tabs for '構築' (Builder), '管理' (Management), and 'データベースの管理' (Database Management). The main window is titled 'ページ・グループ' (Page Group) and contains a search box, buttons for '表示' (Display), '編集' (Edit), and '新規作成' (New). Below the buttons, there is a detailed instruction block for managing page groups, including sections for 'ページの作成' (Page Creation), 'スタイルの作成' (Style Creation), 'ページの編集' (Page Editing), 'ページ・テンプレートの作成' (Page Template Creation), and 'ページをモバイルから利用可能にする' (Make Page Available from Mobile). Below this main window, there are three smaller windows: 'プロバイダ' (Provider), 'プロバイダ・グループ' (Provider Group), and 'プロバイダ・グループの編集' (Provider Group Edit), each with its own instructions and input fields.

3. 「名前」フィールドに Discoverer Portlet Provider の名前（表示名）を入力し、「編集」をクリックして「プロバイダの編集」ページを表示します。

ヒント : Discoverer Portlet Provider の名前がわからない場合は、

- a. 「名前」フィールドの右側にある Browse Providers アイコンをクリックします。
- b. 表示された Portlet Providers のリストから、Discoverer Portlet Provider 名を選択します。

ヒント : ここで選択する名前は、Discoverer Portlet Provider の登録時に指定した表示名です（詳細は、11.4 項「Oracle9iAS Portal との Discoverer Portlet Provider の登録方法」を参照してください）。

- c. 「編集」をクリックして「プロバイダの編集」ページを表示します。
4. 必要に応じて、次のように変更します。
 - 「メイン」タブを使用して、プロバイダ情報（Discoverer Portlet Provider の表示名など）を変更します。

- 「接続」タブを使用して、一般プロパティ（Discoverer Portlet Provider の URL など）を編集します。
- 「アクセス」タブを使用して、アクセス権限（Discoverer Portlet Provider のアクセス制御設定など）を変更します。

5. 「OK」をクリックして変更を保存します。

変更内容に従ってポートレットが更新されます。

11.6 Oracle9iAS Discoverer のデフォルトのパフォーマンス設定の変更

Oracle9iAS Portal とともに Oracle9iAS Discoverer を使用する場合、次の変更を行います。

- `maximumSessions` の設定を変更し、同時に実行できるセッション数を増やします（詳細は、[A.4 項「configuration.xml の構成設定のリスト」](#)を参照してください）。
- スタイルシートがメモリー内にプールされる方法を変更します（詳細は、[12.5.4 項「XSL スタイルシートのプーリングを使用して、Discoverer Viewer の拡張性を向上する方法」](#)を参照してください）。

Discoverer のパフォーマンスおよび拡張性の最適化

12.1 Discoverer のパフォーマンスおよび拡張性の最適化

この章では、Discoverer のパフォーマンスおよび拡張性を最適化する方法について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [12.2 項「Discoverer のパフォーマンス」](#)
- [12.3 項「Discoverer の拡張性」](#)
- [12.4 項「Discoverer のパフォーマンスを改善する方法」](#)
- [12.5 項「Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法」](#)

12.2 Discoverer のパフォーマンス

Discoverer システムのパフォーマンスとは、Discoverer が特定のタスクを完了するためにかかる時間を指します。Discoverer のタスクには、問合せの結果を返す、ピボットやドリルを実行する、新しいユーザーをシステムに追加するなどがあります。

たとえば、与えられた数のユーザーに対して Discoverer で特定のタスク作業を完了するのに時間がかかりすぎると、パフォーマンスに問題があると見なされます。

Discoverer のパフォーマンスを決定する主な要因は、次のとおりです。

- 同時ユーザーの数
- 利用できるサーバーのリソース（CPU、メモリー、ディスク）
- 各ユーザーのワークロードのサイズと複雑さ
- タスクの完了に必要な時間

12.3 Discoverer の拡張性

Discoverer システムの拡張性とは、パフォーマンスを低下せずに、より多数のユーザーに対してより多くの作業を処理できる Discoverer の能力を指します。

たとえば、より多数のユーザーが同じタスクを実行しようとしたときに Discoverer のパフォーマンスが低下すると、拡張性に問題があると見なされます。

Discoverer 固有のスケーラブルなアーキテクチャを活用するには、Discoverer を複数のマシンにインストールして、マシン間でワークロードを分担します。詳細は、[第 5.1 章「Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール」](#)を参照してください。

Discoverer のパフォーマンスを決定する主な要因は、次のとおりです。

- 同時ユーザーの数
- サーバー CPU の数
- CPU 間の処理の分配

- サーバーの総メモリー（RAM および仮想メモリー）
- 各ユーザーから要求される特定のタスク（個々のワークロード）

12.4 Discoverer のパフォーマンスを改善する方法

Discoverer のパフォーマンスは、データベースの設計と問合せに対するチューニングの仕方によって大きく左右されます。データベースを適切に設定することによって、パフォーマンスが大幅に向上されます。また、次の要素を正しく使用することにより、パフォーマンスがさらに向上します。

- 集計表
- 索引
- データベース・パラメータの設定
- ネットワークの帯域幅

問合せに対するデータベースのチューニングの詳細は、『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』を参照してください。

適切に設計およびチューニングされているデータベースにおいて、さらにパフォーマンスを向上させるには、次の項で説明する操作を行ってください。

- [12.4.1 項「ワークシートおよびページ・アイテムを正しく使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)
- [12.4.2 項「ビジネス領域およびフォルダの表示に必要な時間を短縮して、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)
- [12.4.3 項「サマリー・フォルダを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)
- [12.4.4 項「DECODE 文を使用しない「select all parameter values」オプションを提供する方法により、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)
- [12.4.5 項「Discoverer Administrator のヒントを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)
- [12.4.6 項「Case Storage アイテム・プロパティを正しく設定して、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)
- [12.4.7 項「データベースからのフェッチ行で使用される配列のサイズを増やして、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)
- [12.4.8 項「個別値を含むテーブルの値のリストに基づいて、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)
- [12.4.9 項「システムのキャッシュ設定を変更することにより、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」](#)

- 12.4.10 項「ワークシートを夜間に実行するようにスケジュールして、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法」
- 12.4.11 項「Oracle9iAS Web Cache を使用して、Discoverer パフォーマンスを向上する方法」

12.4.1 ワークシートおよびページ・アイテムを正しく使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

Discoverer がデータをフェッチして表示するのにかかる時間は、ワークシートの種類（テーブルまたはクロス集計）や、ワークシートがページ・アイテムを使用しているかどうかによって異なります。

例

- ページ・アイテムを含まないテーブル・ワークシートを移入する場合、Discoverer は一度に複数の行（100 行など）のデータをまとめてフェッチし、すぐにデータを表示します。データがすぐに表示されるのは、索引を作成せずにデータが Discoverer のキャッシュに保存されるためです。
- ページ・アイテムまたはクロス集計を含むテーブル・ワークシートを移入する場合、一度にフェッチする行数に関係なく、データの表示により長い時間がかかります。これは、データが表示される前に Discoverer のキャッシュ内で索引が作成されるためです。

パフォーマンスを向上するには、次のようなワークシートの使用は避けてください。

- 非常に幅の広いクロス集計ワークシート
- 多数の値を持つページ・アイテムを含むテーブル・ワークシート
- 多数の行を含むワークシート

パフォーマンスを向上するには、次の操作を行います。

- パラメータを使用して、ワークシートで取得する行数を減らす

12.4.2 ビジネス領域およびフォルダの表示に必要な時間を短縮して、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

Discoverer Plus のエンド・ユーザーが問合せを作成する場合、Discoverer により、ユーザーがアクセス権を持つビジネス領域、フォルダ、およびアイテムのリストが表示されます。リストが表示される前に、ユーザーがフォルダ内で参照されているテーブルへのアクセス権を持っているかどうかを確認する、データベースのセキュリティ・チェックが行われます。ユーザーが実行できないワークシートは作成できないことが確認されますが、リストの表示にかかる時間が長くなります。

データベースのセキュリティ・チェックを無効にするには、pref.txt ファイルを編集して、次のように ObjectsAlwaysAccessible を 1 に設定します。

ObjectsAlwaysAccessible = 1

ObjectAlwaysAccessible の値が 0 以外の場合はセキュリティ・チェックが実行されず、ユーザーがテーブルへのアクセス権を持っていると想定されます。その結果、フォルダのリストの表示にかかる時間が短縮されます。ユーザーのアクセス権が比較的一定なシステムでは、セキュリティ・チェックを無効にすることをお勧めします。

注意：ユーザーがデータベース・アクセス権を持たないテーブルに基づくフォルダを選択すると、問合せの実行時にエラー・メッセージが表示されます。

12.4.3 サマリー・フォルダを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

Discoverer のサマリー・フォルダを正しく使用すると、問合せの応答時間を大幅に短縮できます。サマリー・フォルダを使用して問合せを実行すると数秒で結果が返される場合でも、サマリー・フォルダを使用しないで問合せを実行すると、同じ結果を返すのに数時間もかかります。サマリー・フォルダの管理は、Discoverer 実装でパフォーマンスを向上するための重要な要素となります。

サマリー・フォルダには、マテリアライズド・ビューまたはサマリー表を基にした 2 種類があり、動作に関して次のように異なります。

- Discoverer の問合せに、マテリアライズド・ビューに基づくサマリー・フォルダが含まれている場合、データベースによって、問合せがマテリアライズド・ビューを使用するように自動的に書き直されます。
- Discoverer の問合せに、サマリー表に基づくサマリー・フォルダが含まれている場合、Discoverer によって、問合せがサマリー表を使用するように自動的に書き直されます（サマリー表が EUL に登録されていることを前提とします）。

「SQL インспекター」ダイアログ・ボックスを使用して問合せのパスを表示し、データベースによって問合せが書き直されたかどうかを確認します。

Discoverer サマリー・フォルダの管理方法の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

12.4.4 DECODE 文を使用しない「select all parameter values」オプションを提供する方法により、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

デフォルトで、ワークシート・パラメータの「select all parameter values」オプションはユーザーに提供されません。DECODE 関数でパラメータをくくることにより、「select all parameter values」オプションをユーザーに提供することが可能になります。ただし、DECODE 関数を使用すると、データベースの索引を使用できなくなります。したがって、索引を使用してパフォーマンスを向上する方法は利用できません。

そこで、DECODE 関数を使用する代わりに、「SELECT '<ALL>' from DUAL」文を含む SQL に基づくカスタム・フォルダを作成すると、データベースの索引を使用して、同じ効果が得られます。

たとえば、Video Stores データの Region 次元からすべての地域を選択する機能をユーザーに提供するには、次の操作を行います。

1. 次の SQL 文に基づいて、すべての地域をリストするカスタム・フォルダを作成します。

```
select region from store
union
select '<All>' from dual
```

2. Region アイテムが値のリスト用に上のカスタム・フォルダを使用するように、Region アイテムのアイテム・クラスを編集します。

3. Discoverer Plus で Region のパラメータを作成します。

たとえば、「Region Parameter」になります。

4. Discoverer Plus で、次のように関連付けられた条件を作成します。

```
Region IN :Region Parameter
OR
:Region Parameter = '<All>'
```

ユーザーが Region アイテムをワークシートに含める場合、ユーザーは LOV から地域を選択するか、<All> 値を選択してすべての地域を選択できます。

カスタム・フォルダの作成方法、条件の作成方法、アイテム・クラスの編集方法の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。パラメータの作成の詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

12.4.5 Discoverer Administrator のヒントを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

Discoverer のパフォーマンスを向上するため、Discoverer Administrator の SQL 文にヒントを追加して、データベース・オブティマイザに特定のパスを使用するよう強制することができます。詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

12.4.6 Case Storage アイテム・プロパティを正しく設定して、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

ユーザーが問合せに条件を追加する場合、「大文字と小文字の区別」オプションを選択できます。「大文字と小文字の区別」オプションを選択しない場合、条件の両側に Upper 関数を置くことにより、大文字と小文字を区別して検索を実行できます。たとえば、次のような条件があるとして。


```
where Department in ('VIDEO SALES', 'VIDEO RENTALS')
```

これが次のようになります。

```
where Upper(Department) in (Upper('VIDEO SALES'), Upper('VIDEO RENTALS'))
```

ただし、UPPER 関数を使用すると、データベースの索引を使用できなくなります。したがって、索引を使用してパフォーマンスを向上する方法は利用できません。

データがすべて大文字またはすべて小文字でデータベースに保存されていることが分かっている場合は、Discoverer Administrator を使用してアイテムの「**Case Storage**」プロパティを設定します。

たとえば、データベース内の Region データがすべて大文字で保存されていることが分かっている場合は、Discoverer Administrator で、Region アイテムの「**Case Storage**」プロパティを「すべて大文字」に設定します。これで、データがすべて大文字で保存されていて、条件の左側には UPPER 関数が置かれていない（列名が UPPER 関数でくくられていない）と想定されます。たとえば、次のような条件があるとしします。

```
where Department in ('VIDEO SALES', 'VIDEO RENTALS')
```

これが次のようになります。

```
where Department in (Upper('VIDEO SALES'), Upper('VIDEO RENTALS'))
```

列名が UPPER 関数でくくられていないため、問合せでデータベースの索引を使用できるようになります。

12.4.7 データベースからのフェッチ行で使用される配列のサイズを増やして、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

Discoverer がデータベースから多数の行（例：1000 以上）をフェッチする可能性が高い場合は、Discoverer によって使用されるフェッチ行の配列サイズを増やすことにより、パフォーマンスを向上できます。

配列のデフォルト・サイズを変更するには、pref.txt ファイルを編集して、RowsPerFetch を次のように必要な値に設定します。

RowsPerFetch = < 値 >

多数の行を取得する可能性が高い場合は、RowsPerFetch を「500」または「1000」に設定して配列のサイズを増やします。

Discoverer のエンド・ユーザーは、次のように pref.txt にある RowsPerFetch で指定されているデフォルト値をオーバーライドできることに注意してください。

- Discoverer Plus で「ツール」→「オプション」→「問合せ管理」を選択します。
- Discoverer Viewer で「オプション」を選択します。

注意：テーブル・ワークシートの場合は、RowsPerFetch の値を小さく設定したほうが速く結果が得られます。テーブル・ワークシートでは、最初の配列が取得された後すぐデータが表示されるので、RowsPerFetch を「100」に設定した方が、RowsPerFetch を「1000」に設定した場合よりも Discoverer のエンド・ユーザーに最初の 100 行が速く表示されるためです。

12.4.8 個別値を含むテーブルの値のリストに基づいて、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

デフォルトで、Discoverer の値リスト (LOV) は、基礎となるデータ（または「ファクト」）表で問合せに SELECT DISTINCT 文を使用して移入されます。LOV を移入するには、個別値のリストが表示される前に、すべての行がスキャンされる必要があります。ただし、このデフォルトの問合せは、LOV が多数の行を持ち、比較的少ない個別値を持つ列から移入される場合には効率が悪くありません。

パフォーマンスを向上するには、ファクト表の列を基にしたアイテムで LOV を作成しないようにしてください。そのかわりに、次のオプションを使用することをお勧めします。

- ファクト表に添付される小さな「ディメンション」表（許可される個別値のみを含む）で列に基づくアイテムの LOV を作成します。このような表が存在しない場合は、SQL*Plus を使用して表を作成してから移入します。
- 許可される値リストが小さい場合や比較的变化が少ない場合は、SYS.DUAL から許可される値を選択する SQL 文に基づくカスタム・フォルダを作成することにより、Discoverer Administrator 内で LOV を定義します。

たとえば、Video Stores データ内のすべての地域を含む LOV を作成するには、次の操作を行います。

1. 次の SQL 文に基づいて、すべての地域をリストするカスタム・フォルダを作成します。

```
Select `NORTH` Region FROM sys.dual
UNION
Select `SOUTH` Region FROM sys.dual
UNION
Select `EAST` Region FROM sys.dual
UNION
Select `WEST` Region FROM sys.dual
```

2. Region アイテムが値のリスト用に上のカスタム・フォルダを使用するように、Region アイテムのアイテム・クラスを編集します。

カスタム・フォルダとアイテム・クラスの作成方法の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

12.4.9 システムのキャッシュ設定を変更することにより、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

データベースから取得されるデータは、Discoverer のキャッシュに保存されます。キャッシュにより、Discoverer の回転、ドリル、およびローカル計算機能がサポートされます。

pref.txt ファイルで次の設定を使用して、キャッシュのパフォーマンスを制御できます。

設定名	デフォルト値	説明
CacheFlushPercentage	25	キャッシュがいっぱいになった場合に、フラッシュされるキャッシュの割合 (%)。
MaxVirtualDiskMem	1024000000	データ・キャッシュに使用できるディスク・メモリーの最大量。
MaxVirtualHeapMemory	5120000	データ・キャッシュに使用できるヒープ・メモリーの最大量。

Discoverer が利用できるメモリーを活用できるように、デフォルトでキャッシュのサイズは大きく設定されています。システムでより多くのリソースが利用可能な場合は、デフォルトのメモリー値を増やすことができます（ただし、これは問合せが大きな結果セットを返す場合にのみ利点があります）。デフォルト値を各ユーザーに対して設定する必要がありますが、dis51pr コマンドライン・ユーティリティを使用して、特定のユーザーの値を変更できます（詳細は、7.6 項「[個々のユーザーのユーザー環境設定を設定する方法](#)」を参照してください）。

1 人の Discoverer ユーザーが利用できるシステム・リソースを増やすと、他の Discoverer ユーザーまたは他のアプリケーションを使用するユーザーに弊害が生じる場合があることに注意してください。

12.4.10 ワークシートを夜間に実行するようにスケジュールして、Discoverer のパフォーマンスを向上する方法

一日ごとに正確なデータを取得する必要がある場合は、オフピーク時にワークシートを処理するようにスケジュールしてピーク時のサーバーへの負荷を軽減することにより、Discoverer のパフォーマンスを向上できます。ワークブックのスケジューリングの詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

12.4.11 Oracle9iAS Web Cache を使用して、Discoverer パフォーマンスを向上する方法

ワークブックが比較的安定した状態で維持される場合は、Web Cache を使用して Discoverer のパフォーマンスを大幅に向上できます。Oracle9iAS Web Cache の詳細は、[9.1 項「Oracle9iAS Web Cache との Discoverer の使用」](#)を参照してください。

12.5 Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法

Discoverer 固有のスケーラブルなアーキテクチャを活用するには、次の機能を利用します。

- Oracle9iAS の拡張性機能を利用する（詳細は、[12.5.1 項「Oracle9iAS の拡張性機能を使用して、Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法」](#)を参照してください）。
- Discoverer Viewer の拡張性機能を使用する（詳細は、[12.5.4 項「XSL スタイルシートのプーリングを使用して、Discoverer Viewer の拡張性を向上する方法」](#)を参照してください）。

12.5.1 Oracle9iAS の拡張性機能を使用して、Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法

Oracle9iAS のスケーラブルなアーキテクチャにより、Discoverer サービス層を複数のマシンにインストールできます（複数のマシンへの Oracle9iAS Discoverer のインストールの詳細は、[第 5.1 章「Oracle9iAS Discoverer の複数のマシンへのインストール」](#)を参照してください）。

次のいずれかの方法により、異なるマシン間でロード・バランシングを行うことができます。

- Oracle9iAS Web Cache の使用（推奨）
- 標準の HTTP/IP ルーター・ロード・バランサの使用

ロード・バランシング機能をより向上するには、Oracle HTTP Server および OC4J の複数のインスタンスを実行します。

- 複数のマシンへのインストレーションの詳細は、[第 5.7 章「複数の Oracle HTTP Server と OC4J コンポーネントの使用について」](#)を参照してください。
- Oracle9iAS Web Cache の詳細は、『Oracle9iAS Web Cache 管理および配置ガイド』を参照してください。

12.5.2 OC4J のメモリー使用量パラメータを指定して、Discoverer の拡張性を向上する方法

詳細は、『Oracle9i Application Server パフォーマンス・ガイド』の第6章「OC4J での J2EE アプリケーションの最適化」を参照してください。

12.5.3 OC4J 処理の数を指定して、Discoverer の拡張性を向上する方法

詳細は、『Oracle9i Application Server パフォーマンス・ガイド』の第6章「OC4J での J2EE アプリケーションの最適化」を参照してください。

12.5.4 XSL スタイルシートのプーリングを使用して、Discoverer Viewer の拡張性を向上する方法

Discoverer Viewer では、XSL スタイルシートを使用して Discoverer Viewer ページのレイアウトを定義します。ただし、XSL スタイルシートの処理と保存には、CPU およびメモリーが多量に使用されます。

注意：XSL スタイルシートのプーリングは、Discoverer Portlet Provider によっても使用されます。Discoverer Portlet Provider の詳細は、[11.1 項「Oracle9iAS Portal との Discoverer の使用」](#)を参照してください。

XSL スタイルシートをプーリングすることにより、1 つ以上の Discoverer Viewer セッションで 1 つ以上のスタイルシートを共有できます。これにより、CPU とメモリーの使用量が大幅に削減され、トランザクション時間が短縮されます。XSL スタイルシートをプーリングすると、Discoverer サービス層でサポートできる Discoverer Viewer の同時ユーザー数を増やすことができます。さらに、スタイルシートのプーリングにより、メモリーで管理するスタイルシート数を制御できます。これにより、与えられた時間内で処理できる HTML ページ数が制御できます。

次に、configuration.xml ファイル内にある XSL スタイルシートのプーリング設定の例を示します。

```
<!-- configuration for xsl processing. -->
- <xsl_translator path="../../common/xsl/discoverer.xsl" processor="oracle"
cache="true">
  <stylesheet_pool minimum="1" maximum="1" log="false" tolerance="1.0" period="-1"
/>
</xsl_translator>
```

下の表は、configuration.xml ファイルに保存されているスタイルシートのプーリング設定を示しています。

設定	目的	デフォルト	使用できる値
cache	スタイルシート・プーリングの使用を指定します	true	true または false
minimum	与えられた時間でメモリーに保持できる XSL スタイルシートの最小数を指定します	1	0 または 32768 までの正の整数
maximum	与えられた時間でメモリーに保持できる XSL スタイルシートの最大数を指定します	1	0 または 32768 までの正の整数
tolerance	HTML ページのユーザー要求の同時処理用にプールのどの程度最適化するかを指定します ■ この値を低く設定すると、メモリー内のスタイルシートの数が同時要求の数に向けて最適化されます（低メモリー、低同時数）。 ■ この値を高く設定すると、メモリー内のスタイルシートの数が同時セッションの数に向けて最適化されます（高メモリー、高同時数）。	1.0	0.0 ～ 0.1 間の浮動小数点数
period	プールの最適化が行われる期間（ミリ秒）を指定します	-1	0 または 4294967296 までの正の整数 -1 に設定すると、この期間を最適化するアルゴリズムが使用されます。
log	スタイルシートのプーリング統計をサーブレットのログ・ファイルに書き込むように指定します 注意： これを行うと、パフォーマンスが大幅に低下します。拡張性およびパフォーマンスを診断する目的以外には、本番環境でこのオプションを「true」に設定しないでください。	false	true または false

configuration.xml ファイルで log=true に設定すると、次のイベントのいずれかが発生した場合に、スタイルシートのプーリング統計がサーブレットのログ・ファイルに書き込まれます。

イベント	説明
オブジェクトの作成	スタイルシートが作成されました。
オブジェクトの削除	スタイルシートが削除されました。
オブジェクトの非アクティブ化	スタイルシートが非アクティブ化されました（プールに戻されて使用可能な状態です）。

イベント	説明
オブジェクトのアクティブ化	スタイルシートがアクティブ化されました（プールから取り出されて使用されます）。
不足	使用可能なスタイルシートがすべてアクティブなので、要求によってプールからスタイルシートが取得されません。また、プールが最大容量に達しているため、スタイルシートを作成できません。このため、スタイルシートがアクティブ化されるまで、要求を待機させる必要があります。
プールの最適化	オブティマイザにより、スタイルシートの追加または削除を行う機会が検出されました。

上のいずれかのイベントが発生した場合に、次のスタイルシート・プーリング統計がサブレットのログ・ファイルに書き込まれます。

スタイルシートのプーリング情報	説明
アクティブなオブジェクト	アクティブ化されたスタイルシートの数（使用されているスタイルシートの数）
受動オブジェクト	使用できる状態にあるスタイルシートの数
総オブジェクト	作成されたすべてのスタイルシートの数（アクティブおよび受動オブジェクトの総数）
ピーク・オブジェクト	プールの存続期間（サブレットが開始されて以来）で作成されるオブジェクトの最大数
ヒット	プールのヒット数（受動オブジェクトとともにスタイルシートがアクティブ化された回数）
ミス	使用できる受動オブジェクトがなかった、スタイルシートを作成する必要があった、または不足のために待機する必要があった回数
ヒット率	ヒット / (ヒット + ミス) ヒット数をヒットとミスの総計で割った数（値が高いほど良い）
最適なオブジェクト	プールするスタイルシートの最適数（セッション数 +1 が維持される）
最大容量	プールの容量（configuration.xml の「maximum」スタイルシート・プール設定と同じ）
最小容量	プールするスタイルシートの最小数（configuration.xml の「minimum」スタイルシート・プール設定と同じ）

スタイルシートのプーリング情報	説明
不足数	プールの存続期間（サーブレットが開始されて以来）に発生した不足イベントの回数
不足スレッド	現在非アクティブ化を待機しているスレッドの数（プールが最大容量に達したため）

たとえば、サーブレットのログ・ファイルには、次のようなスタイルシート・プーリング情報が出力されます。

```
discoverer pool: optimize pool removing 1 objects
discoverer pool: remove object oracle.xml.parser.v2.XSLStyleSheet@b9bc9519
discoverer pool: dumpstats=http://machine.oracle.com/viewer/discoverer.xml
active objects=0
passive objects=2
total objects=2
peak objects=3
hits=7
misses=0
hit rate=100
optimal objects=1
maximum capacity=5
minimum capacity=1
starvations=0
starving threads=0
```

Discoverer でのデータ・セキュリティ維持

13.1 Discoverer でのデータ・セキュリティ維持

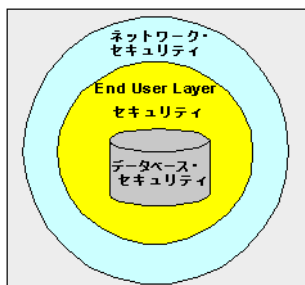
この章では、Discoverer ユーザーがアクセスするデータを保護する異なるセキュリティ機構について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 13.2 項「Discoverer およびデータ・セキュリティ」
- 13.3 項「データベースのセキュリティ」
- 13.4 項「End User Layer (EUL) のセキュリティ」
- 13.5 項「ネットワークのセキュリティについて」
- 13.6 項「セキュリティについてよくある質問」

13.2 Discoverer およびデータ・セキュリティ

Discoverer では、データへの不正なアクセスを防止する、多くのセキュリティ機構がサポートされています。

次の図は、Discoverer ユーザーがアクセスするデータを保護するセキュリティの異なるレベルを説明しています。



セキュリティは、次の 3 つのレベルで適用されます。

- データベースの権限、ロール、ユーザー名などのデータベース・セキュリティ（詳細は、13.3 項「データベースのセキュリティ」を参照してください）。
- ビジネスエリア、接続、Single Sign-On などの End User Layer (EUL) セキュリティ（詳細は、13.4 項「End User Layer (EUL) のセキュリティ」を参照してください）。
- JRMP、HTTP、HTTPS などのネットワーク・セキュリティ（詳細は、13.5 項「ネットワークのセキュリティについて」を参照してください）。

13.3 データベースのセキュリティ

最も基本的なセキュリティ・レベルでは、ユーザーがデータベースのユーザー名とパスワードを使用してデータベースにログオンする必要があります。この後、情報へのアクセスは、データベースのユーザーに与えられたデータベースの権限によって規制されます。データベースの権限は、データベースのユーザーに明示的に与えられるか、データベースのロールによって間接的に与えられます。Discoverer ユーザーは、アクセス権を持たないデータベースの情報を見ることはできません。

通常、データベースのセキュリティは、SQL*Plus または DBA ツールを使用してセットアップします。

13.4 End User Layer (EUL) のセキュリティ

この節では、Discoverer の End User Layer (EUL) のセキュリティ機構について説明します。

13.4.1 ビジネスエリアについて

Discoverer 管理者は、ビジネスエリアを作成して管理することにより、情報へのアクセスを制御します。Discoverer ユーザーは、ビジネスエリアを通してアクセス権を与えられたデータベースへの情報のみにアクセスできます。Discoverer ユーザーは、共有ワークブックを使用してユーザー間で情報を共有できますが、アクセス権を持たないデータベースの情報を見ることはできません。

Discoverer 管理者は、Discoverer Administrator を使用して EUL セキュリティをセットアップします。ビジネスエリアの作成と管理の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

13.4.2 Discoverer の接続について

Discoverer マネージャは、Discoverer のログイン情報を含む Discoverer 接続を定義することにより、ユーザーの情報へのアクセス権をさらに制御できます。各接続では、1 つ以上のビジネスエリアを含む End User Layer (EUL) が指定されます。Discoverer ユーザーは、パブリック接続を使用するように制限されるか、独自のプライベート接続を作成する権利が与えられます（詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください）。

Discoverer 管理者は、Oracle9iAS Enterprise Manager を使用してパブリック接続を作成したり、独自のプライベート接続を作成する許可をエンド・ユーザーに与えます。Discoverer 接続の作成と管理の詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

13.4.3 Single Sign-On について

この節では、Oracle9iAS Discoverer および Oracle9iAS Single Sign-On との関係について説明します。

13.4.3.1 Oracle9iAS Single Sign-On とは

Oracle9iAS Single Sign-On は、Oracle9i Application Server のコンポーネントで、これを使用すると、ユーザーがユーザー名およびパスワードを一度だけ入力することにより、Oracle9iAS 製品コンポーネントのすべての機能および Web アプリケーションにログインできます。

注意： Oracle9iAS Single Sign-On は、Oracle Sign-On Server を使用して実装されます。

13.4.3.2 Single Sign-On および Discoverer について

Oracle9i Application Server をインストールすると、Oracle9iAS Single Sign-On が自動的にインストールされますが、デフォルトで無効になっています。

Discoverer 接続は、Single Sign-On を使用している環境でも使用していない環境でも動作します。Oracle9iAS Single Sign-On 環境では、Discoverer エンド・ユーザーが Oracle9iAS Single Sign-On によって認証されずに Discoverer を起動すると、ユーザーは Single Sign-On 用の詳細情報（ユーザー名およびパスワード）を入力するように要求されます。Single Sign-On の詳細情報を入力すると、ユーザーは Discoverer 接続ページを表示することができ、次回からはユーザー名またはパスワードを入力せずに Discoverer を起動できるようになります。

注意： Single Sign-On を有効にするには、mod_osso.conf ファイルを開き、discoverer/viewer および /discoverer/plus の SSO を有効にします。Discoverer は、Oracle9iAS Portal に依存して /discoverer/portlet プロバイダ URL を保護するため、/discoverer/portlet プロバイダの SSO を有効にしないでください。

13.4.3.3 Single Sign-on を使用しない環境での認証

Discoverer に Single Sign-On をデプロイしない場合は、Discoverer エンド・ユーザーがブラウザ・セッションで最初にプライベート接続を選択したときに、データベースのパスワードを確認するように要求されます。SSO のログイン詳細情報は要求されません。

エンド・ユーザーがブラウザを閉じてから再起動した（新しいブラウザ・セッションを作成した）場合、データベースのパスワードを確認するように要求されます。エンド・ユーザーがプライベート接続を使用する場合は、その都度データベースのパスワードを確認する必要があります。一方、エンド・ユーザーは、パブリック接続のパスワードを確認する必要はありません（詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください）。

注意：

- SSO を使用していない環境では、Discoverer エンド・ユーザーは現在使用しているマシン（および Web ブラウザ）を使用して作成したプライベート接続にしかアクセスでき

ません。つまり、エンド・ユーザーが異なるマシンまたは Web ブラウザから Discoverer に接続する場合は、そのマシンで作成されたプライベート接続にはアクセスできません。この場合、エンド・ユーザーは、新しいマシンでプライベート接続を再度作成する必要があります。

- SSO を使用していない環境でプライベートな Discoverer 接続を保存するには、Web ブラウザで Cookies を有効にしておく必要があります。

13.4.4 Discoverer および Portal のセキュリティ

Oracle9iAS Portal を使用して Discoverer のコンテンツを公開する場合は、ポータルユーザーにワークブックへのアクセス権を与えます。ただし、Discoverer ワークブックにアクセスするポータルのユーザーは、データベースへのアクセス権を持つデータしか見ることができません。つまり、複数のユーザーが同じワークブックにアクセスする場合、与えられたデータベース権限により、見ることのできるデータがそれぞれ異なることがあります。詳細は、11.1 項「Oracle9iAS Portal との Discoverer の使用」を参照してください。

13.5 ネットワークのセキュリティについて

Discoverer は、異なる通信プロトコル (JRMP、HTTP、HTTPS) を使用したネットワーク環境で、ファイアウォールを介して、または介せずに使用できます。

最適なネットワーク環境は、企業の既存のネットワーク方針と、次の要件によって決まります。

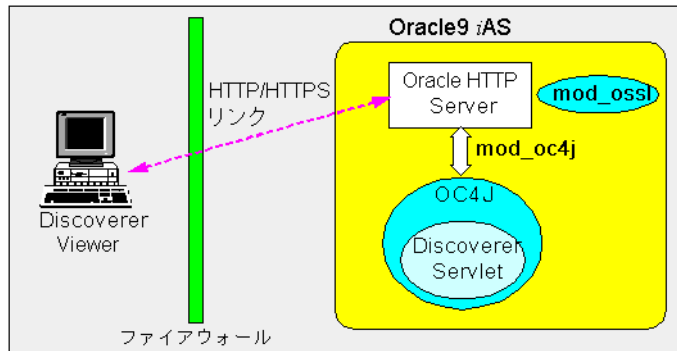
- パフォーマンス (情報の表示にかかる時間)
- アクセス可能性 (ファイアウォールを介してデータにアクセスできるかどうか)
- セキュリティ (転送中に必要なデータのセキュリティ・レベル)

Discoverer Viewer および Discoverer Plus には、異なるセキュリティ構成が必要です。

- Discoverer Viewer のセキュリティ構成の詳細は、13.5.1 項「Discoverer Viewer のセキュリティについて」を参照してください。
- Discoverer Plus のセキュリティ構成の詳細は、13.5.2 項「Discoverer Plus のセキュリティについて」を参照してください。

13.5.1 Discoverer Viewer のセキュリティについて

Discoverer Viewer では、標準の HTTP または HTTPS プロトコルを使用して Discoverer クライアントを Discoverer Servlet に接続します。



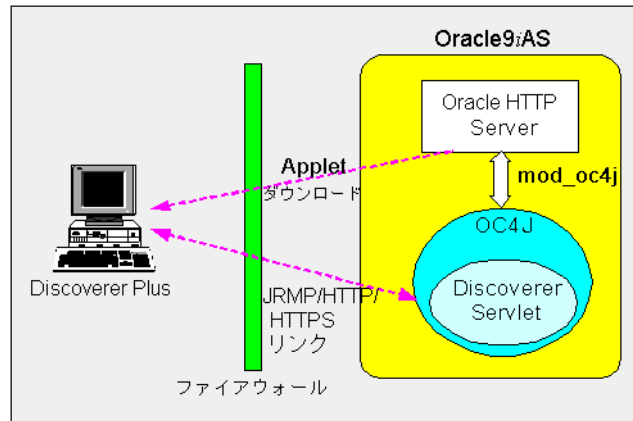
注意： Discoverer Viewer クライアント・マシンで Discoverer Viewer を実行するのに必要なのは、標準の Web ブラウザのみです。

Oracle9iAS をデフォルトのままインストールすると、使用する環境によって、Discoverer Viewer は次のように構成されます。

- イン트라ネット環境（ファイアウォール内）では、特別なセキュリティ構成は必要ありません。
- HTTP 環境では、特別なセキュリティ構成は必要ありません。ファイアウォールを使用している場合は、ファイアウォールの標準セキュリティ・ポリシーにより、（たとえば、デフォルト・ポート 80 で）HTTP 通信の通過が許可されます。
- HTTPS 環境では、Oracle9iAS マシンで mod_oss ファイルを構成する必要があります（詳細は、『Oracle9i Application Server セキュリティ・ガイド』を参照してください）。ファイアウォールを使用している場合は、ファイアウォールの標準セキュリティ・ポリシーにより、（たとえば、デフォルト・ポート 443 で）HTTPS 通信の通過が許可されます。
- HTTPS 環境では、クライアント・マシンのブラウザによるセキュリティ認証が使用されます。

13.5.2 Discoverer Plus のセキュリティについて

Discoverer Plus では、標準の JRMP（Java Remote Method Protocol）、HTTP、または HTTPS プロトコルを使用して、クライアントが Discoverer Servlet に接続されます。



Discoverer Plus では、次の 2 つの通信チャネルが使用されます。

- Discoverer Plus クライアントが初めて Discoverer Servlet に接続する場合は、Discoverer Plus アプレットがクライアント・マシンにダウンロードされます。
- Discoverer Plus アプレットが Discoverer のクライアント・マシンにインストールされると、Discoverer Plus クライアント・マシンが JRMP、HTTP または HTTPS のいずれかを使用して、Discoverer Servlet と通信します。

Oracle9iAS をデフォルトのままインストールすると、使用する環境によって、Discoverer Plus は次のように構成されます。

- イン트라ネット環境（ファイアウォール内）では、特別なセキュリティ構成は必要ありません。Discoverer Plus クライアントは、JRMP プロトコル（デフォルトの Discoverer Plus 通信プロトコル）を使用して Discoverer Servlet に接続します。

デフォルトの Discoverer Plus 通信プロトコル（デフォルト）が選択されていることを確認してください（詳細は、[13.5.2.4 項「デフォルトの通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」](#)を参照してください）。

- HTTP 環境では、特別なセキュリティ構成は必要ありません。ファイアウォールを使用している場合は、ファイアウォールの標準セキュリティ・ポリシーにより、（たとえば、デフォルト・ポート 80 で）HTTP 通信の通過が許可されます。

HTTP 接続は、デフォルト（JRMP）に設定されている Discoverer Plus 通信プロトコル・オプションとともに動作しますが、Discoverer Plus の通信プロトコル・ページでトンネリング・オプションを指定すると、パフォーマンスを向上できます（詳細は、[13.5.2.5 項「トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」](#)を参照してください）。

- HTTPS 環境では、標準の署名認可レベル以外を使用している場合は、クライアントで certdb.txt ファイルを構成する必要があります（詳細は、[13.5.2.1 項「標準の署名認可レベル以外を使用している環境で Discoverer Plus を構成する場合」](#)を参照してください）

い)。ファイアウォールを使用している場合は、ファイアウォールの標準セキュリティ・ポリシーにより、(たとえば、デフォルト・ポート 443 で) HTTPS 通信の通過が許可されます。

HTTPS 接続は、デフォルト (JRMP) に設定されている Discoverer Plus 通信プロトコル・オプションとともに動作しますが、Discoverer Plus の通信プロトコル・ページでトンネリング・オプションまたはセキュア・トンネリング・オプションを指定すると、パフォーマンスを向上できます (詳細は、[13.5.2.2 項「Discoverer Plus 通信プロトコルの指定」](#)を参照してください)。

注意：

- Discoverer Plus のクライアント・マシンには、ブラウザの認証および JInitiator が必要です (詳細は、[3.3 項「クライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合」](#)を参照してください)。
- 通常、Discoverer アプレットをダウンロードするには、Discoverer Servlet との通信で使用した通信プロトコルを使用します (詳細は、[13.5.2.2 項「Discoverer Plus 通信プロトコルの指定」](#)を参照してください)。
- HTTPS 環境では、Discoverer Plus アプレット用に SSL サポートを提供するため、セキュリティ認証は JInitiator 用にインストールされる必要があります。

13.5.2.1 標準の署名認可レベル以外を使用している環境で Discoverer Plus を構成する場合

標準以外の、またはプライベートな SSL 署名認可レベルを使用して Discoverer Plus をデプロイしている場合は、各クライアント・マシンで認証情報が `¥lib¥security¥certdb.txt` ファイルにあるかどうかを確認する必要があります。Discoverer はブラウザの署名認可レベルを無視し、Oracle JInitiator の SSL テクノロジを使用するため、この構成が必要となります。

13.5.2.2 Discoverer Plus 通信プロトコルの指定

Oracle Enterprise Manager を使用して、Discoverer Plus アプレット (Discoverer クライアント) および Discoverer Servlet (Discoverer サーバー) が通信に使用する通信プロトコルを指定できます。次の 3 つの通信プロトコル・オプションがあります。

- デフォルト

Discoverer Servlet と通信するために、Discoverer Plus アプレットが JRMP の使用を試み、失敗した場合は HTTP または HTTPS (URL による) の使用を試みるように設定する場合は、このオプションを指定します。このオプションは、アプレットがファイアウォールの内側または外側で実行されているかに関わらず動作します。ただし、ファイアウォールの外側からでは、JRMP の使用が最初に試行されるため、動作が遅くなります。

Discoverer サービス構成のデフォルト・オプションの指定の詳細は、「[13.5.2.4 項「デフォルトの通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」](#)」を参照してください。

- トンネリング

アプレット自体をダウンロードしたときに Discoverer Servlet と通信した方法と同じ方法を使用して、Discoverer Plus クライアントを接続する場合は、このオプションを指定します。このオプションは、ファイアウォールが使用されているかどうかに関わらず動作します。

Discoverer サービス構成のトンネリング・オプションの指定の詳細は、[13.5.2.5 項「トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」](#)を参照してください。

- セキュア・トンネリング

Discoverer Plus クライアントで、Discoverer Servlet との通信に HTTPS を常に使用する場合は、このオプションを指定します。

Discoverer サービス構成のセキュア・トンネリング・オプション指定の詳細は、[13.5.2.6 項「セキュア・トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」](#)を参照してください。

13.5.2.3 OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示する方法

Oracle Enterprise Manager で「Discoverer Plus 構成」ページを使用して、Discoverer Plus の通信プロトコルを指定します。たとえば、Discoverer Plus データを暗号化する場合は、Discoverer Plus で HTTPS 通信プロトコルを使用するように構成します。

OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示するには、次の操作を行います。

1. Oracle Enterprise Manager を起動します。

ローカルで Oracle HTTP Server に接続している場合は、URL が次のようになります。

`http://hostname:1810`

リモートで Oracle HTTP Server に接続している場合は、使用する URL の情報を Oracle9iAS システム管理者に問い合わせてください。

注意：OEM の起動の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

2. プロンプトが表示されると、ユーザー名とパスワードを入力します。

注意：OEM のユーザー名とパスワードが必要な場合は、Oracle9iAS システム管理者に問い合わせてください。

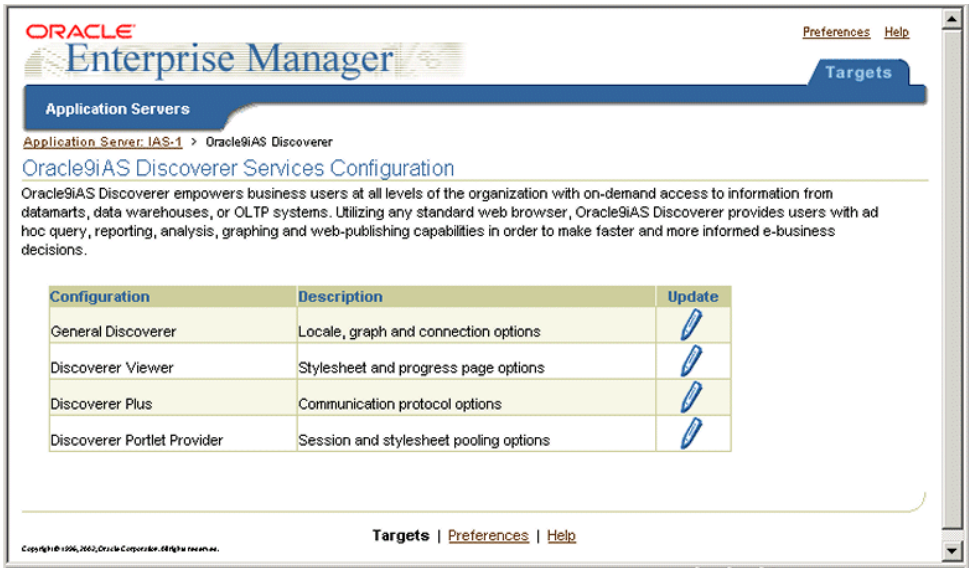
3. 「OK」をクリックして、Oracle Enterprise Manager を起動します。

Oracle Enterprise Manager のメイン・ページが表示されます。



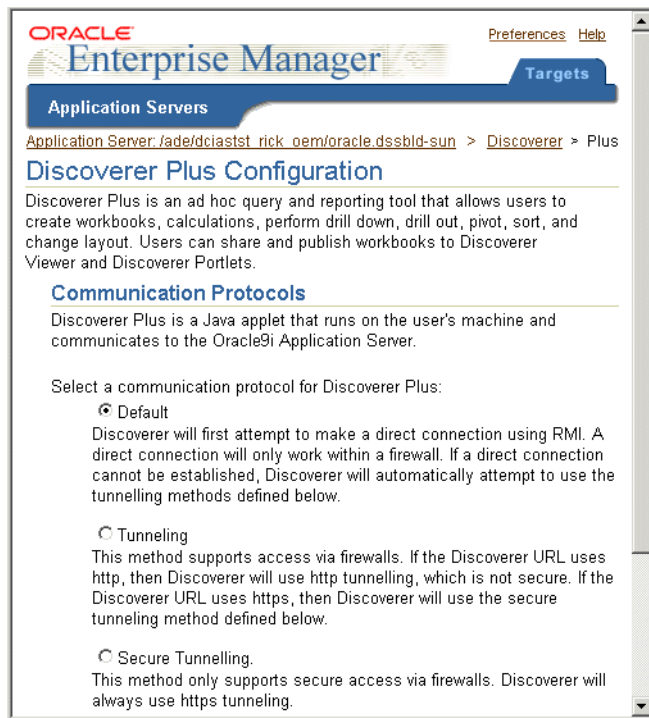
4. 「名前」列で、マシン上のコンポーネントのリストを表示するために更新するインスタンス（iasdb.host1.uk.companyname.com など）を選択します。
- マシン上の Oracle9iAS コンポーネントのリスト（HTTP Server、OC4J_BI_Forms、Web Cache、OC4J_Portal など）が表示されます。
5. 「名前」列で、「<Instance_Name>_Discoverer」リンクを選択して「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」ページを表示します。

図 13-1 「Oracle9iAS Discoverer サービス構成」 ページ



Oracle9iAS Discoverer サービス構成の表には、構成できる Discoverer 各部分の行が含まれています。

6. 「更新」列で、Discoverer Plus 行にある「更新」アイコンを選択して「Discoverer Plus 構成」ページを表示します。

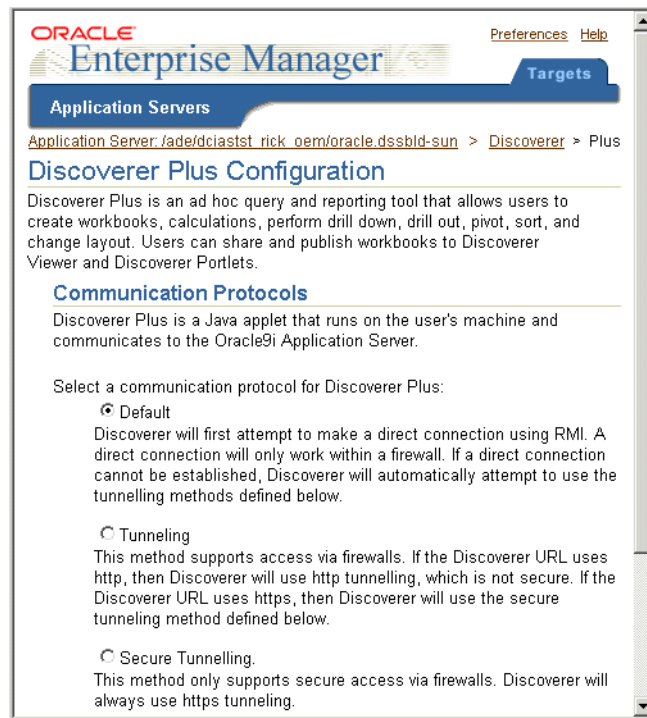


「Discoverer Plus 構成」ページを使用して、Discoverer Plus の通信プロトコルを変更できます（詳細は、13.5.2.2 項「Discoverer Plus 通信プロトコルの指定」を参照してください）。

13.5.2.4 デフォルトの通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法

デフォルトの通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップするには、次の操作を行います。

1. Oracle Enterprise Manager を起動し、「Discoverer Plus 構成」ページを表示します（詳細は、13.5.2.3 項「OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示する方法」を参照してください）。



2. 「Discoverer Plus が使用する通信プロトコルを選択してください」 オプションから「デフォルト」ラジオ・ボタンを選択します。

Discoverer Plus アプレットによって、JRMP の使用が試行されます。JRMP が使用できない場合は、Discoverer Plus アプレットによって、Discoverer Servlet との通信に HTTP または HTTPS (URL による) が使用されます。

注意：このオプションは、アプレットがファイアウォールの内側または外側で実行されているかに関わらず動作します。ただし、ファイアウォールの外側からでは、JRMP の使用が最初に試行されるため、動作が遅くなります。このページにある他のオプションの詳細は、「Discoverer Plus 通信プロトコルの指定」を参照してください。

3. 「適用」をクリックして詳細を保存し、「Discoverer サービス構成」ページを表示します。

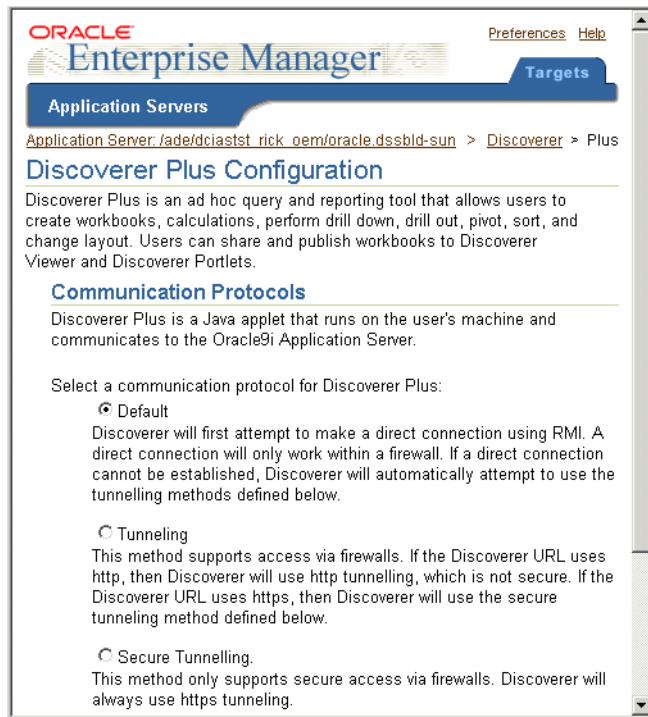
4. Discoverer Plus のユーザーに Discoverer Servlet の URL を提供します。

たとえば、`http://machinename.myorganization.com:7777/discoverer/plus` のようになります。

13.5.2.5 トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法

トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップするには、次の操作を行います。

1. Oracle Enterprise Manager を起動し、「Discoverer Plus 構成」ページを表示します（詳細は、13.5.2.3 項「OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示する方法」を参照してください）。



2. 「Discoverer Plus が使用する通信プロトコルを選択してください」オプションから「トンネリング」ラジオ・ボタンを選択します。

Discoverer Plus アプレットは、アプレット自体をダウンロードするために使用された通信プロトコルと同じ通信プロトコルを使用して、Discoverer と通信します。このオプションは、ファイアウォールが使用されているかどうかに関わらず動作します。

3. 「適用」をクリックします。
4. Oracle HTTP Server の適切なポートを開き、HTTP または HTTPS 通信のいずれかを受け入れます。

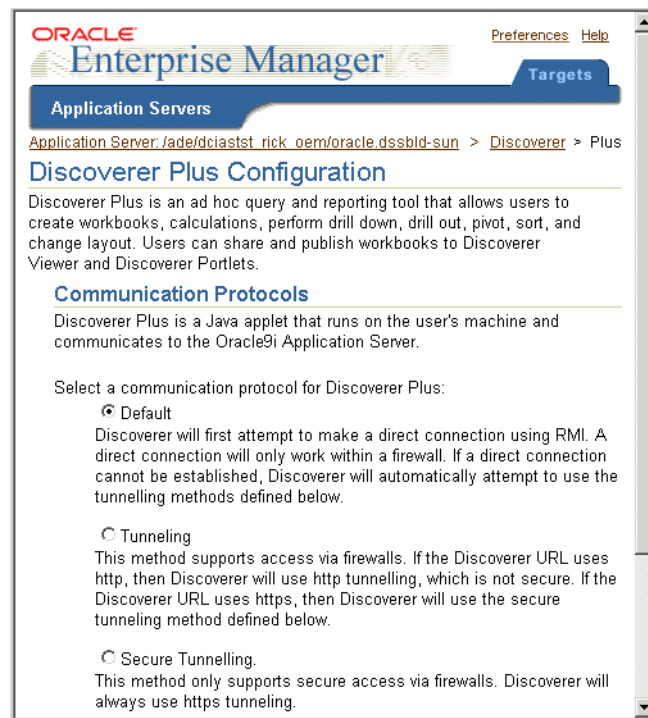
5. Discoverer Plus ユーザーに Discoverer Servlet の URL を提供します。

たとえば、<http://machinename.myorganization.com:7777/discoverer/plus> のようになります。

13.5.2.6 セキュア・トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法

セキュア・トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップするには、次の操作を行います。

1. Oracle Enterprise Manager を起動し、「Discoverer Plus 構成」ページを表示します（詳細は、13.5.2.3 項「OEM で「Discoverer Plus 構成」ページを表示する方法」を参照してください）。



2. 「Discoverer Plus が使用する通信プロトコルを選択してください」オプションから「セキュア・トンネリング」ラジオ・ボタンを選択します。

Discoverer Plus アプレットにより、Discoverer Servlet との通信に HTTPS プロトコルが使用されます。

3. 「適用」をクリックします。
4. Oracle HTTP Server の適切なポートを開き、HTTPS 通信を受け入れます。
5. Discoverer Plus ユーザーに Discoverer Servlet の URL を提供します。
たとえば、`https://machinename.myorganization.com:7777/discoverer/plus` のようになります。

13.5.3 Oracle9iAS Discoverer Plus リリース 9.0.2 と 4.1 の相違点

Oracle9iAS Discoverer Plus には Visibroker Gatekeeper は必要ありません。

13.5.4 セキュリティの脆弱性

Oracle9iAS Web Cache とともに Oracle9iAS Discoverer をデプロイしている場合、制限のあるユーザー環境においてはセキュリティにも暗示的な制限が適用されます。

詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 9.5 項「[Oracle9iAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合](#)」
- 『Oracle9i Application Server セキュリティ・ガイド』

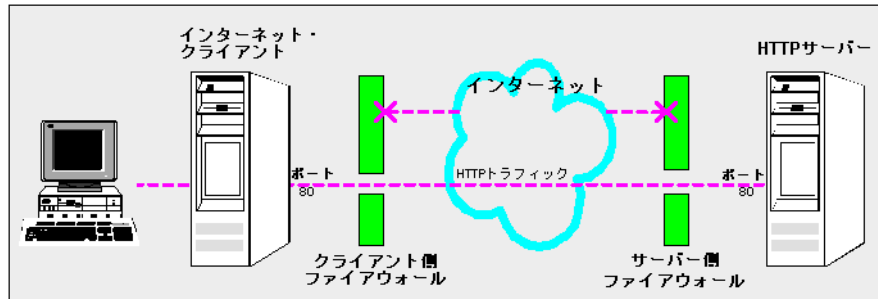
13.6 セキュリティについてよくある質問

13.6.1 ファイアウォールとは

ファイアウォールとは、インターネットと企業ネットワーク間のセキュリティ・ポリシーを確立するためのシステム、または複数のシステムの集まりを指します。

つまり、ファイアウォールはネットワークを囲む電子的な壁であり、許可されていないアクセスからネットワークを保護します。

図 13-2 クライアント側およびサーバー側のファイアウォールとの間の代表的なインターネット接続

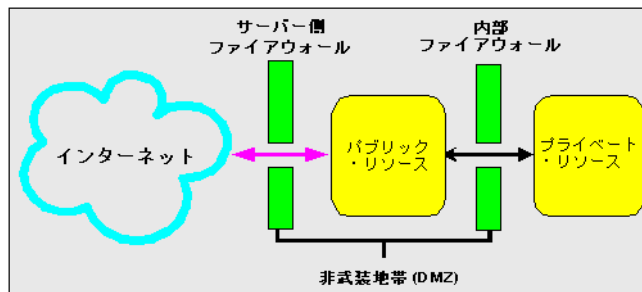


インターネット経由で通信する Web サーバー・マシンの場合、その Oracle HTTP Server とインターネットの間にファイアウォールを設置するのが一般的です。これは、サーバー側のファイアウォールと呼ばれます。この Web サーバー・マシンに接続する他の企業（または遠隔地にある部門）は、クライアント側のファイアウォールと呼ばれる専用のファイアウォールを設置するのが一般的です。企業のファイアウォール・ポリシーに準拠した情報はファイアウォールを通過することが許されるため、サーバー・マシンとクライアント・マシンとの間の通信が可能です。

13.6.2 非武装地帯（DMZ）とは

非武装地帯（DMZ）とは、もう一つのセキュリティ・レベルを提供するファイアウォール構成のことです。この構成では、保護ネットワークとインターネットの間にあるエクストラネットが DMZ です。DMZ 内部のリソースはパブリック・インターネットから参照可能ですが、保護されています。DMZ には、企業のパブリック Web サイト、ファイル転送プロトコル（FTP）サイトおよびシンプル・メール転送プロトコル（SMTP）のホストとなるサーバーが存在するのが一般的です。

図 13-3 非武装地帯（DMZ）



ファイアウォールのポリシーは企業によって異なり、さまざまな既製のファイアウォール・パッケージもあります。

理想的なファイアウォールの構成は、DMZ 内部のリソースが漏れると想定し、その場合でも、内部ネットワークとそのネットワーク上の機密データの破損を最小限にとどめられることです。これには、次の 2 つの手順があります。

- 機密のプライベート・リソース（少なくとも、データベースおよびアプリケーション・ロジック）を、DMZ から内部ファイアウォールの背後にある内部ネットワークに移動します。
- 機密のプライベート・リソースへの DMZ からのアクセス、および内部ネットワークからのアクセスを制限します。

注意：

- かわりのセキュリティ・ソリューションとして、DMZ に Oracle HTTP Server をデプロイし、内部ファイアウォールの背後で Discoverer サーバーおよびデータベースをデプロイする方法があります。ただし、この構成はサポートされていません。

13.6.3 HTTPS の概要と HTTPS を使用する理由

HTTPS プロトコルは、クライアントとサーバー間でセキュリティ保護された接続を確立することを目的とした Secure Sockets Layer (SSL) と呼ばれる業界標準プロトコルを使用しています。

このプロトコルには次に記載するセキュリティ機能が備わっており、インターネットなどの保護されていないネットワークでも機密データを伝送できます。

- 認証：クライアントがサーバーを識別し、サーバーが偽のサーバーでないことを確認できます（さらに、サーバーがクライアント・アプリケーションを識別して認証できます）。
- プライバシー：クライアントおよびサーバー間で伝送されるデータが暗号化されるので、第三者がこのメッセージを傍受しようとしても解読できません。
- 整合性：暗号化されたデータを受信すると、第三者により破損または変更されたかどうかわかります。

次の場合、Discoverer で SSL が有効です。

- Discoverer Plus を開始する URL が `https://` で始まり、アプレットのステータス・バーの左側に閉じたロックのマークが表示されている場合。
- Discoverer Viewer を開始する URL が `https://` で始まり、ブラウザのステータス・バーに閉じたロックのマークまたはそれに相当する記号（ブラウザによる）が表示されている場合。

13.6.4 イン트라ネットでの Discoverer の構成方法

イントラネットで Discoverer が動作するように構成するには、次の操作を行います。

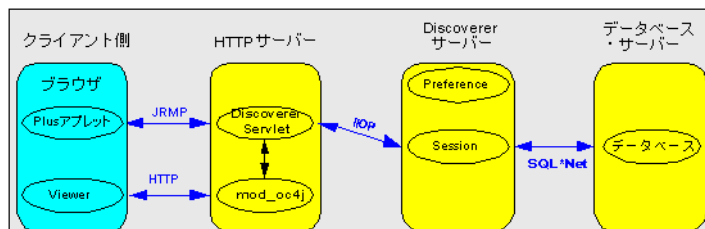
- Discoverer Viewer

イントラネット（ファイアウォールの内側）に Discoverer Viewer をデプロイする場合は、Oracle9iAS のインストール後に特別な構成は必要ありません。Discoverer Viewer では、HTTP 接続が使用されます。

- Discoverer Plus

イントラネット（ファイアウォールの内側）に Discoverer Plus をデプロイする場合は、Oracle9iAS のインストール後に特別な構成は必要ありません。Discoverer Plus では、JRMP（Discoverer のデフォルト通信プロトコル）を使用する直接接続が使用されます。

図 13-4 イン트라ネット内の Discoverer の典型的なネットワーク構成



13.6.5 ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法

ファイアウォールを通して Discoverer が動作するように構成するには、次の操作を行います。

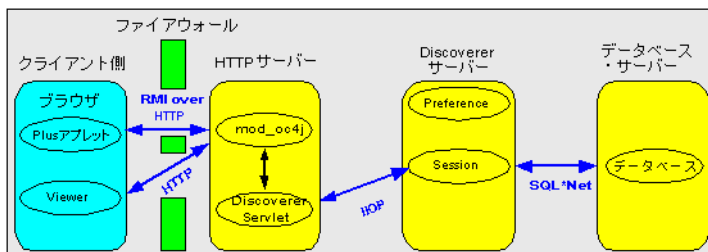
- Discoverer Viewer

暗号化を行わない（HTTP）Discoverer Viewer では、ファイアウォールがデフォルトのポート 80 などで HTTP 通信を通過させることを許可している限り、特別なセキュリティ構成は必要ありません。

- Discoverer Plus

暗号化を行わない（HTTP）Discoverer Plus では、特別なセキュリティ構成は必要ありません。パフォーマンスを向上するため、Discoverer Plus の通信プロトコルをトンネリングに変更し、Discoverer クライアントが JRMP の使用を試みずに HTTP を使用するように設定できます（詳細は、[13.5.2.5 項「トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」](#)を参照してください）。

図 13-5 HTTP を使用した Discoverer の典型的なファイアウォール構成



13.6.6 複数のファイアウォールを通して動作する Discoverer の構成

HTTP または HTTPS を使用している場合は、Discoverer は複数のファイアウォールを通して動作します（詳細は、[13.6.5 項「ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法」](#)を参照してください）。

13.6.7 イン트라ネットで暗号化を使用して Discoverer を構成する方法

暗号化を使用するように Discoverer を構成するには、次の操作を行います。

- Discoverer Viewer

mod_oss1 を構成して HTTPS を使用し（詳細は、『Oracle9i Application Server セキュリティ・ガイド』を参照してください）、HTTPS URL に Discoverer Viewer をデプロイします。

- Discoverer Plus

HTTPS URL に Discoverer Viewer をデプロイします。パフォーマンスを向上するため、Discoverer Plus の通信プロトコルをセキュア・トンネリングに変更し、Discoverer クライアントが JRMP および HTTP の使用を試みずに HTTPS を使用するように設定できます（詳細は、[13.5.2.6 項「セキュア・トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」](#)を参照してください）。

13.6.8 ファイアウォールを通して暗号化を使用する Discoverer の構成方法

ファイアウォールを通して暗号化を使用するように Discoverer を構成するには、次の操作を行います。

- Discoverer Viewer

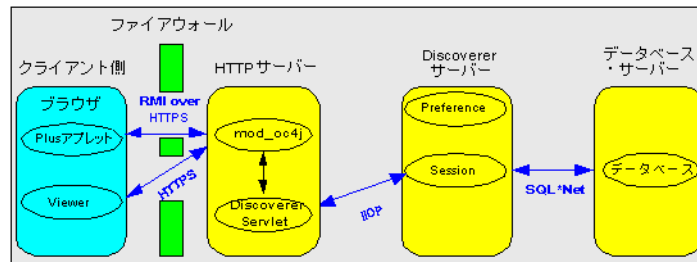
ファイアウォールを通して Discoverer Viewer が動作するように構成します（詳細は、[13.6.5 項「ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法」](#)を参照してください）。

それから、ファイアウォールによってデフォルトのポート 443 など HTTPS 通信の通過が許可されることを確認します。

■ Discoverer Plus

ファイアウォールを通して Discoverer Plus が動作するように構成します（詳細は、[13.6.5 項「ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法」](#)を参照してください）。それから、ファイアウォールによってデフォルトのポート 443 など HTTPS 通信の通過が許可されることを確認します。

図 13-6 HTTPS を使用した Discoverer の典型的なファイアウォール構成



13.6.9 Discoverer による通信の暗号化を確認する方法

Discoverer Viewer で、クライアントの Discoverer Viewer ブラウザ・ウィンドウの左下隅に、閉じたロックのマークまたは鍵のマークが表示されていることを確認します。

Discoverer Plus で、クライアントの Discoverer Plus アプレット・ウィンドウの左下隅に、閉じたロックのマークまたは鍵のマークが表示されていることを確認します。

13.6.10 Discoverer を SSL および SSL を使用しない通信用に構成する方法

Discoverer は、SSL および SSL を使用しない通信用に構成できます。たとえば、ファイアウォールの内側では JRMP による直接接続を使用するデフォルトの Discoverer Plus 通信プロトコルを使用し、ファイアウォールの外側にいるユーザー用には自動的に HTTP または HTTPS を使用するように構成できます。

13.6.11 イン트라ネット用およびファイアウォールを通してユーザーが Discoverer にアクセスするように Discoverer を構成する方法

Discoverer は、まず JRMP 接続の使用を試みてから、HTTP および HTTPS 接続の使用を試みるように構成できます。ファイアウォールの内側にいるユーザーは JRMP を使用して接続

しますが、JRMP はファイアウォール内でのみ動作する直接接続であるため、ファイアウォールの外側にいるユーザーは HTTP または HTTPS（URL による）で接続されます。

13.6.12 NAT デバイスと Discoverer の使用

標準の Network Address Translation（NAT）デバイスを使用して Discoverer をデプロイできます。

Oracle9iAS Discoverer および Oracle Applications

14.1 Oracle9iAS Discoverer および Oracle Applications

この章では、Oracle9iAS Discoverer を使用した Oracle Applications との統合機能について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 14.2 項「Discoverer 接続および Oracle Applications」
- 14.3 項「Oracle Applications 用に Discoverer 構成を設定する方法」
- 14.4 項「Oracle Applications のみの環境で Discoverer を構成する方法」
- 14.5 項「複合アプリケーション環境で Discoverer を構成する方法」

14.2 Discoverer 接続および Oracle Applications

Oracle Applications エンド・ユーザーが Discoverer Viewer および Discoverer Plus を使用できるようにするには、次の 2 つの方法を使用して Discoverer をデプロイします。

- Oracle Applications のみの環境で Discoverer を使用する場合は、デフォルトの接続タイプを Oracle Applications に設定できます（詳細は、[14.4 項「Oracle Applications のみの環境で Discoverer を構成する方法」](#)を参照してください）。
- 複合アプリケーション環境（Oracle Applications を使用するユーザーと使用しないユーザーが混在しているような場合）で Discoverer を使用する場合は、エンド・ユーザーが接続タイプを選択できるように設定します。この種のデプロイでは、デフォルトのプライベート接続タイプも設定します（詳細は、[14.5 項「複合アプリケーション環境で Discoverer を構成する方法」](#)を参照してください）。

次の図では、複合アプリケーション環境に Discoverer がデプロイされています。このため、「接続の作成：接続の詳細」ページに、「**Oracle Applications ユーザー**」チェック・ボックスが表示され、エンド・ユーザーが Oracle Applications 接続を指定できるようになっています。Oracle Applications 接続により、ユーザーが接続の詳細として、Oracle Applications のユーザー ID および職責を指定できます。Oracle Applications のみの環境では、ページから「**Oracle Applications ユーザー**」チェック・ボックス削除できます（詳細は、[14.4 項「Oracle Applications のみの環境で Discoverer を構成する方法」](#)を参照してください）。

図 14-1 「接続の作成：接続の詳細」ページと「Oracle Applications」チェック・ボックス

注意：

- Oracle Enterprise Manager を使用して、パブリックの Oracle Applications 接続を作成することもできます。詳細は、『Oracle9i Discoverer Administrator 管理ガイド』または Oracle9iAS Enterprise Manager のヘルプを参照してください。
- デフォルトの Oracle Applications Gateway User ID、パスワード、および Foundation Name は、pref.txt 構成ファイルで指定されます（詳細は、[14.3 項「Oracle Applications 用に Discoverer 構成を設定する方法」](#)を参照してください）。

14.3 Oracle Applications 用に Discoverer 構成を設定する方法

Oracle Applications 環境に Discoverer をデプロイするとき、pref.txt ファイル内の次の 2 つの環境設定を変更できます。

- AppsGWYUID : Gateway User ID およびパスワード（デフォルト値は「APPLSYSPUB/PUB」）を指定します。
- AppsFNDNAM : Foundation Name（デフォルト値は「APPS」）を指定します。

注意：

- これらの値を設定しない場合は、Discoverer により Oracle Applications のデフォルト値が使用されます。
- 構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

14.4 Oracle Applications のみの環境で Discoverer を構成する方法

Oracle Applications のみの環境では、Discoverer エンド・ユーザーが常に、プライベートな Oracle Applications 接続を作成するように設定すると便利です。このため、「接続の作成: 接続の詳細」ページから「**Oracle Applications ユーザー**」チェック・ボックスを削除し、デフォルトの接続タイプを Oracle Applications に設定します。

Oracle Applications のみの環境で Discoverer を構成するには、次の操作を行います。

まず、「接続の作成: 接続の詳細」ページから「**Oracle Applications ユーザー**」チェック・ボックスを削除します。

1. ui_config.xml ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. 「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスを削除するには、display_login_method_control タグの値を「false」に設定します。
3. ファイルを保存します。

「接続の作成: 接続の詳細」ページから「**Oracle Applications ユーザー**」チェック・ボックスを削除した後で、Oracle Applications にデフォルトの接続タイプを設定します。

4. テキスト・エディタで pref.txt ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。

ヒント: Windows を使用している場合は、Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle9i Application Server - <HOME_NAME>」→「Discoverer」→「Edit Preferences」を選択して、メモ帳で pref.txt を開くことができます。

5. デフォルトの接続タイプを Oracle Applications に設定するには、DefaultUserTypesApps 環境設定の値を「1」に設定します。
6. ファイルを保存し、テキスト・エディタを閉じます。

pref.txt の変更内容を有効にするには、環境設定を適用する必要があります。

7. 環境設定の変更を適用するには、次の操作を行います。

- UNIX の場合、`applypreferences.sh` ファイルを含むディレクトリに移動して、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
> applypreferences.sh
```

構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

- Windows の場合、Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle9i Application Server - <HOME_NAME>」→「Discoverer」→「Apply Preferences」の順に選択します。または、コマンドラインで次のコマンドを入力します。

```
> dis51pr -apply
```

ヒント: 現在のディレクトリにある `error.txt` ファイルをチェックして、環境設定が正しく適用されたかを確認できます。

8. 次の操作を行って Oracle9iAS Discoverer サービスを停止し、再起動します。

- UNIX プラットフォームの場合は、[6.7.1 項「UNIX で Preference コンポーネントを開始および停止する方法」](#)を参照してください。
- Windows プラットフォームの場合は、[6.7.2 項「Windows で Preference コンポーネントを開始および停止する方法」](#)を参照してください。

これで、Discoverer エンド・ユーザーは、Oracle Applications ユーザーとして接続できる Oracle Applications 接続しか作成できません。

14.5 複合アプリケーション環境で Discoverer を構成する方法

複合アプリケーション環境（詳細は、[14.2 項「Discoverer 接続および Oracle Applications」](#)を参照）では、Discoverer エンド・ユーザーが、作成できるプライベートな Discoverer 接続のタイプを選択できるように設定します。このため、「接続の作成: 接続の詳細」ページに「**Oracle Applications ユーザー**」チェック・ボックスを表示し、デフォルトの接続タイプを Oracle Applications に設定します。

複合アプリケーション環境で Discoverer を構成するには、次の操作を行います。

まず、「接続の作成: 接続の詳細」ページに「**Oracle Applications ユーザー**」チェック・ボックスを表示します。

1. `ui_config.xml` ファイルを開きます。

ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

2. 「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスを表示するには、`display_login_method_control` タグの値を「true」に設定します。

3. ファイルを保存します。

「接続の作成: 接続の詳細」ページで「**Oracle Applications ユーザー**」チェック・ボックスをデフォルトで選択するかどうかを指定します

4. テキスト・エディタで `pref.txt` ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。

ヒント: Windows を使用している場合は、Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle9i Application Server - <HOME_NAME>」→「Discoverer」→「Edit Preferences」を選択して、メモ帳で `pref.txt` を開くことができます。

5. `DefaultUserTypesApps` 環境設定の値を、次のように設定します。

- デフォルトで「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスを選択しない場合は、`DefaultUserTypesApps` を「0」に設定します。
- デフォルトで「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスを選択する場合は、`DefaultUserTypesApps` を「1」に設定します。

6. ファイルを保存し、テキスト・エディタを閉じます。

`pref.txt` の変更内容を有効にするには、環境設定を適用する必要があります。

7. 環境設定の変更を適用するには、次の操作を行います。

- UNIX の場合、`applypreferences.sh` ファイルを含むディレクトリに移動して、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
> applypreferences.sh
```

ファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

- Windows の場合、Windows の「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle9i Application Server - <HOME_NAME>」→「Discoverer」→「Apply Preferences」の順に選択します。または、コマンドラインで次のコマンドを入力します。

```
> dis51pr -apply
```

8. 次の操作を行って Oracle9iAS Discoverer サービスを停止し、再起動します。

- UNIX プラットフォームの場合は、[6.7.1 項「UNIX で Preference コンポーネントを開始および停止する方法」](#)を参照してください。
- Windows プラットフォームの場合は、[6.7.2 項「Windows で Preference コンポーネントを開始および停止する方法」](#)を参照してください。

これで、Discoverer のエンド・ユーザーが作成するプライベートな Discoverer 接続のタイプを選択できるようになります。Oracle Applications ユーザーが新規接続を作成する場合の例を、次に示します。次の設定値により、「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックスが表示され、デフォルトで選択されます。

- DefaultUserTypesApps = 1
- display_login_method_control = true

図 14-2 「接続の作成: 接続の詳細」ページの「Oracle Applications」チェック・ボックスがデフォルトで選択されている状態

接続の作成: 接続の詳細
この接続の名前(覚えやすい名前にしておくといいいでしょう)を指定します。データベース・アカウントの詳細に続いてこの接続の説明を入力します。

接続名および説明

接続名: Performance reports

接続の説明: Look at performance reports

ロケール: ユーザーのブラウザ言語設定

データベース・アカウントの詳細

ユーザー名: appsuser1

パスワード: [masked]

データベース: reports

☒ Oracle Applications ユーザー

Discoverer の構成ファイル

A.1 Discoverer の構成ファイル

この付録では、Discoverer の構成ファイルに関するリファレンス情報について説明します。
説明する項目は次のとおりです。

- [A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)
- [A.3 項「ui_config.xml の構成設定のリスト」](#)
- [A.4 項「configuration.xml の構成設定のリスト」](#)
- [A.5 項「plus_config.xml の構成設定のリスト」](#)

A.2 Discoverer ファイルの場所のリスト

Oracle9iAS Discoverer の構成および管理には、本書で参照されているさまざまなファイルを使用します。下の表に、これらのファイルが保存されている場所を、UNIX および Windows プラットフォームに分けて示します。

ファイル名	説明および場所
applypreferences.sh	<p>このファイルは、キャッシュで Discoverer の環境設定を更新するスクリプト・ファイルです (UNIX 特有)。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合 : なし</p>
blaf.css	<p>このカスケーディング・スタイルシート・ファイルには、Discoverer 用のブラウザの外観設定が保存されます。Viewer の現在の外観設定を見るには、blaf.htm を参照します (下の blaf.htm エントリを参照してください)。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BI_Forms/applications/discoverer/web/common/xsl</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_BI_Forms\applications\discoverer\web\common\xsl</p>
blaf.htm	<p>このファイルには、Viewer の外観設定の例が含まれ、どのカスタマイズ・タグが現在設定されているかを確認できます。このファイルには、blaf.css に保存されている設定が表示されます (上の blaf.css エントリを参照してください)。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BI_Forms/applications/discoverer/web/common/xsl</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_BI_Forms\applications\discoverer\web\common\xsl</p>

ファイル名	説明および場所
configuration.xml	<p>このファイルには、Discoverer の構成設定が保存されています。Oracle Enterprise Manager の「Discoverer サービス構成」ページを使用して、このファイルの設定の一部を構成することもできます。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BI_Forms/applications/discoverer/web/WEB-INF</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥WEB-INF</p>
defaults.txt	<p>このファイルには、出荷時のデフォルト環境設定が保存されています。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\discoverer902¥util</p>
dis51pr	<p>このファイルは、.reg_key.dc ファイルに保存されている環境設定を管理するのに使用するコマンドライン・ユーティリティを実行します。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer902/bin</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\discoverer902¥bin</p>
discwb.sh	<p>このスクリプト・ファイルは、/discoverer902/util/ にある、Discoverer ユーティリティ・スクリプトの実行に必要な PATH およびその他の環境変数を設定します。このスクリプトは、他のほとんどのスクリプト・ファイルに含まれているので、ファイル内のコマンドは自動的に実行されます。そのため、Oracle Discoverer の提供するスクリプトとは別に作業する場合以外は、スクリプトを手動で実行する必要はありません。</p> <p>プロンプトで次のコマンドを入力します。</p> <pre>> ../discwb.sh</pre> <p>注意 : ピリオドの間にはスペースを入力してください。</p>
plus_config.xml	<p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BI_Forms/applications/discoverer/web/plus_files/xsl/</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥plus_files¥xsl¥</p>
pref.txt	<p>このファイルには、Discoverer 中間層の環境設定が保存されており、.reg_key.dc ファイルを生成するために使用されます。インストール時に、default.txt ファイルの設定がこのファイルに移入されます。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\discoverer902¥util</p>

ファイル名	説明および場所
registersession.bat	<p>このファイルは、Discoverer Session コンポーネントを登録するスクリプト・ファイルです（Windows 特有）。</p> <p>UNIX の場合：なし</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\discoverer902\util</p>
registersession.sh	<p>このファイルは、Discoverer Session コンポーネントを登録するスクリプト・ファイルです（UNIX 特有）。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合：なし</p>
startoad.sh	<p>このファイルは、Object Activation Daemon を起動するスクリプト・ファイルです。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合：なし</p>
startall.sh	<p>Discoverer、OAD、OSAGENT、および Discoverer Preference コンポーネントを開始します（UNIX 特有）。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合：なし</p>
startpreference.sh	<p>このファイルは、Discoverer Preference コンポーネントを開始（および登録）するスクリプト・ファイルです（UNIX 特有）。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合：なし</p>
stopall.sh	<p>Discoverer、OAD、OSAGENT、および Discoverer Preference コンポーネントを停止します（UNIX 特有）。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合：なし</p>
stoppreference.sh	<p>このファイルは、Discoverer Preference コンポーネントを停止（および登録解除）するスクリプト・ファイルです（UNIX 特有）。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合：なし</p>
tnsnames.ora	<p>このファイルには、Oracle9iAS Discoverer を使用してアクセスできるすべてのデータベースの名前およびエイリアスが含まれています。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/network/admin</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\network\admin</p>

ファイル名	説明および場所
ui_config.xml	<p>このファイルには、Discoverer のユーザー・インタフェース構成設定が保存されています。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BI_Forms/applications/discoverer/web/common/xsl</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥common¥xsl</p>
unregistersession.bat	<p>このファイルは、Discoverer Session コンポーネントの登録を解除するスクリプト・ファイルです（Windows 特有）。</p> <p>UNIX の場合：なし</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\¥discoverer902¥util</p>
unregistersession.sh	<p>このファイルは、Discoverer Session コンポーネントを登録するスクリプト・ファイルです（UNIX 特有）。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer902/util</p> <p>Windows の場合：なし</p>

- 注意：**
- Windows NT では、環境設定は Windows サービスによって制御されます。
 - UNIX では、環境設定は startpreference.sh および stoppreference.sh スクリプトによって制御されます。

A.3 ui_config.xml の構成設定のリスト

注意： ui_config.xml 設定のカスタマイズの詳細は、10.1 項「Discoverer Viewer のカスタマイズ」を参照してください。

ユーザー・インタ フェース・エリア	設定	説明
構成	base_dir=". "	画像およびヘルプのディレクトリの場所を指定します（デフォルトと異なる場合）。
外観	option id="display_login_method_control" state="false"	「Applications ユーザー」チェック・ボックスを表示するかどうかを指定します。
	option id="display_show_xml_link" state="true"	「XML の表示」リンクを各ページの下部に表示するかどうかを指定します。

ユーザー・インタ フェース・エリア		設定	説明
動作		option id="display_language_control" state="true"	「言語」ドロップ・ダウン・リストを「接 続」ダイアログ・ボックスに表示するかど うかを指定します。
		option id="display_rerun_query_link" state="true"/	「問合せの再実行」リンクをワークシー ト・ページに表示するかどうかを指定しま す。 注意： Oracle9iAS Web Cache を使用して いる場合は、この値を「false」に設定しま す。
		option id="display_preferences_link" state="true"/	「環境設定」グローバル・アイコンを表示 するかどうかを指定します。 注意： Oracle9iAS Web Cache を使用して いる場合は、この値を「false」に設定しま す。
		option id="display_presentation_options_link" state="true"/	「表示オプション」リンクをワークシー ト・ページに表示するかどうかを指定しま す。 注意： Oracle9iAS Web Cache を使用して いる場合は、この値を「false」に設定しま す。
		option id="use_javascript_enhanced_ui" state="true"	JavaScript 拡張ユーザー・インタフェース を使用するかどうかを指定します。
		option id="sticky_worksheets" state="true"	ワークシート・ドリルおよびピボット操作 が単一セッションの同じワークシート内で 記憶されるかどうかを指定します。
表示テンプレート		option id="debug_mode" state="false"/	「true」に設定すると、Viewer で生成され る各 HTML ページに、Viewer Servlet の 内部状態を示す XML を含むテキスト・ ボックスが表示されます。この情報は、カ スタム XSL またはデバッグ機能を開発す るときに便利です。
		look name="Corporate Look" component name="xxx" state="true false"	表示テンプレートの名前を指定します。 現在の表示テンプレートの特定の UI コン ポーネントを表示または非表示に設定しま す（コンポーネント名の詳細は、ui_ config.xml 内のコメントを参照してくださ い）。

ユーザー・インタ フェース・エリア	設定	説明
NLS	resource id="xxx" href="yyy" help="zzz"	特定の言語 xxx に使用するメッセージ・ファイル yyy およびヘルプ・ファイル zzz を指定します。
	resource id="es" href="resources/es.xml" help="es" images="en"	images 属性により、画像ディレクトリ内のサブディレクトリを指定して、このロケールに特有の画像を見つけます。
ヘルプ	<page name="add_connection" file="add_conn.htm"/>	接続の作成オンライン・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	<page name="add_eul" file="sel_eul.htm"/>	接続の作成 : EUL ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	<page name="add_responsibility" file="sel_resp.htm"/>	接続の作成 : 職責ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	<page name="connection_list" file="connections.htm"/>	接続リスト・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	<page name="home" file="index.htm"/>	トップレベルのヘルプ・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	<page name="launch_plus" file="app_launch.htm"/>	Discoverer Plus の起動ページのヘルプ・ページ名を指定します（このリリースでは使用されていません）。
	<page name="sort_crosstab" file="sort_crosstab.htm"/>	クロス集計のソート・ページのヘルプ・ページ名を指定します（このリリースでは使用されていません）。
	<page name="sort_table" file="sort_table.htm"/>	テーブルのソート・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	<page name="update_eul" file="edit_eul.htm"/>	接続の更新 : EUL ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	<page name="update_main" file="update_conn.htm"/>	接続の更新ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	<page name="update_responsibility" file="edit_resp.htm"/>	接続の更新 : 職責ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="data" file="worksheet_display.htm"	データ・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="edit_layout" file="layout.htm"	レイアウトの編集ページのヘルプ・ページ名を指定します。

ユーザー・インタ フェース・エリア	設定	説明
	page name="export" file="export.htm"	エクスポート・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="parameters" file="edit_parameters.htm"	パラメータ・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="preferences" file="preferences.htm"	環境設定ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="presentation" file="presentation_options.htm"	表示オプション・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="reconnect" file="chall_pw.htm"	再接続ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="run_query" file="run_query.htm"	問合せの開始ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="running_query" file="query_progress.htm"	問合せの実行ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="workbooks" file="workbook_list.htm"	ワークブック・ページのヘルプ・ページ名を指定します。
	page name="worksheets" file="worksheet_list.htm"	ワークシート・ページのヘルプ・ページ名を指定します。

A.4 configuration.xml の構成設定のリスト

設定	説明
/disco:configuration/@locale	デフォルトのロケールを指定します。Discoverer Viewer がユーザー・インタフェースの表示に使用するロケールは、エンド・ユーザーのブラウザの言語設定によって指定されます。この設定が定義されていない場合は、Viewer は中間層で設定されているシステムのロケールをデフォルトとして使用します。Viewer がシステムのロケールを確認できない場合は、ここで設定されているロケールをデフォルトとして使用します。
/disco:configuration/@rmi	サーブレットが Plus アプレットからの RMI リクエストをリスニングする必要があるかどうかを指定します。これを「false」に設定すると、Discoverer Plus の動作が妨害されますが、中間層で少量のリソースを解放できます。
/disco:configuration/@webcache	Discoverer Servlet によって生成されるページをキャッシュするために Oracle9iAS Web Cache を使用するかどうかを指定します。
/disco:configuration/portlet/@maximumSessions	

設定	説明
/disco:configuration/portlet/xsl_translator/*	Discoverer Servlet ではなく Discoverer Portlet Provider 用ということ以外は Servlet の場合と同じです。
/disco:configuration/server/@session	Discoverer Plus および Discoverer Viewer 用の Discoverer サーバーのインスタンス名を指定します。
/disco:configuration/servlet/@charting	ワークブックに保存されたグラフを表示するかどうかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ グラフを表示する場合は「true」に設定します（デフォルト）。 ■ グラフを表示しない場合は「false」に設定します（グラフが必要のない場合にパフォーマンスが向上されます）。
/disco:configuration/servlet/@exportRefreshPeriod	ブラウザが元の URL にリダイレクトされるまでの遅延時間（秒）を指定します。この引数を使用して、エクスポート操作中のブラウザのタイムアウトを防止します。 注意： この設定は、fm 引数に有効な値が指定された場合にのみ適用されます。
/disco:configuration/servlet/@queryRefreshPeriod	問合せの進行状況ページが表示（または再表示）される前の遅延時間（秒）を指定します。Discoverer Servlet を使用して、記述したアプリケーションにデータを返す場合に、問合せの進行状況ページを処理するコードを記述する代わりにこの引数を使用できます。
/disco:configuration/servlet/@userDefinedConnections	ユーザーがプライベート接続を作成をできるかどうかを指定します。「false」に設定すると、ユーザーはパブリック接続しか作成できません（ユーザーが独自の URL の作成方法を知っている場合は、一時的な接続を作成できます）。
/disco:configuration/servlet/xsl_translator/@cache	サプレットで XSL をキャッシュするかどうかを指定します。
/disco:configuration/servlet/xsl_translator/@path	discoverer.xsl ファイルのパスを指定します。
/disco:configuration/servlet/xsl_translator/@processor	異なる XSL Processor を選択できます。
/disco:configuration/servlet/xsl_translator/styleSheet_pool	パフォーマンスを最大化するための、スタイルシートのプールの方法を設定できます（詳細は、 12.5.4 項「XSL スタイルシートのプーリングを使用して、Discoverer Viewer の拡張性を向上する方法」 を参照してください）。

設定	説明
maximumSessions	<p>この設定は、与えられた時間で Portlet Provider が起動できるセッションの最大数を指定します。</p> <p>Discoverer Portlet Provider は、バックグラウンドでポートレットのコンテンツをリフレッシュするために、Discoverer Sessions を実行します。また、ユーザーがポートレットを公開またはカスタマイズする場合にも、Discoverer Sessions を使用します。</p> <p>セッション数が最大数に達すると、その数が最大数を下回るまで、Portlet Provider によりバックグラウンドのリフレッシュが遅延されます。セッション数が最大数に達しているときにユーザーがポートレットをカスタマイズまたは公開しようとする、後で再実行するように指示されます。</p> <p>この設定のデフォルト値は 20 です。</p>
query_progress_delay	<p>問合せの進行状況ページが表示（または再表示）される前の遅延時間（秒）を指定します。</p> <p>注意：URL パラメータ qpd を使用して、このパラメータをユーザーごとに設定することもできます（詳細は、8.7 項「Discoverer Viewer の URL 引数」を参照してください）。</p>

A.5 plus_config.xml の構成設定のリスト

設定	説明
transport	<p>Discoverer Plus アプレットおよび Discoverer Servlet が通信に使用するプロトコルを指定します。</p> <p>ヒント：Oracle Enterprise Manager を使用してこの設定を変更できます。</p>
jvm	<p>使用する JVM のバージョン（JInitiator など）を指定します。特定のプラットフォーム、ブラウザ、およびブラウザ・バージョンごとに、異なる JVM を指定できます。</p>

Discoverer でトレース情報を生成する方法

B.1 Discoverer でトレース情報を生成する方法

この章では、トレース情報を生成する理由およびその生成方法について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- [B.2 項「トレース情報について」](#)
- [B.3 項「トレース情報の生成方法」](#)

B.2 トレース情報について

Discoverer サーバーが実行している操作を正確に知りたい場合があります。たとえば、Web サーバーが応答していないと思われる場合、Discoverer SQL 問合せがデータを返していないと思われるような場合です。このような場合には、トレース情報を生成してログ・ファイルに保存し、問題の診断を行うことができます。

B.3 トレース情報の生成方法

ログ・ファイルにトレース情報を生成するには、次の操作を行います。

1. テキスト・エディタで登録セッションのスクリプト・ファイルを開きます。

このファイルの名前は、Discoverer サーバーを実行しているオペレーティング・システム・プラットフォームによって次のように異なります。

- UNIX では、`registersession.sh` ファイルを開きます。
- Windows では、`registersession.bat` ファイルを開きます。

これらのファイルの場所の詳細は、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

2. 次の構文を使用して、ファイルに `logdir` エントリを追加します。

```
-logdir <directory> -loglevel <level>
```

エントリの変数は、次のとおりです。

- `<directory>` は、作成するログ・ファイルのディレクトリです。
- `<level>` は 1 ～ 3 の数で、ログ・ファイルに保存される詳細情報のレベルを示します（数が大きいほどより詳細な情報が保存されます）。

たとえば、変更前は次のような行が含まれています。

```
oadutil ... dis51ws.exe -a session -a MySession -a -preference -a MyPreference
...
```

`logdir` コマンドを追加した後では、次のようになります。

```
oadutil ... dis51ws.exe -a session -a MySession -a -preference -a MyPreference  
-a -logdir -a C:\temp -a -loglevel -a 3 ...
```

注意：logdir 引数を省略すると、ログ・ファイルが現在のディレクトリに作成されます。

3. Discoverer Session コンポーネントの登録を解除します（セッションの登録解除の詳細は、6.6 項「[OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除する方法](#)」を参照してください）。
4. セッションを再登録します（セッションの再登録の詳細は、6.6 項「[OAD に Discoverer Session コンポーネントを登録または登録解除する方法](#)」を参照してください）。

注意：

- トレース情報の生成を停止するには、次の操作を行います。
 1. 登録セッション・スクリプトを含むファイルから、logdir および loglevel パラメータを削除します。
 2. セッションの登録を解除します。
 3. セッションを再登録します。

C

よくある質問

C.1 よくある質問

この項では、よくある質問について説明します。

- どのような環境変数が設定されますか
- ネットワーク・エラーが発生した場合には何をすべきですか
- 「ORA-12154 TNS: サービス名を解決できませんでした。」と表示された場合には何をを行いますか
- `pref.txt` ファイルが破損しているかどうか、どのようにして確認しますか
- パブリック接続はどのようにして作成しますか
- Discoverer エンド・ユーザーはどのようにしてプライベート接続を作成しますか

どのような環境変数が設定されますか

インストール作業中には、VisiBroker 製品用の 2 つの環境変数が設定されます。

```
VBROKER_JAVAVM = %ORACLE_9i_HOME%\jre11728o\bin\jre
VBROKER_TAG = -D
```

CLASSPATH 変数は変更されません。

PATH 変数は次のように更新されます。

```
PATH = %iSUITES_HOME%\bin;%ORACLE_9i_HOME%\vbroker\bin;%ORACLE_9i_
HOME%\bin; %iSUITES_HOME%\Apache\Perl\5.00503\bin\mswin32-x86;%PATH%
```

これにより、他の製品との競合を最小限に抑えることができます。

ネットワーク・エラーが発生した場合には何をすべきですか

ログイン中に Oracle9iAS Discoverer でネットワークの例外を受信した場合は、次のことを確認してください。

- CLASSPATH または PATH の内部に、Oracle9iAS Discoverer を妨害していると考えられるディレクトリまたは jar ファイルが存在するかどうか。Oracle9iAS Discoverer は、VisiBroker CORBA V4.5 および JDK 1.3 を使用します。
- VisiBroker SmartAgent および OAD が起動しており、新規セッションを開始できることを確かめます。
- Preference コンポーネントが起動していることを確かめます。Preference コンポーネントが起動していることを確認するには、Windows のタスク・マネージャを使用して、`Dis51pr.exe` が実行されていることを確かめます。

「ORA-12154 TNS: サービス名を解決できませんでした。」と表示された場合には何を行いますか

これは Oracle のエラーの 1 つで、「データベース」フィールドに指定されたデータベースの別名に、セッションが接続できないときに表示されます。次のことを確認してください。

- データベースの別名が、tnsnames.ora ファイルに存在しているか。
- データベースの別名が、セッションを実行する各マシンの tnsnames.ora ファイルに存在しているか。

ヒント : SQL*Plus または他の Oracle 製品をそのマシンで実行している場合は、それらを使用してデータベースに接続してください。

pref.txt ファイルが破損しているかどうか、どのようにして確認しますか

破損されていることをファイルから直接確認できません。pref.txt ファイルが破損していることを確認するには、次の手順を実行します。

1. pref.txt ファイルのコピーを保存します（ファイルの場所については、[A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. 元の pref.txt ファイルを削除します。
3. Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
4. 「ファイル名を指定して実行」ウィンドウに regedit と入力し、[Enter] キーを押します。
5. 次の場所でレジストリ・キーを検索します。
HKEY_LOCAL_MACHINE¥software¥oracle¥Oracle9iAS Discoverer
6. 検索したレジストリ・キーを削除します。
7. defaults.txt ファイルのコピーを作成し（ファイルの場所については [A.2 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照）、コピーしたファイルの名前を pref.txt に変更します。
8. 「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle9i Application Server - <HOME_NAME>」→「Discoverer」→「Apply Preferences」の順に選択します。
9. Discoverer セッションを実行します。

セッションが正しく実行された場合は、元の pref.txt ファイルが破損している可能性があります。
10. セッションを終了します。
11. 元の pref.txt ファイルには破損した要素が含まれている可能性があるため、保存済のコピーを削除します。

12. 新しい pref.txt ファイルを編集して、エンド・ユーザーの環境設定をリセットします。詳細は、[7.5 項「すべてのユーザーに対するユーザー環境設定を設定する方法」](#)を参照してください。

パブリック接続はどのようにして作成しますか

詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

Discoverer エンド・ユーザーはどのようにしてプライベート接続を作成しますか

詳細は、『Oracle9iAS Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

記号

.reg_key.dc ファイル 7-4

A

applypreferences.sh A-2

B

BLAF

blaf.css 10-9, A-2

blaf.htm 10-9, A-2

外観設定の例 10-9

C

configuration.xml A-3, A-8

設定 A-5

CORBA

Discoverer CORBA コンポーネントについて 6-2

Discoverer CORBA コンポーネントの管理 6-2

登録されたコンポーネントを表示する方法 6-4

CORBA コンポーネント

OAD 1-11

Preference 1-11, 1-12

Session 1-11

SmartAgent 1-11

D

defaults.txt A-3

dis51pr 7-15, A-3

コマンドライン・ユーティリティ

引数のリスト 7-15

Discoverer

CORBA コンポーネント 1-11

J2EE コンポーネント 1-9

Oracle Applications 14-2

Oracle9i Application Server 1-7

Plus Servlet 1-10

Portlet Provide Servlet 1-10

Servlet 1-10

URL 引数 8-2

Windows サービス

開始および停止 4-2

アーキテクチャ 1-7

起動 3-2

実行 3-2

複数のマシンへのインストール 5-2

プロセス 1-14

Discoverer Java アプレット 1-8

Discoverer Plus 3-3

Internet Explorer での実行 3-4

MS Internet Explorer 3-3

Netscape 3-3

Netscape Navigator での実行 3-8

URL 引数 8-7

アプレットのアップグレード 1-8

概要 1-4

クライアント・マシンの必要条件 1-8

実行 3-3

セキュリティの設定 3-3

セッションのタイムアウト 3-4

ダイアルアップを介したアクセス 3-4

プロセス 1-14

Discoverer Plus のセキュリティ設定 3-3

Discoverer Preference コンポーネント

実行するマシンの指定 5-7

Discoverer Viewer

- Cookie 1-8
- JavaScript 拡張ユーザー・インタフェース 1-8
- 概要 1-4
- クライアント・マシンの必要条件 1-8
- 構成ファイル A-5
- 実行 3-14
- プロセス 1-15
- Discoverer Viewer のカスタマイズ
 - CSS ファイル 10-4
 - JavaScript をオフにする 10-16
 - XML ファイル 10-5
 - 外観 10-10
 - 概要 10-2
 - 必要なツール 10-3
 - 表示オプション 10-6
 - 表示テンプレート 10-7
 - 表示テンプレートの作成 10-14
 - ロゴの変更 10-11
- Discoverer Viewer の実行 3-14
- 「Discoverer サービス構成」ページ
 - OEM の起動 2-3, 13-9
- Discoverer サービス・コンポーネント
 - Preference コンポーネント 1-12
 - Session コンポーネント 1-11
 - 登録 6-2
 - 登録解除 6-2
- Discoverer サービス・コンポーネントの登録 6-2
 - Windows の「スタート」メニューから 6-7
 - コマンドラインから 6-5
- Discoverer サービス・コンポーネントの登録解除 6-2
 - Windows の「スタート」メニューから 6-7
 - コマンドラインから 6-5
- Discoverer サービスの Session コンポーネント 1-11
- Discoverer 接続
 - Oracle Applications 14-2
- Discoverer のインストール
 - Oracle9i Application Server の一部 1-7
 - 複数のマシンへ 5-2
- Discoverer の階層構造
 - Discoverer サービス層 (Plus および Viewer) 1-9
 - クライアント層 (Plus および Viewer) 1-8
 - データベース層 (Plus および Viewer) 1-13
- Discoverer の起動 3-2
- Discoverer の構成ファイル A-5, A-8, A-10
- Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャ
 - 活用する方法 12-10
 - OC4J 処理の数の指定 12-11

- OC4J のメモリー使用量パラメータの指定 12-11
- Oracle9iAS の拡張性機能の使用 12-10
- XSL スタイルシートのプーリングの使用 12-11
- Discoverer のセキュリティ
 - 「Discoverer サービス構成」ページ 2-3, 13-9
 - HTTPS との構成 13-15
 - JRMP、HTTP、HTTPS 13-5
 - Portal 13-5
 - Single Sign-On 13-4
 - Single Sign-On を使用しない環境 13-4
 - 概要 13-2, 13-3
 - セキュア・トンネリング 13-8
 - 接続 13-3
 - 通信プロトコル 13-8
 - データベース 13-3
 - デフォルト 13-8
 - トンネリング 13-8
 - ネットワークのセキュリティ 13-5
 - ビジネスエリア 13-3
 - レベル 13-2
- Discoverer のトラブルシューティング B-2
- Discoverer のパフォーマンスおよび拡張性の最適化 12-2
- discwb.sh A-3
- DISPLAY 変数
 - X Server 用に構成 3-17

F

- FAQ
 - 一般 C-2
 - セキュリティについて 13-16
- framedisplaystyle
 - および JAWS 8-8

H

- HTTP 13-5
- HTTPS 13-5
 - 概要 13-18

I

- iAS、Oracle9i Application Server を参照 1-7
- IE での Discoverer Plus の実行 3-4
- Internet Explorer
 - Discoverer の実行 3-4

J

J2EE コンポーネント

概要 1-9

JAWS

framedisplaystyle 8-8

最大化 8-8, A-10

使用 A-10

JRMP 13-5

M

mod_osso.conf ファイル 13-4

N

NAT (Network Address Translation)、標準の NAT を
使用する Discoverer のデプロイ 13-22

Netscape Navigator 3-3

Discoverer の実行 3-8

Netscape での Discoverer Plus の実行 3-8

O

OAD 1-11, 6-2

Discoverer Session コンポーネントを登録または登
録解除する方法 6-5

OAD が実行中で応答していることを確認する方法
6-3

概要 1-12

OEM 2-2

Viewer/Portal でのグラフの使用 2-2

概要 2-2

作業 2-2

使用 2-2

スタイルシートのプーリング 2-2

セッションのプーリング 2-2

通信プロトコル 2-2

データベース・パスワードの変更 2-2

問合せ進行状況の遅延 2-2

パブリック接続の作成 2-2

ロケールの設定 2-2

ORA-12154 TNS エラー・メッセージ C-2

Oracle Applications 14-2

AppsFNDNAM 14-3

AppsGWYUID 14-3

Discoverer での使用 14-2

Oracle9iAS Discoverer 14-2

構成設定 14-3

Oracle Applications のみの環境 14-4

「Oracle Applications ユーザー」チェック・ボックス
14-4, 14-5

Oracle Enterprise Manager 2-2

起動 2-3

Oracle9i Application Server

Oracle9iAS Discoverer 1-7

Oracle9iAS Discoverer

Discoverer Plus について 1-4

Discoverer Viewer について 1-4

Oracle9iAS Portal 11-2

概要 11-2

スタイルシートのプーリング 12-11

Oracle9iAS Web Cache

Viewer とともに使用 9-6

Viewer とともに使用する場合の注意 9-11

Viewer との使用 9-7

Viewer のスティッキーなワークシート動作を使用
不可能にする方法 9-8, 9-10

Viewer 用にオンにする方法 9-8

概要 9-2

使用 9-2

「問合せの再実行」リンクを表示し、「環境設定」と
「表示オプション」リンクを隠す方法 9-8

動作方法 9-5

利点 9-4

P

plus_config.xml A-3

plus_config.xml ファイル A-10

pref.txt A-3

Preference コンポーネント

Discoverer サービス層 1-12

開始および停止する方法 6-7

R

registerSession.bat A-4

registerSession.sh A-4

S

Single Sign-On

mod_osso.conf ファイル 13-4

- および Discoverer 13-4
- 概要 13-4
- 有効化 13-4
- SmartAgent 1-11
- SSL
 - Discoverer を SSL および SSL を使用しない通信用に構成する方法 13-21
- startall.sh A-4
- startoad.sh A-4
- startpreference.sh A-4
- stopall.sh A-4
- stoppreference.sh A-4

T

- Timeout
 - セッションのタイムアウト 3-4
- tnsnames.ora A-4
 - 概要 5-10
 - 編集 5-10

U

- ui_config.xml A-5
- unRegisterSession.bat A-5
- unregistersession.sh A-5
- URL
 - パスワードを表示しない 8-4
- URL および Discoverer 8-2
 - Discoverer Plus の URL 引数 8-7
 - Discoverer Viewer の URL 引数 8-13
 - Discoverer の汎用 URL 引数 8-5
 - URL とともに Discoverer を使用する理由 8-2
 - URL パラメータの構文 8-2
 - URL パラメータの使用例 8-4
- URL を使用した Discoverer の起動 8-2, 8-4

V

- Visibroker 環境変数 C-2

W

- Web Cache
 - Viewer とともに使用 9-6
 - 動作方法 9-5
 - 利点 9-4

- Windows サービス
 - Discoverer 4-2
 - 開始されるとき 4-3
 - 概要 4-2
 - 手動による開始方法 4-3
 - 手動による開始に変更する方法 4-5
 - 手動による停止方法 4-4

X

- X Server
 - UNIX での構成 3-17
 - グラフとチャートの表示 3-17
- XSL スタイルシートのプーリング 12-11

あ

- アクセス可能性
 - framedisplaystyle 構成 8-8
 - JAWS 8-8, A-10
 - JAWS の問合せ遅延 A-10
- 暗号化
 - Discoverer による通信の暗号化を確認する方法 13-21
 - イントラネットでの暗号化を使用して Discoverer を構成する方法 13-20
 - ファイアウォールを通して暗号化を使用する Discoverer の構成方法 13-20

い

- イントラネット
 - イントラネット・ユーザーおよびファイアウォールを通して Discoverer にアクセスするように Discoverer を構成する方法 13-21
 - イントラネットでの Discoverer の構成方法 13-19

え

- エンタープライズ情報ポータル 11-2

か

- 拡張性 12-2
 - Discoverer のアーキテクチャ 12-3
 - XSL スタイルシートのプーリング 12-3
- 環境設定

Discoverer 環境設定とは 7-2
Discoverer システム環境設定 7-3
Discoverer システム環境設定のリスト 7-15
Discoverer ユーザー環境設定 7-3
Discoverer ユーザー環境設定のリスト 7-6
すべてのユーザーのユーザー環境設定を設定する方
法 7-5
編集 7-2
ユーザー別に設定する方法 7-5
環境変数 C-2

く

グラフの作成
UNIX に表示されないグラフ 3-17
X Server の構成 3-17

こ

構成作業
情報の入手方法 1-2
構成ファイル
discwb.sh A-3
plus_config.xml A-3
pref.txt A-3
registersession.bat A-4
registersession.sh A-4
startall.sh A-4
startoad.sh A-4
startpreference.sh A-4
stopall.sh A-4
stoppreference.sh A-4
tnsnames.ora A-4
ui_config.xml A-5
unregistersession.bat A-5
unregistersession.sh A-5
構成ファイルの場所 A-2

さ

サーバー・マシン
シャットダウン 4-6
最小のセキュリティ設定 3-3

し

シャットダウン 4-6

Discoverer システム全体 4-7
個々のサーバー 4-6

せ

接続 2-2, 3-5
パブリック 2-2
プライベート 3-5
「接続の作成」 ページ
「Oracle Applications ユーザー」 チェック・ボック
ス 14-4, 14-5
前提条件
Plus および Viewer の実行 xi

つ

通信プロトコル
HTTPS について 13-18

て

データベースのセキュリティ
概要 13-3
デモ・データベース 1-3, 3-2
概要 3-2
実行方法 3-2

と

トレース情報 B-2
生成方法 B-2

ね

ネットワークのセキュリティ
Discoverer Plus 13-6
Discoverer Viewer 13-5
概要 13-5

は

場所
構成ファイル A-2
パスワード
URL にパスワードを表示しない 8-4
破損した pref.txt ファイル C-2
パフォーマンス

- Discoverer のパフォーマンス 12-2
- Discoverer のパフォーマンスを向上する方法 12-3
 - Case Storage アイテム・プロパティを正しく設定する 12-6
- DECODE 関数を使用しない「select all parameter values」オプションの使用 12-5
- Discoverer Administrator ヒントの使用 12-6
- Oracle9iAS Web Cache の使用によって 12-10
- 個別値を含むテーブルの値のリストに基づく 12-8
- サマリー・フォルダの使用 12-5
- システムのキャッシュ設定を変更する 12-9
- データベースからのフェッチ行で使用される配列のサイズを増やす 12-7
- ビジネス領域およびフォルダの表示時間の短縮 12-4
- ワークシートを夜間に実行するようにスケジュール 12-9
- パフォーマンスおよび拡張性最適化 12-2

ひ

- 非武装地帯 (DMZ)
 - 概要 13-17
- 表記規則 x
- 表示オプション
 - 概要 10-6
 - 表示テンプレート 10-6
- 表示テンプレート 10-6
 - 作成方法 10-14

ふ

- ファイアウォール
 - イントラネット・ユーザーおよびファイアウォールを通して Discoverer にアクセスするように Discoverer を構成する方法 13-21
 - 概要 13-16
 - ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法 13-19, 13-20
 - ファイアウォールを通して暗号化を使用する Discoverer の構成方法 13-20
 - ポリシー 13-18
- ファイルの場所 A-2
- 複合アプリケーション環境 14-5
- 複数のマシンへのインストール

- Discoverer の構成 5-6
- 種類 5-11
- 理由 5-2
- ブラウザの外観
 - 設定 10-9
- 分散インストール 5-2

ほ

- ポータル
 - Oracle9iAS Portal 11-2

も

- 問題の診断 B-2

よ

- よくある質問 13-16, C-2

ろ

- ログイン中のネットワーク・エラー C-2
- ログイン・ネットワーク・エラー C-2